

2010年度 リサーチペーパー

日本人テニスプレーヤー(女子)の  
メジャートーナメント出場機会促進に関する  
研究

Study on  
How to Promote  
Japanese Tennis Player's(Women) Participation  
To Major Tournaments

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻

トップスポーツマネジメントコース

5010A313-8

佐藤 直子

Naoko Sato

研究指導教員： 平田竹男 教授

## 目次

第1章	背景	5
第1節	日本テニス界の歩み	5
第2節	現在のテニスの界の衰退	6
第1項	成績の低迷	6
第2項	日本のテニス人口とテニス施設の減少	6
第3項	日本のテニス施設	9
第3節	筆者の立場	10
第1項	経歴	10
第2項	現在のテニストーナメント環境	10
第4節	先行研究	12
第5節	目的	12
第2章	手法	13
第1節	ITF トーナメントの構造	13
第2節	WTA トーナメントにおける ITF トーナメントの位置づけ	13
第1項	WTA ランキングシステム	14
第3節	Nation Strategy Metrics	15
第4節	Nation Strategy Index	15
第5節	ITF トーナメント開催時期に関する分析	16
第6節	日本人選手の ITF トーナメントに対する意識	17
第3章	結果	17
第1節	WTA トーナメントと ITF トーナメント	17
第2節	ITF トーナメントの分析	20
第3節	WTA ポイントと ITF トーナメントに関する分析	25
第1項	ITF トーナメント優勝回数とトーナメント開催数	25
第2項	NSI で見る ITF トーナメントのレベル	32
第4節	ITF トーナメント開催時期	36
第1項	ITF トーナメント年間スケジュール	36
第2項	地域別トーナメント開催数と開催頻度(期間別)	39
第3項	日本における ITF トーナメントへの出場外国人選手数	43
第5節	ケーススタディ 能登国際女子オープンテニス	47
第1項	地域性	47
第2項	テニストーナメントに対する意識調査	50
第3項	松岡修造氏インタビュー	60
第4章	考察	61

第1節	WTA トーナメントと ITF トーナメントの関係	61
第2節	イタリア・ロシアの成功要因	62
第1項	ITF トーナメントの成績	63
第2項	ITF トーナメントの開催数	63
第3節	ランキング向上に寄与する ITF トーナメントへの出場	64
第1項	10000 ドルトーナメント	64
第2項	25000 ドルトーナメント	65
第3項	今後の日本及びアジアの ITF トーナメント環境	65
第4節	日本テニス界の今後	66
第1項	逆台形モデル	66
第2項	トリプルミッション	69
第5章	結論	73
第6章	謝辞	74
第7章	文献目録	75
図 1	世界 200 位以内の日本人選手数の推移	6
図 2	高校におけるテニス部とソフトテニス部員数の推移	7
図 3	日本のテニス人口の推移(1993～2009)	8
図 4	民間テニス事業所閉鎖一覧(都道府県別)	9
図 5	NSI WTA トーナメント	17
図 6	ITF トーナメント開催数及び賞金額の推移	20
図 7	地域別 ITF トーナメント開催数の推移	21
図 8	地域別 ITF トーナメント賞金額の推移	22
図 9	地域別 ITF トーナメント開催数	23
図 10	賞金額別 ITF トーナメント	24
図 11	NSM 2009 年	25
図 12	NSM 2004 年	26
図 13	国別 ITF トーナメント開催数における賞金額の内訳	27
図 14	ITF トーナメント優勝回数の変遷	28
図 15	Wimbledon におけるアメリカ、ロシアの割合の変遷	29
図 16	Wimbledon2010 本戦出場選手の国籍の割合	30
図 17	国別 WTA ランキングの階層分布	31
図 18	NSI \$ 10000(地域別)	32
図 19	NSI \$ 25000(地域別)	33
図 20	NSI \$ 10000(国別)	34
図 21	NSI \$ 25000(国別)	35

図 22	ITF トーナメント年間試合数推移(53 週)	36
図 23	ITF トーナメント地域別割合	37
図 24	ITF トーナメントカレンダー (2010)	38
図 25	ITF トーナメント(1 週～18 週)	39
図 26	ITF トーナメント(19 週～23 週)	40
図 27	ITF トーナメント(24 週～33 週)	41
図 28	ITF トーナメント(34 週～53 週)	42
図 29	日本開催 ITF トーナメント出場外国人選手数	43
図 30	地域別日本開催 ITF トーナメント出場選手(2010 年)	44
図 31	日本国内トーナメント参加外国人出場選手数	45
図 32	能登国際女子オープン来場者数	47
図 34	能登町民の国際大会開催の評価	48
図 35	能登国際が地域活性化につながるか	49
図 36	大会の印象(児童対象)	50
図 37	国内外トーナメント参加状況	51
図 38	ITF トーナメント参加状況	52
図 39	能登国際女子オープンテニスへの参加動機	53
図 40	日本のトーナメント数についてどう思うか	54
図 41	海外を拠点にプレーしたいと思う	55
図 42	4 大オープンに出場したいと思う	56
図 43	引退後の生活が不安である	57
図 44	引退後もテニスをしたと思う	58
図 45	現在の主な収入は何か	59
図 46	WTA と ITF の関係図	61
図 47	逆台形モデル(平田・中村、2006)	68
図 48	トリプルミッション(平田・中村、2006)	69
表 1	2010 Sony Ericsson WTA Tour Ranking System	14
表 2	ITF WOMEN' S CIRCUIT CALENDAR	16
表 3	WTA トーナメント Cutoff Ranking と WTA Point	18
表 4	クルム伊達公子選手のトーナメント出場歴(2008)	19
表 5	日本開催 ITF トーナメントに対するアジア開催 ITF トーナメントとアジア人 参加選手数 ITF 資料より筆者作成	46
表 6	地域活性につながる理由	49
表 7	主要国の WTA の STEP3 段階評価	62

# 第1章 背景

## 第1節 日本テニス界の歩み

用具の調達が困難であったことから、ゴムボールを使う日本の独自の軟式テニス(現在のソフトテニス)を考案し、独自の発展を遂げた。その軟式テニスで育った選手(熊谷一彌、清水善造、佐藤次郎等)が硬式テニスに転向し、ヨーロッパ、アメリカに転戦し始める。彼らはその独特のテニス(軟式テニスで培われたドライブ)で大活躍し、世界を驚かせた。清水は1920年のウィンブルドン選手権「チャレンジ・ラウンド」<sup>1</sup>で決勝に進出し、当時の世界ナンバー1だったアメリカのビル・チルデンに肉薄した。また、その年に開催された第7回アントワープオリンピックで、日本がシングルス、ダブルス共に銀メダルを獲得した。これが、日本として初めてのオリンピックのメダル獲得であった。テニスが日本の国民的スポーツになる契機となったのは、1959年現天皇陛下・皇后陛下の御成婚(1959)が「テニスの恋」から始まったことから空前のテニスブームとなり、テニスをしない女性もテニスラケットを持ち歩くという現象が起こった。その後一回納まったテニス人気は、再び「エースをねらえ」(週刊マーガレット掲載スポ根漫画1973～1980)(山本鈴美香)で再び盛り上がり、少年少女のテニスブームを喚起させた。こうしたことが相まって、当時は各所でテニスコートは満杯状態となり、テニススクールも大盛況であった。

日本の女子選手としては、1952年に日本人女子選手として初めて、ウィンブルドンに加茂幸子選手が出場した。そして1975年に沢松和子選手が、アン・キヨムラ選手(アメリカアメリカ)と共にウィンブルドンのダブルスに優勝した。その年、沢松選手は引退され、筆者一人が世界の女子プロサーキットを回る日本人であった時代があった。テニス人気は1970年代に拡大し、テニス場が日本各地に設けられた。土地の有効利用として全国各地にテニスコートが整備され、会社の福利厚生施設や自治体のスポーツ施設、別荘地のペンションなどにもテニスコートが設けられた。多くの人にテニスは親しまれていた。その後は1990年代～2006年頃まで、日本テニス(女子)は常に世界のトップ30に入り優秀な成績を残してきた。

---

<sup>1</sup>男子シングルスは1878年、女子シングルスは1886年から「チャレンジ・ラウンド」(Challenge Round, 挑戦者決定戦)と「オールカマーズ・ファイナル」(All-Comers Final)方式で優勝を決定していた。大会前年度優勝者を除く選手は「チャレンジ・ラウンド」に出場し、前年度優勝者への挑戦権を争う。前年度優勝者は、無条件で「オールカマーズ・ファイナル」に出場できる。チャレンジ・ラウンドの勝者と前年度優勝者による「オールカマーズ・ファイナル」で、当年度の選手権優勝者を決定した。出典:Lance Tingay, "100 Years of Wimbledon" (1977)

## 第2節 現在のテニスの界の衰退

### 第1項 成績の低迷

しかしながら、バブル崩壊後、日本企業の業績不振の影響もあり、テニス場及びテニスクラブが相次いで廃止され、現在では予約で満杯の状態になることは極稀なケースとなっている。また近年、国際舞台で活躍するテニス選手が日本から輩出されておらず、トップ50位に入ることすらままならない状態である。こうした競技水準の低下もあり、テニスが地上波で放送される機会は4大オープン<sup>①</sup>ではウィンブルドンテニスのみでの放送に留まる。<sup>②</sup>こうした状況から1970年～1990年前半の華々しい日本テニス界は一転した。日本のテニス人口の減少、及びテニス施設の減少等、テニス離れの問題は深刻である。

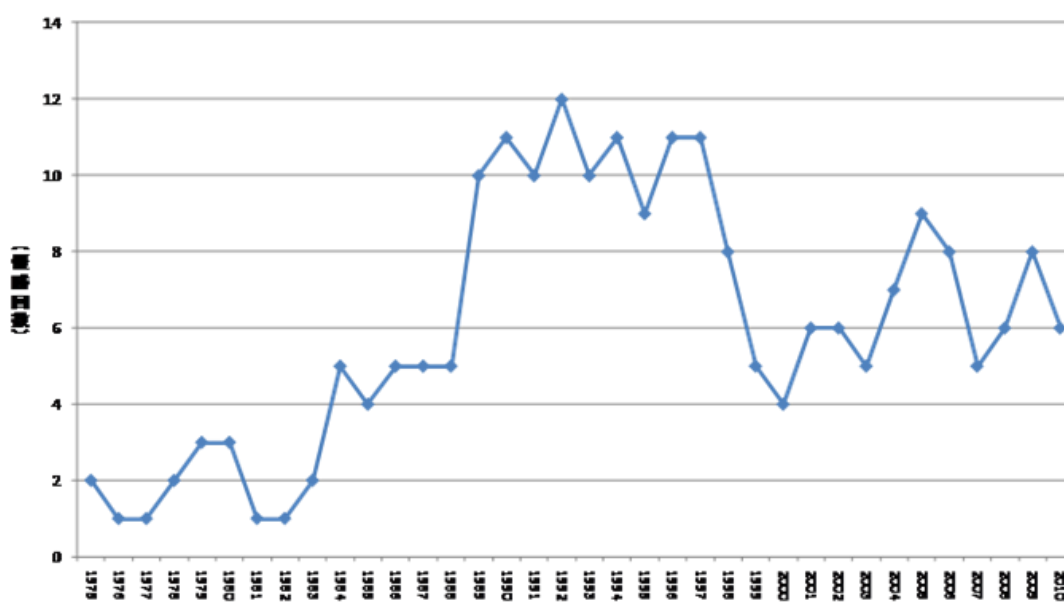


図1 世界200位以内の日本人選手数の推移

WTA ランキングシステムより筆者作成

### 第2項 日本のテニス人口とテニス施設の減少

現在の日本のテニス人口は、レジャー白書によると1993年に1380万人いた人口が減少の一途を辿り、2007年には最低の570万人、その後2008年650万人、2009年750万人と上昇している。

また笹川スポーツ財団発行スポーツ白書によると、年1回以上テニスを実施する成人

の推計人口は 403 万人とされている。最も多いのが 930 万人の水泳であり、日本で最も盛んな競技である。次にゴルフ(コース)成人男子が多く、昨今では女性にも人気があるスポーツである。コースには出ていないが、ゴルフを練習場でプレーしている人も 806 万人いる。プロリーグが存在する野球が 460 万人、サッカーが 450 万人である。日本代表戦がほぼ中継されるバレーボールが 445 万人。それに次ぎ、テニスは 403 万人である。中でもテニスはバレーボールと同様、女性から親しまれる競技であり、男女共に楽しめるスポーツである。<sup>③④</sup>テニスは「観るスポーツ」より「するスポーツ」の性質が強いことも特徴的である。<sup>⑤</sup>またテニスは今後テニスを行う可能性がある潜在人口の中でも過去経験者<sup>⑥⑦⑧⑨</sup>の割合が高く、「リバイバル需要」<sup>⑩</sup>を掘り起こすことが今後の課題であるとも指摘している。<sup>⑪⑫⑬⑭⑮</sup>

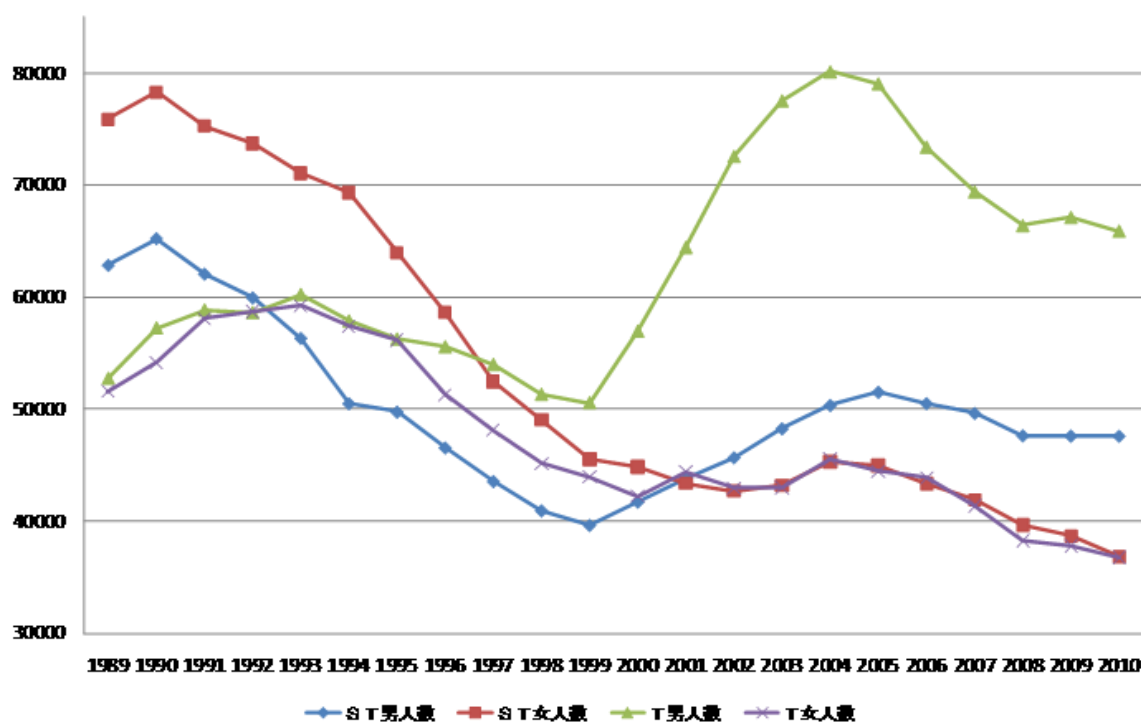


図 2 高校におけるテニス部とソフトテニス部員数の推移

文部科学省資料より筆者作成

中高生のテニス部員数も減少している。また、日本の高校におけるテニス(硬式)部とソフトテニス部の部員数を見ると女子のソフトテニス部員は1990年に最多の78312人、それ以降減少し続け2010年には36845名と半減してしまった。女子硬式テニス部員は1993年に59251人と最多であり、現在36786人である。しかし、こうした人口減少の中でも、男子は女子の場合と異なって人口減少に歯止めがかかり、1999年以降V字の回復を見せている。男子ソフトテニス部員数は、1990年に最多の65255人から1999年には39665人と底を打ち、2005年に51535人にまで回復し、2010年は47619人である。男子硬式テニス部員は、1999年に50573人であったのが2001年に80178人となり、軟式・硬式の中で最も多い。<sup>⑯⑰</sup>これは1999年週刊少年ジャンプでの連載が始まった漫画「テニスの王子様」効果と言われている。<sup>⑱</sup>そして、2005年を機に再び人口が低下し始

めている。それは「テニスの王子様」テレビアニメ終了と同時期である。<sup>⑲⑳</sup>この現象に対して、テニス選手の世界での活躍によってテニス人口減少の歯止めがかかることはなかった。1992年頃から、日本の伊達公子選手の活躍が始まり、1992年世界21位、1993年13位、1994年9位、1995年4位となっているが、試合のテレビ中継の視聴率の増加要因にはなかったが、<sup>2122</sup>テニス部員数の増減及びテニス人口の増減への影響は見られない。かつて日本は硬式テニスよりもソフトテニスが圧倒的多数派であったが、年代を追うごとに硬式テニスにシフトしている。2010年は、男子テニス(硬式)部、女子ソフトテニス部、女子テニス(硬式)部、男子ソフトテニス部の順に部員数が優位に高値である。<sup>23</sup>また中学から高校へ進学する際にテニス人口が激減することも、構造的な問題としてある。<sup>2425</sup>

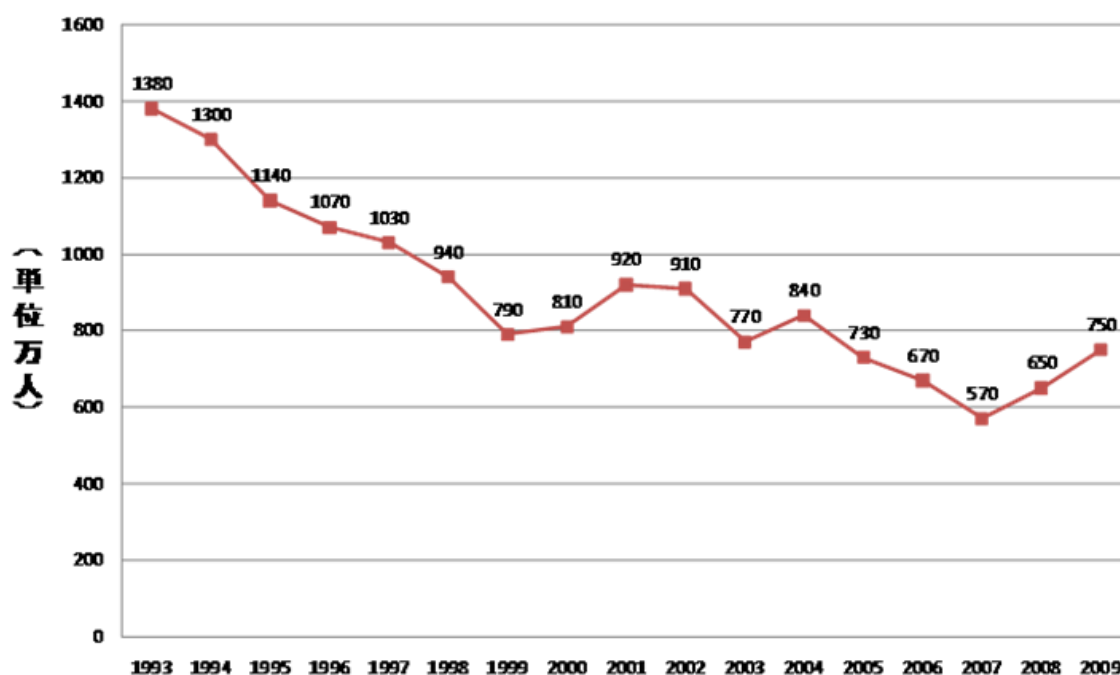


図 3 日本のテニス人口の推移(1993～2009)

レジャー白書 2002、2010 より筆者作成



### 第3項 日本のテニス施設

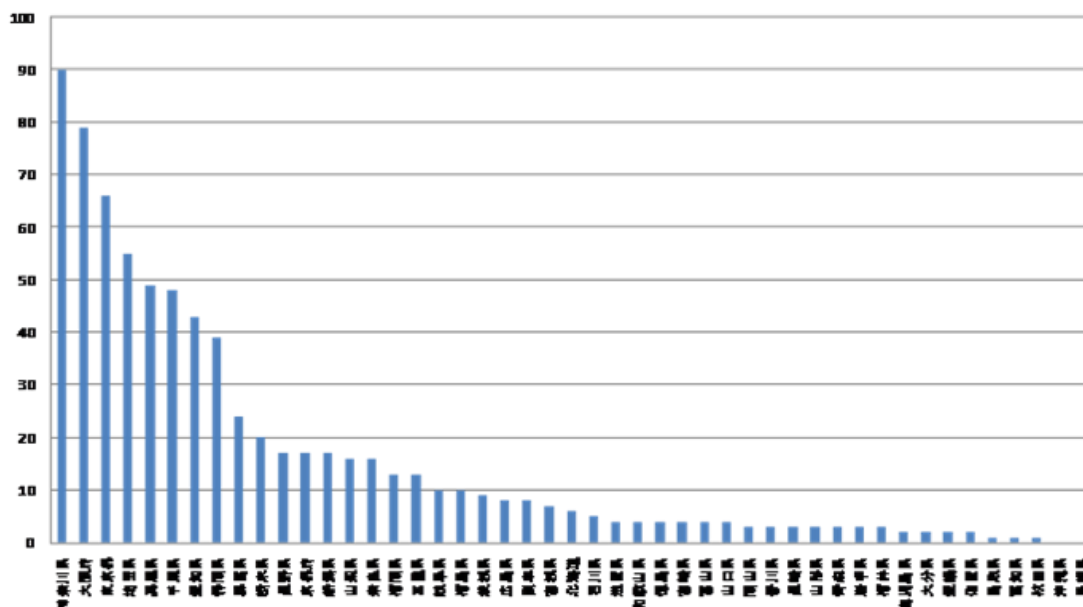


図 4 民間テニス事業所閉鎖一覧(都道府県別)

社団法人日本テニス事業協会. (2002).

テニス人口の減少に限らず、テニス場が全国で相次いで閉鎖されている。1992 年から 2001 年に掛けて閉鎖された民間テニス施設・事業所の中では、神奈川県が最も多く 90、続いて大阪府の 79、東京都の 66、埼玉県の 55、そして兵庫県の 49、千葉県の 48 であり、合計で 741 の事業所が廃止された。<sup>2627</sup>多摩川園ラケットクラブ(2002 年)、千代田生命保険スポーツソサエティ NO.1(2001 年)、成城グリーンプラザテニスクラブ(1999 年 10 月)などの名門クラブも廃止となっている。その後、ナショナルテニスコートとして日本のナショナルチームが使用していた朝日生命久我山テニスコート(2003 年 6 月)までも閉鎖された。2010 年に入ってから、鎌倉シーサイドテニスクラブ(2010 年 6 月)、富士見ヶ丘ローンテニスクラブ(2010 年 12 月)など、名門テニスクラブを含めその閉鎖に歯止めがかからない状況となっている。この状況は無視できないほど深刻であり、<sup>28</sup>その結果、「テニス難民」と呼ばれるテニスがしたくてもできない人達が存在するに至った。<sup>29</sup>

しかし、2001 年までの民間事業所の閉鎖や相次ぐ名門クラブの閉鎖の一方で、日本のテニス場(練習場も含む)は 2001 年 1349 に対し、2004 年 1531 と増えている。<sup>30</sup>ところが、テニスクラブの会員数を見ると法人会員数(口)は 2001 年 4932 口から 2004 年 3813 口と減少、個人会員数も 2001 年 113478 人から 2004 年 100265 人と約 13000 人減少しているのだ。<sup>3132</sup>ただし、日本のテニス産業の中で唯一若干の上り坂を見せているテニススクール産業<sup>333435</sup>のせいか、スクール生徒数が 2001 年 248829 人から 371743 人へと約 12 万人も増えている。

## 第3節 筆者の立場

### 第1項 経歴

筆者は日本プロテニス協会の第一号女性会員であり、プロテニスプレーヤーとして長期に渡り世界のテニスツアーに参戦してきた。ウィンブルドンへの挑戦は17年に渡り、グランドスラム大会の一つである全豪オープンシングルスでベスト8、ダブルスで準優勝の経歴を持つ幸運に恵まれた。筆者がテニスから得たものは、莫大である。女子プロトーナメントの創始者グラディス・ヘルドマン(1922～2003)をアメリカの母親として留学時代を過ごし、スポーツビジネスの世界を垣間見ることができた。世界のテニスツアーを回ったことによって、世界各国の選手が友達(一緒に厳しいテニスツアーを旅した戦友)であり、またその彼女はその国のNO1 テニスプレーヤーであった実績のある人間である。プロテニスプレーヤーという立場で、多くの著名な方々と触れ合う光栄にも浴した。

現役生活を退き、日本プロテニス協会の理事となり、JPTA 能登国際女子オープンテニスの実行委員長、トーナメントディレクターを任されたことから、現在のテニスの衰退の危機を打開したいと考えている。テニス人口が年々減り、テニス場が閉鎖され、日本プロテニス協会が実施していたトーナメントに限らず国内の数々のテニストーナメントがなくなってしまった。筆者の現役当時には考えられないことであった。

### 第2項 現在のテニストーナメント環境

しかし現在の世界に挑戦する環境は、筆者が現役時代の頃と比較して格段に充実している。筆者は世界のプロツアーを全く一人で、他の外国人選手に混ざって転戦した女子選手の先駆けであると自負している。<sup>2</sup>当時 WTA 世界ランキングはなく、選手が各自でトーナメントディレクターに手紙を書いて自分を売り込み、返事を待つという形式だった。その手紙の返事を待って遠征の道筋を決断し、自分で飛行機・ホテルを予約し、地図を見ながらトーナメント会場を探し、練習コートの予約、練習相手・ダブルスパートナーを自分で見つけ、そして試合もした。<sup>3</sup>1977年オーストラリアンオープンシングルスベスト8の成績を収めた。日本のテニス界にエージェントの存在がなかった時代に、スポーツビジネス及び契約の知識も全くないまま一人で企業と交渉し、日本人プロテニ

---

<sup>2</sup>筆者はこのやり方を先輩の神和住純氏、坂井利朗氏に習った。

<sup>3</sup>日本の女子テニスの1975年以降は、「佐藤直子(筆者)、井上悦子、伊達公子、沢松奈生子らが日本を代表するツアープロとして、世界上位に躍進。その伝統は現在の杉山愛、浅越しのぶにまで受け継がれている。」(日本テニス協会ホームページ「日本テニスの歴史「女子の躍進」

ス選手初のカテゴリー契約<sup>4</sup>に成功した。

それに対して現在の選手を取り巻く環境は非常に充実している。

国際テニス連盟(International Tennis Federation) (以下 ITF)は、本部をイギリスのロンドン郊外にあるローハンプトン(Roehampton)に置いている。1913年に国際ローンテニス連盟(International Loan Tennis Federation)としてフランスで設立され、1977年にITFに改編された。現在世界で203の協会が加盟している。

Women's Tennis Association(以下WTA)は1970年9月23日に女子プロテニスを統括する組織としてアメリカテキサス州ヒューストンで設立された。<sup>5</sup>トーナメントのカテゴリーが4つあり、グランドスラム、WTAトーナメント、プレミアトーナメント、インターナショナルトーナメントが存在する。

テニス界はこのITFとWTAの2つの組織が共存する形で存在している。選手の世界ランキングはWTAが設けたポイントランキングによって決められ、選手のトーナメントへの出場枠はWTAランキングによって決定される。このWTAランキング及び1983年に新設されたITFテニストーナメントは、画期的である。従来はジュニアの頃から実績を残した、いわゆるエリート選手のみが世界で活躍することができる限られた世界であった。しかし、このトーナメントは、より多くの選手にレベルが一つ上であるWTAトーナメントに出場するチャンスを提供する目的で設立され、テニスプレーヤーの裾野を世界中に広げてきた。さらに、ITFトーナメントの中でも、10000ドルトーナメントが53%で184大会、25000ドルトーナメントが32%で111大会開催され、両者合わせて295大会、つまり全体344大会のうち85%がこの2つのトーナメントであり、世界各地で毎週トーナメントが開催されている。従って、賞金額が一番低く、世界ランキングの低い選手にとって出場可能な10000ドル、そしてそれに次ぐ25000ドルトーナメントがより多くの選手に出場の機会を与え、プロテニスプレーヤーとしてのキャリアを保証するトーナメントであるといえる。

これが、筆者が能登国際女子オープンテニス(以下、能登国際)のトーナメントディレクターを務めた所以である。能登国際をはじめとする国内ITFトーナメントから、一人でも多くの日本人選手をWTAトーナメントに輩出させることが、選手のみならずテニス界の今後の発展に繋がると考えている。WTAトーナメント出場選手は、トーナメントに出場するだけでポイント、賞金を獲得できる。すなわち選手が継続的にプロ選手として大観衆の前でプレーすることが可能であり、また世界のトーナメントへの移動コストをはじめとする資金繰りの苦労も、賞金によって軽減される。従って、WTAトーナメントに出場することは、プロ選手としてのキャリアの継続を可能とさせる。つまりWTAトー

---

<sup>4</sup> YAMAHA (ラケット)、ellesse (ウェア)、東芝 (所属契約) ASICS (シューズ)、DUNLOP (ボール) 同期のビヨン・ボルグの契約形態と同様。

<sup>5</sup> このWTAがヒューストンで設立されたのは筆者のアメリカの母親グラディス・ヘルドマン (女子プロテニスツアーの創始者) がヒューストン在住であったことによる

ナメント出場選手になることが、プロ選手としてキャリアを続ける上でのひとつのハードルとなるのである。確かに日本のテニスは、東レ・パンパシフィックテニスはじめ世界に名立たるトーナメントを開催し、エリート選手達の活躍の場を提供し、世界からも高い評価を得ていることは事実である。一方、トップ選手に限らず、ITF トーナメントが目的とする、エリート選手に限らないより多くの選手に世界挑戦への機会を提供するという理念に対して、日本テニス界は今後目を向ける必要があるのではないだろうか。すなわち、日本人選手を WTA トーナメントに出場させる為には、今後日本テニス界は ITF トーナメントに対してどうあるべきなのか、ということである。

#### **第4節 先行研究**

テニスのトーナメントに関する研究としては、海外の文献が数多く見られる。Rosen(1986) は、トーナメントの賞金が高いほど、ランキングが高い選手が優勝していることを明らかにした。また、Gilsdorf ら(2008)は、その Rosen のモデルを用いて、女子のトーナメントにおいても賞金が高い大会ほど、ランキングの高い有名な選手が優勝していることを明らかにした。また、テニスプレーヤーの育成には競争させることが重要である(MacCurdy, 1999)ことを示した研究や、一方で、多くの大会への参加がエリート選手の育成に必要であるとは必ずしも言い切れないことを明らかにした(Crespo, et al. 2003)論文などが存在する。

しかしながら、国内においてはテニストーナメントや選手のランキングに焦点を当てた論文はない。

#### **第5節 目的**

日本人テニスプレーヤーを WTA トーナメントに出場させる為には、今後の日本テニス界が行うべき ITF トーナメントに求める発展策の示唆を得る。

## 第2章 手法

### 第1節 ITF トーナメントの構造

ITF トーナメントが 1983 年発足以降どのような発展を遂げているのかを明らかにした。その結果から ITF トーナメントの傾向を分析する。

### 第2節 WTA トーナメントにおける ITF トーナメントの 位置づけ

各賞金額大会による ITF トーナメントの獲得ポイントが、WTA トーナメント出場に与える影響を明らかにした。WTA トーナメントにおける Cutoff Ranking(足切り順位)に相当する ITF トーナメントで獲得可能なポイント数の分析、及び WTA 出場選手の出場歴の分析を行った。

## 第1項 WTA ランキングシステム

WTA トーナメントは、上位ランキング者から順にエントリーが認められる。そして出場者の中で最もランキングの低い選手のランキングを「CUTOFF Ranking」(以下CUTOFF)と言う。また、ランキングは1年間に出場したWTA トーナメント、ITF トーナメントの中で最も成績の良い上位16 トーナメントの総計ポイントの多寡により決定される。またそれぞれのトーナメントにおいて、選手は何回戦まで勝ち残ったかの成績によりポイントを獲得する。

表 1 2010 Sony Ericsson WTA Tour Ranking System

WTA 提供資料より

2010 Sony Ericsson WTA Tour Ranking System												
	W	F	SF	QF	R16	R32	R64	R128	QLFR	Q3	Q2	Q1
ITF\$100000+H		150	110	80	40	20	1			6	4	1
ITF\$100000+H		150	110	80	40	1						
ITF\$100000		140	100	70	36	18	1			6	4	1
ITF\$100000		140	100	70	36	1						
ITF\$75000+H		130	90	58	32	16	1			6	4	1
ITF\$75000+H		130	90	58	32	1						
ITF\$75000		110	78	50	30	14	1			6	4	1
ITF\$75000		110	78	50	30	1						
ITF\$50000+H		90	64	40	24	12	1			6	4	1
ITF\$50000+H		90	64	40	24	1						
ITF\$50000		70	50	32	18	10	1			6	4	1
ITF\$50000		70	50	32	18	1						
ITF\$25000		50	34	24	14	8	1			1		
ITF\$25000		50	34	24	14	1						
ITF\$10000		12	8	6	4	1						
ITF\$10000		12	8	6	1	0						

そこで、本研究ではWTA トーナメントの最高峰であるウィンブルドン選手権のMain Draw(本戦)及びQualify(予選)のCUTOFFを調査し、そこからCUTOFF選手が有するトーナメント獲得ポイントを明らかにした。

### 第3節 Nation Strategy Metrics

国別の ITF トーナメントの開催数と成績の関係について分析した。トーナメントの開催数を横軸に、トーナメントの優勝回数を縦軸に国別にプロットした。成績に対するトーナメントの開催数の増減によって、ITF トーナメントで成功している国を抽出した。また、過去との比較を行い諸外国の変化を分析した。

### 第4節 Nation Strategy Index

Nation Strategy Index(以下 NSI)を用いて 10000 ドル、25000 ドルトーナメントの難易度の地域別、国別比較を行った。ITF トーナメント出場選手のシードランキングを調べることで、ポイント獲得が比較的容易なトーナメントを明らかにした。

その国で開催されたトーナメントの第1シードランキングの平均を横軸に、第8シードランキングの平均を縦軸に置いた。その理由は、32名出場トーナメントの仕組みとして、シード選手は準々決勝、すなわちベスト8まではシード選手同士の対戦がない事にある。すなわちシードは最もポイントを獲得する可能性が高いことを意味しており、トーナメントレベルの基準として採用した。

そして、その国のトーナメント開催数をバブルの大きさにして図示した。この結果から、選手達はトーナメントの選定時に、それぞれのトーナメントレベルの比較が可能となる。これらの結果をふまえ、同賞金額トーナメントの中で、どのトーナメントに参加することが好ましいか判断することができる。

例えば 25000 ドルトーナメントで優勝を目標にしたい場合、第1位シード選手のランキングの値である横軸から国を比較する事で明らかになる。つまりランキングが低い国のトーナメントが、より勝機の高いトーナメントであるということである。NSIを用いて分析を行うことは、年間のトーナメントの戦略を立てる上で有効な判断材料のひとつとなる。

## 第5節 ITF トーナメント開催時期に関する分析

日本開催の ITF トーナメントは年間スケジュールの中で、どの様な時期に開催されているのかを明らかにした。

- 1 全世界及びアジアにおける日本の ITF トーナメント開催時期
- 2 ITF WOMEN' S Circuit Calendar から大会数の多寡を賞金額別に分析した。

表 2 ITF WOMEN' S CIRCUIT CALENDAR ITF WOMEN' S SCIRCUIT CALENDAR 2010 より筆者作成

Wk	DATE	EUROPE												ASIA / OCEANIA				AFRICA		N & C AMERICA		SOUTH AMERICA		DATE	Wk
1	DEC																						DEC	1	
2	JAN																							JAN	2
3	JAN																							JAN	3
4	JAN																							JAN	4
5	JAN	FRA	GER																					JAN	5
6	FEB	FRA		ESP																				FEB	6
7	FEB			ESP	POR	ISR																		FEB	7
8	FEB																							FEB	8
9	FEB																							FEB	9
10	MAR	FRA		ESP																				MAR	10
11	MAR	FRA	GER																					MAR	11
12	MAR	FRA	SUI																					MAR	12
13	MAR	FRA																						MAR	13
14	MAR																							MAR	14
15	APR																							APR	15
16	APR																							APR	16
17	APR																							APR	17
18	APR	FRA		ESP																				APR	18
19	MAY		GER	ESP																				MAY	19
20	MAY	FRA	CZE	ESP																				MAY	20
21	MAY																							MAY	21
22	MAY																							MAY	22
23	MAY		CZE	POR																				MAY	23
24	JUN	FRA	CZE	POR																				JUN	24
25	JUN	FRA	GER	POR																				JUN	25
26	JUN	FRA		ESP	POR																			JUN	26
27	JUN	FRA	GER	ESP																				JUN	27
28	JUL	FRA	GER	ESP																				JUL	28
29	JUL	FRA	GER	ESP																				JUL	29
30	JUL	FRA	GER	ESP																				JUL	30
31	JUL		GER	ESP																				JUL	31
32	AUG		GER																					AUG	32
33	AUG		GER																					AUG	33
34	AUG		GER	CZE																				AUG	34
35	AUG		GER	CZE																				AUG	35
36	AUG			ESP																				AUG	36
37	SEP	FRA		ESP																				SEP	37
38	SEP		POR	ESP																				SEP	38
39	SEP	FRA		ESP																				SEP	39
40	SEP	FRA																						SEP	40
41	OCT																							OCT	41
42	OCT																							OCT	42
43	OCT																							OCT	43
44	OCT																							OCT	44
45	NOV																							NOV	45
46	NOV																							NOV	46
47	NOV																							NOV	47
48	NOV																							NOV	48
49	NOV																							NOV	49
50	DEC																							DEC	50
51	DEC																							DEC	51
52	DEC																							DEC	52
53	DEC																							DEC	53



## 第6節 日本人選手のITF トーナメントに対する意識

2010年9月5日～12日に実施したJPTA能登国際女子オープンテニス2010にて、日本人選手を対象とした選手のITF トーナメントに対する現状把握と意識調査を行った。

### 第3章 結果

#### 第1節 WTA トーナメントとITF トーナメント

本節では、ウィンブルドン選手権の予選出場に必要なポイント数及び、ポイント獲得可能なITF トーナメントを明らかにした。

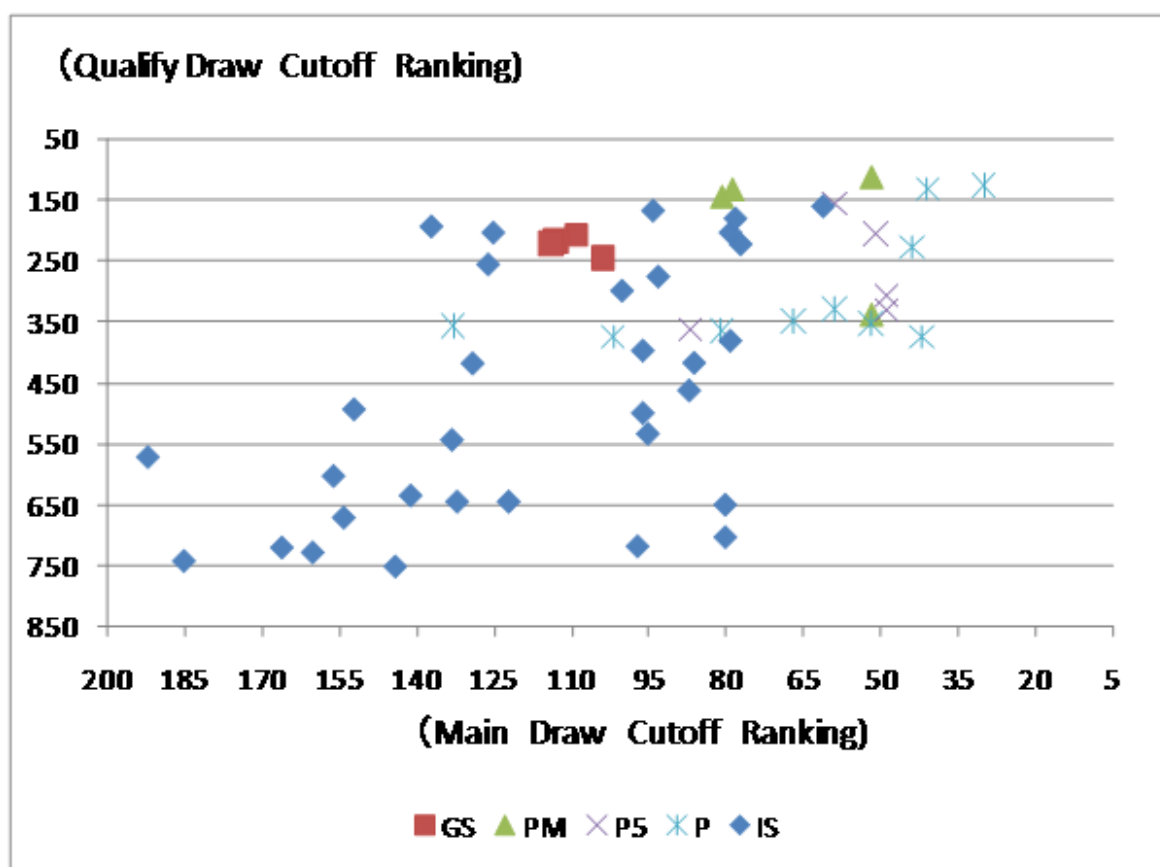


図5 NSI WTA トーナメント

ITF 資料より筆者作成

Main Draw を横軸に Qualify を縦軸に置いた NSI から WTA トーナメントの各カテゴリーのを見ると、最も開催数の多いインターナショナル(I S)は、Cutoff ランキングが低いトーナメントから、高いトーナメントまで様々である。最も低い Qualify 選手のランキングは 750 位、Main Draw は 200 位である。この結果から、I S の予選はランキング上位である必要は必ずしもないということである。またグランドスラムは、他のプレミアトーナメントよりも Main Draw、Qualify 共に出場選手数枠が多いため、ランキングは低い。最もランキングが高いトーナメントはプレミアである。

表 3 WTA トーナメント Cutoff Ranking と WTA Point

2010 Sony Ericsson WTA Tour Cut-Offs As of 10/27/2010

WTA 提供資料より筆者作成

	Cutoff Ranking		WTA Point	
	MD	QF	MD	QF
<b>GS</b>	<b>110</b>	<b>223</b>	<b>636</b>	<b>259</b>
<b>PM</b>	<b>66</b>	<b>182</b>	<b>917</b>	<b>326</b>
<b>P5</b>	<b>59</b>	<b>273</b>	<b>1015</b>	<b>190</b>
<b>P</b>	<b>65</b>	<b>299</b>	<b>972</b>	<b>163</b>
<b>IS</b>	<b>117</b>	<b>471</b>	<b>600</b>	<b>71</b>

次に各カテゴリーの Cutoff Ranking の平均とそれに値する WTA ポイントを分析した。グランドスラムは Main Draw(本戦)が 110 位、Qualify が 223 位であり、それに相当する WTA ポイントそれぞれは 636 ポイント、259 ポイントである。最もランキングが高く、獲得ポイントが必要なトーナメントはプレミア 5 である。東レ・パンパシフィックテニスはこの部類に属す。グランドスラムは最高クラスのトーナメントであるにもかかわらず、他のトーナメントよりも Cutoff は低い点の特徴である。

最下層のインターナショナルトーナメントの Main Draw のランキングとほぼ変わらない。これは前述のように、出場枠が他のトーナメントよりも多く、沢山の選手に出場機会が与えられていることによる。

表 4 クルム伊達公子選手のトーナメント出場歴 (2008)

WTA HP より筆者作成

トーナメント開催日	トーナメント名	場所	結果	賞金額	獲得ポイント数	16ベストポイント
2008.04.29	カンガルーカップ	岐阜	準優勝	5万ドル	56	<b>56</b>
05.06	福岡国際女子	福岡	準々決勝	5万ドル	18	<b>18</b>
05.13	久留米市ベストアメニティカップ	久留米市	準々決勝	5万ドル	18	<b>18</b>
06.01	東京有明国際女子 I	東京・有明	優勝	1万ドル	12	<b>12</b>
07.15	宮崎国際女子チャレンジャー	宮崎市	優勝	2万5千ドル	50	<b>25</b>
07.29	十勝・帯広	帯広市	優勝	2万5千ドル	50	<b>50</b>
09.02	セキショウ国際女子オープン	つくば市	準々決勝	2万5千ドル	14	<b>14</b>
09.13	東レパンパシフィック	東京・有明	予選決勝負け		30	<b>30</b>
09.29	AIGジャパンオープン女子	東京・有明	1回戦負け		2	
10.02	2008 OEC Taipei Ladies	台北	準々決勝	10万ドル+H	40	<b>40</b>
10.28	東京有明国際女子 II	東京・有明	2回戦負け	5万ドル	10	<b>10</b>
11.25	2008ダンロップワールドチャレンジ	愛知	2回戦負け	7万5千ドル	16	<b>16</b>
2009.01.05	オーストラリアン・オープン	オーストラリア	予選勝ちあがり1回戦負け	グランドスラム	60	<b>60</b>
02.11	PTT Pattaya Open	タイ	1回戦負け		1	
02.23	アメリカ クリアウオーター	アメリカ	準々決勝	5万ドル	18	<b>18</b>
03.16	アメリカ レディング	アメリカ	準々決勝	2万5千ドル	24	<b>24</b>
03.23	アメリカ ハモンド	アメリカ	準々決勝	2万5千ドル	14	<b>14</b>
04.06	スペイン モンゾン	スペイン	優勝	7万5千ドル	110	<b>110</b>
復活から1年					<b>543</b>	<b>515</b>

表はクルム伊達公子選手が復帰した2008年から1年間のトーナメント出場歴である。彼女がキャリアを開始した2008年は、最初からWTAトーナメントに出場するのではなく、日本国内のITFトーナメントに出場し、ポイントを獲得している。全18トーナメントに出場し、その内ITFトーナメントには14回に出場している。更に14試合の中で国内トーナメントには10回出場している。これは彼女がキャリアをスタートした1988年に国内ITFトーナメントに4回出場したが、1989年以降は海外のITFトーナメントに参加している。従って、現役時代のITFトーナメントの出場方法と復帰した2008年のITFトーナメントの出場方法とは大きく異なることが分かる。25000ドル、50000ドルトーナメントに出場する事で着実に成績を挙げ、75000ドルトーナメントで優勝し、ポイントを復帰1年で515ポイントを獲得している。またWTAランキングは、第4戦目で既に400位代になり、そして1年間でランキング144位まで順位を上げている。つまりITFトーナメントで確実に成績を残す事でWTAランキングを上げ、WTAトーナメントに安定して出場可能な水準まで引き上げる事が可能な事例である。

## 第2節 ITF トーナメントの分析

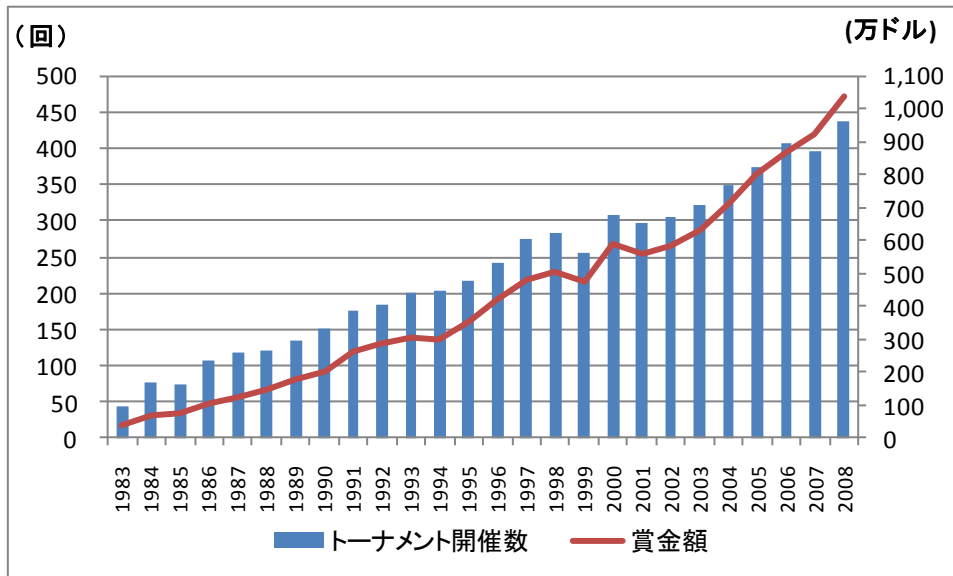


図 6 ITF トーナメント開催数及び賞金額の推移

ITF 資料より筆者作成

ITF トーナメントは、1983 年発足以来、右肩上がりに成長し、年間 400 試合を超えている。賞金額も同様に 1000 万ドルを超えている。

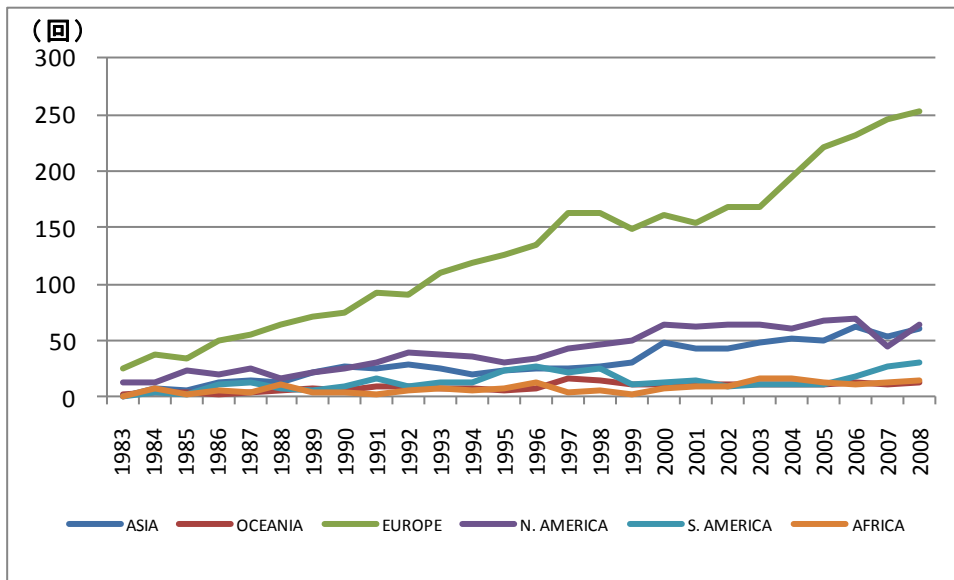


図 7 地域別 ITF トーナメント開催数の推移

WTA 資料より筆者作成

更に地域別で開催数の推移を見ると、ITF トーナメントの拡大はヨーロッパにおける拡大であるといえる。また、2007 年には、アジアの ITF トーナメント開催数が北アメリカを抜き、2 番目にトーナメント開催数が多い地域となっている。さらに、2006 年以降、南アメリカのトーナメント開催数にもまた増加がみられる。

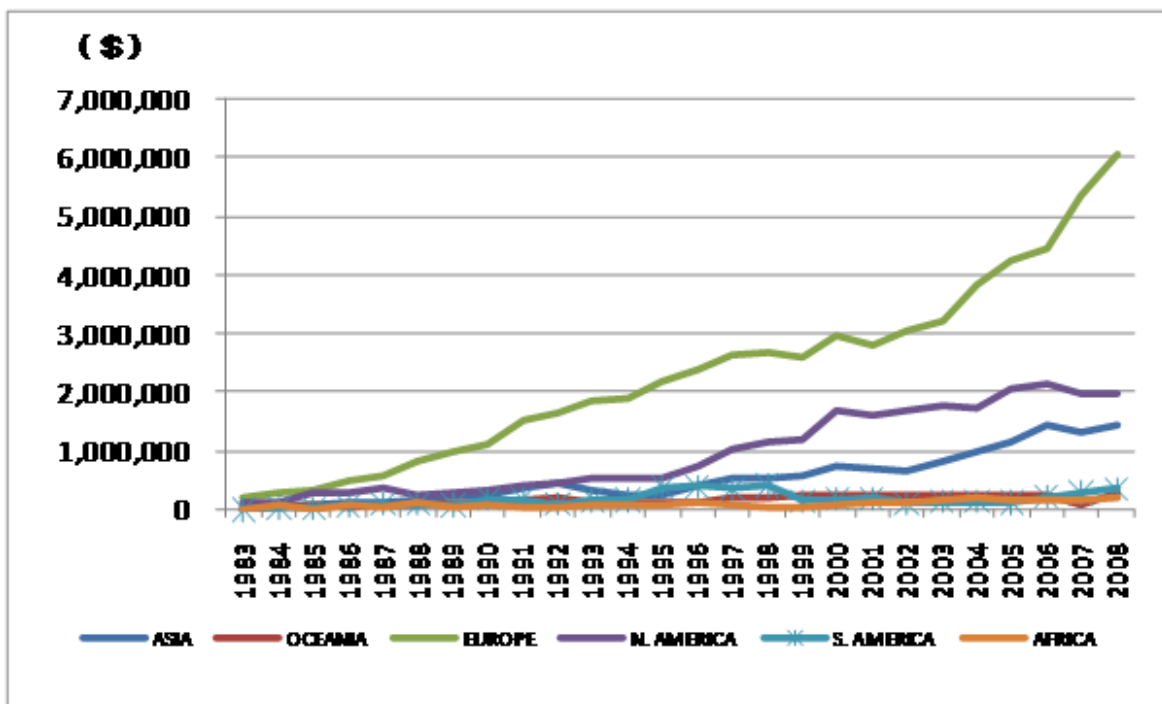


図 8 地域別 ITF トーナメント賞金額の推移

ITF 資料より筆者作成

次に地域別の ITF トーナメントの賞金額の推移をみると、ヨーロッパが最も多く 600 万ドルを超えている。大会数では、アジアと北アメリカはあまり変わらないが、賞金額では、北アメリカの方が優位である。従って、アジアより北アメリカの方が賞金額の高いトーナメントが開催されているということが分かる。ただし、アジアの賞金額は増加し続けており、北アメリカとの差は縮小傾向にある。

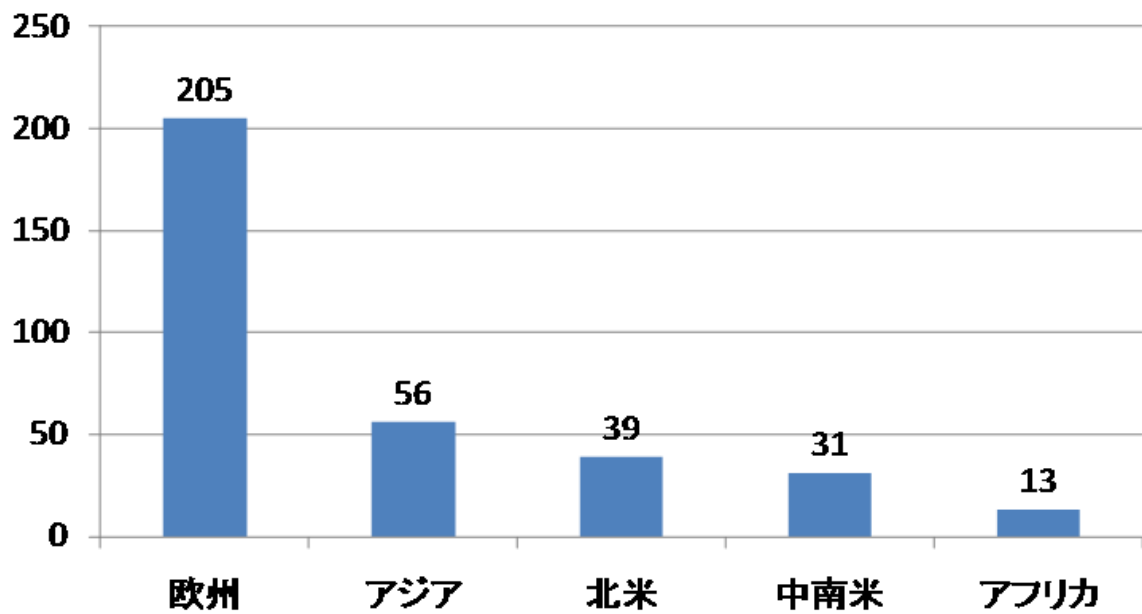


図 9 地域別 ITF トーナメント開催数

「ITF WOMEN' S CIRCUIT CALENDAR2010」より筆者作成

地域別 ITF トーナメント開催数を見るとヨーロッパは 205 大会、アジアは 56 大会、北アメリカが 39 大会、中南アメリカが 31 大会、アフリカが 13 大会である。

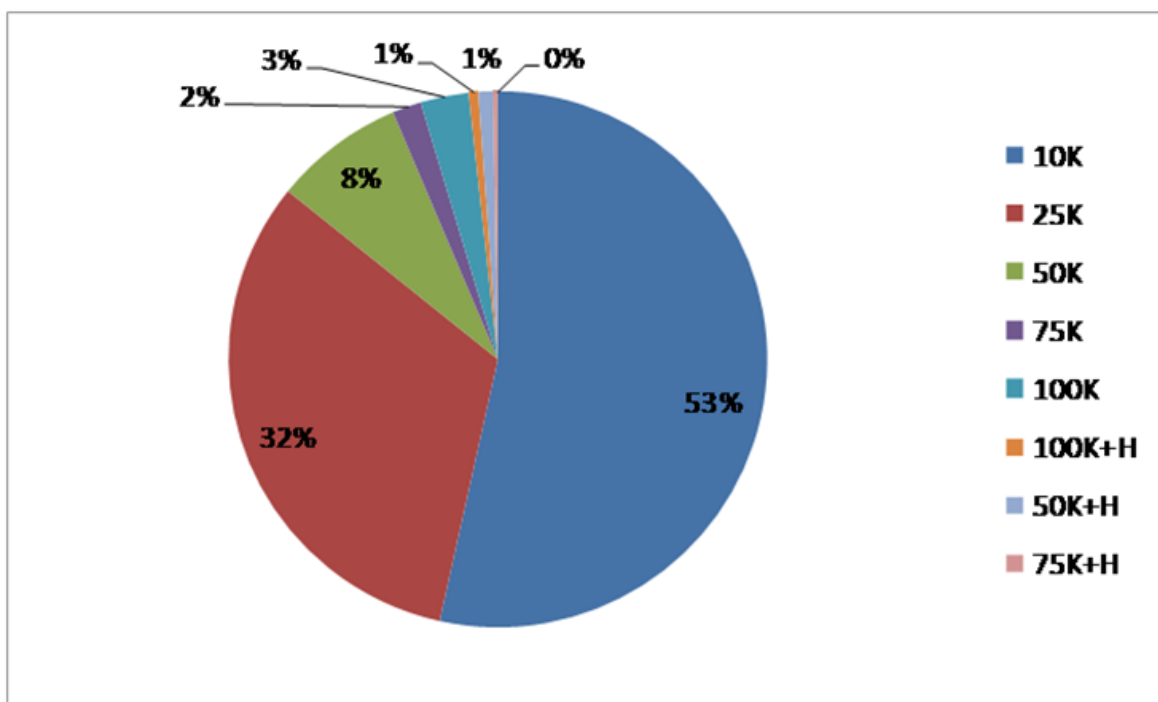


図 10 賞金額別 ITF トーナメント

ITF 資料より筆者作成

2010 年 ITF トーナメントの賞金額別トーナメント数を見ると、10 万ドルが 53%、25000 ドルが 32%、そして 50000 ドルが 8%である。つまり、ITF トーナメントの 85%は、10000 ドル及び 25000 ドルトーナメントの開催となっている。



### 第3節 WTAポイントとITFトーナメントに関する分析

本節ではITFトーナメントで成功している国と、その国の傾向を明らかにする。

#### 第1項 ITFトーナメント優勝回数とトーナメント開催数

図11から、2009年優勝回数が20回を超える国はロシア、イタリア、ドイツ、フランス、アメリカ、スペインである。その中でもロシアはトーナメント開催数が少なく、優勝回数が多い。ドイツもそれに近い傾向にある。またそれに対してイタリアはトーナメント開催数が多く、成績も良い。同様の傾向は、フランス、アメリカ、スペインにも見られる。更に優勝回数15回から20回の国を見ると、日本、イギリスは大会数が比較的多く、それに対して、アルゼンチンとチェコはトーナメント数が少ない。

次に2004年の優勝回数が多い国はチェコである。これは図11のロシアと同様に、自国開催のトーナメント数が少ない事が特徴的である。また、2004年時点では、ロシアとイタリア、フランスは2009年時程、優勝回数が多い。それに対して、アメリカは優勝回数、開催数いずれも2009年時よりも多い。

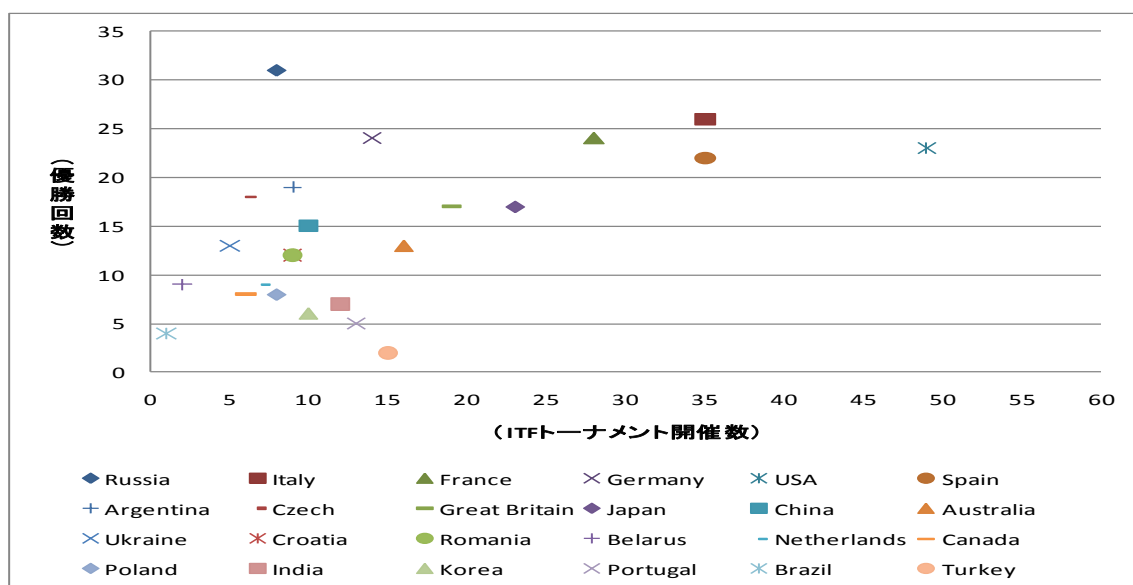


図11 NSM 2009年

ITF資料より筆者作成

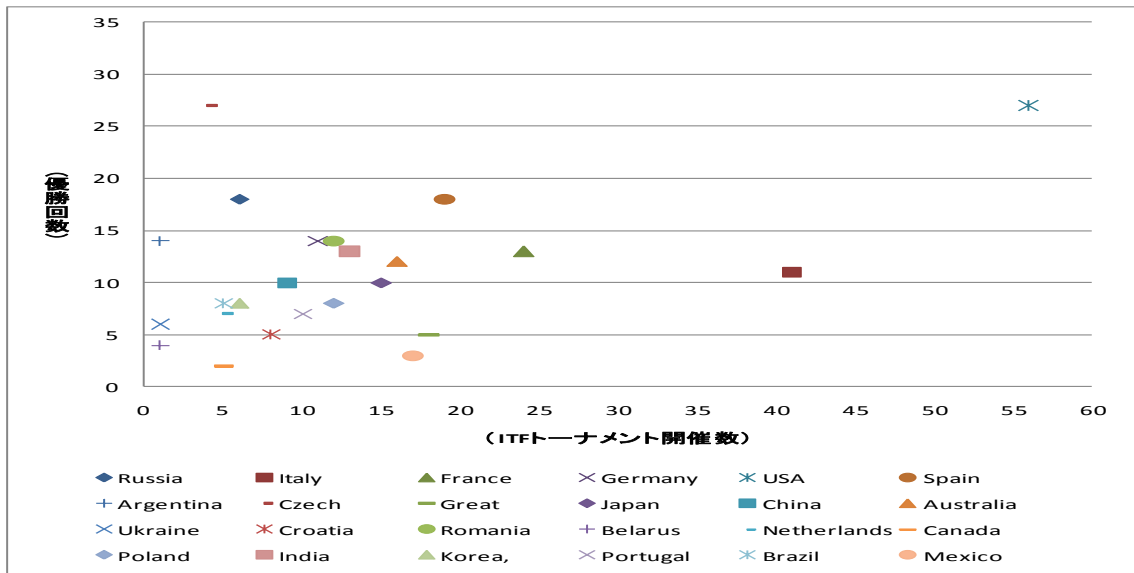


図 12 NSM 2004 年

ITF 資料より筆者作成

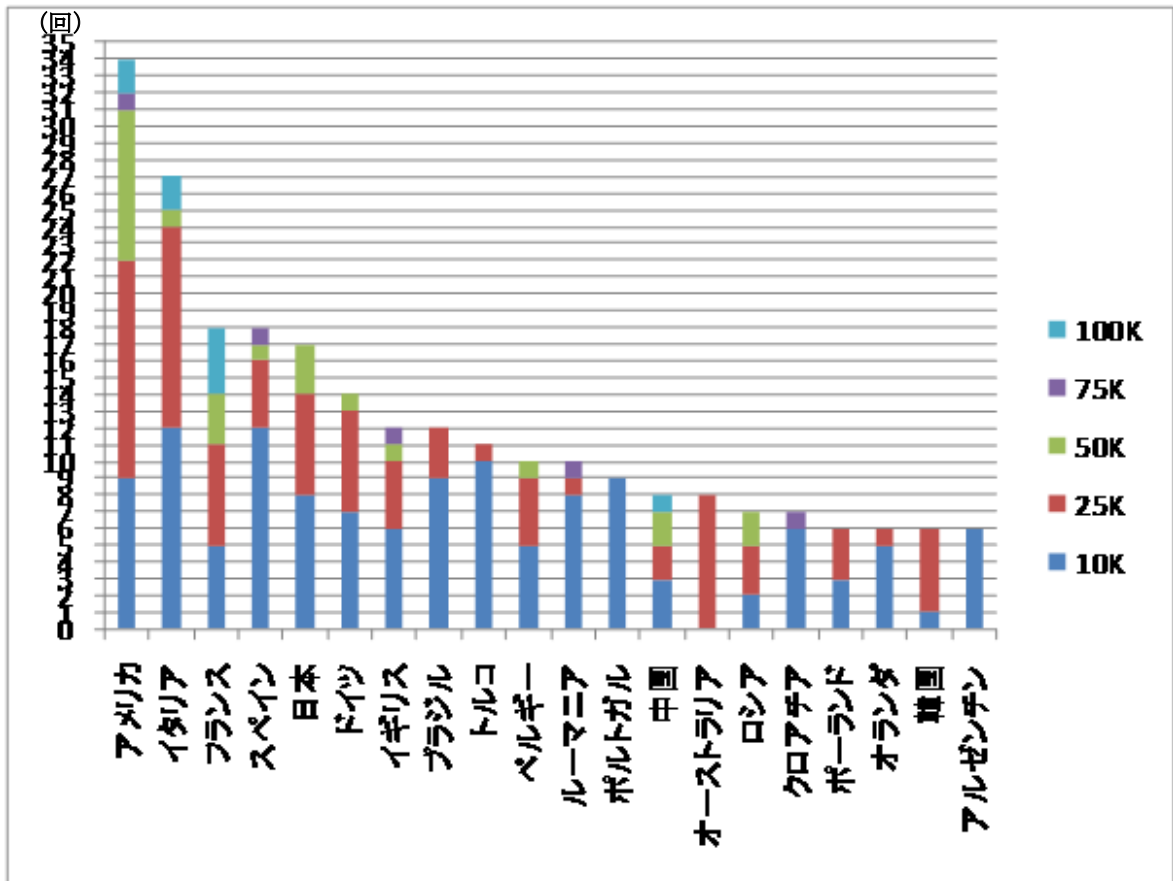


図 13 国別 ITF トーナメント開催数における賞金額の内訳

ITF 資料より筆者作成

GRAND SLAM 開催国はいずれも年間で 10 回以上 ITF トーナメントを開催していたが、唯一オーストラリアが 8 回に留まる。しかし、通常賞金額の異なるトーナメントを開催するが、オーストラリアは 25000 ドルトーナメントのみ開催するという、開催上位国の中でも特異なケースであった。(図 13)

また、アメリカ、フランス、イタリア、ドイツに共通することは、10000 ドルトーナメントの開催数よりも 25000 ドルトーナメント開催数が上回る。特にアメリカ、フランスにおいては、開催トーナメント数に占める 25000 ドル以上のトーナメントが 73%、72% という値が得られた。

次に ITF トーナメントの優勝回数を見ると、ロシアが最も多く 31 回優勝をしている。またフランスは 24 回、アメリカは 23 回優勝をしている。イタリアはロシアに次いで 2 番目に多い 26 回の優勝を果たしている。優勝回数では日本、イギリスがともに 17 回である。

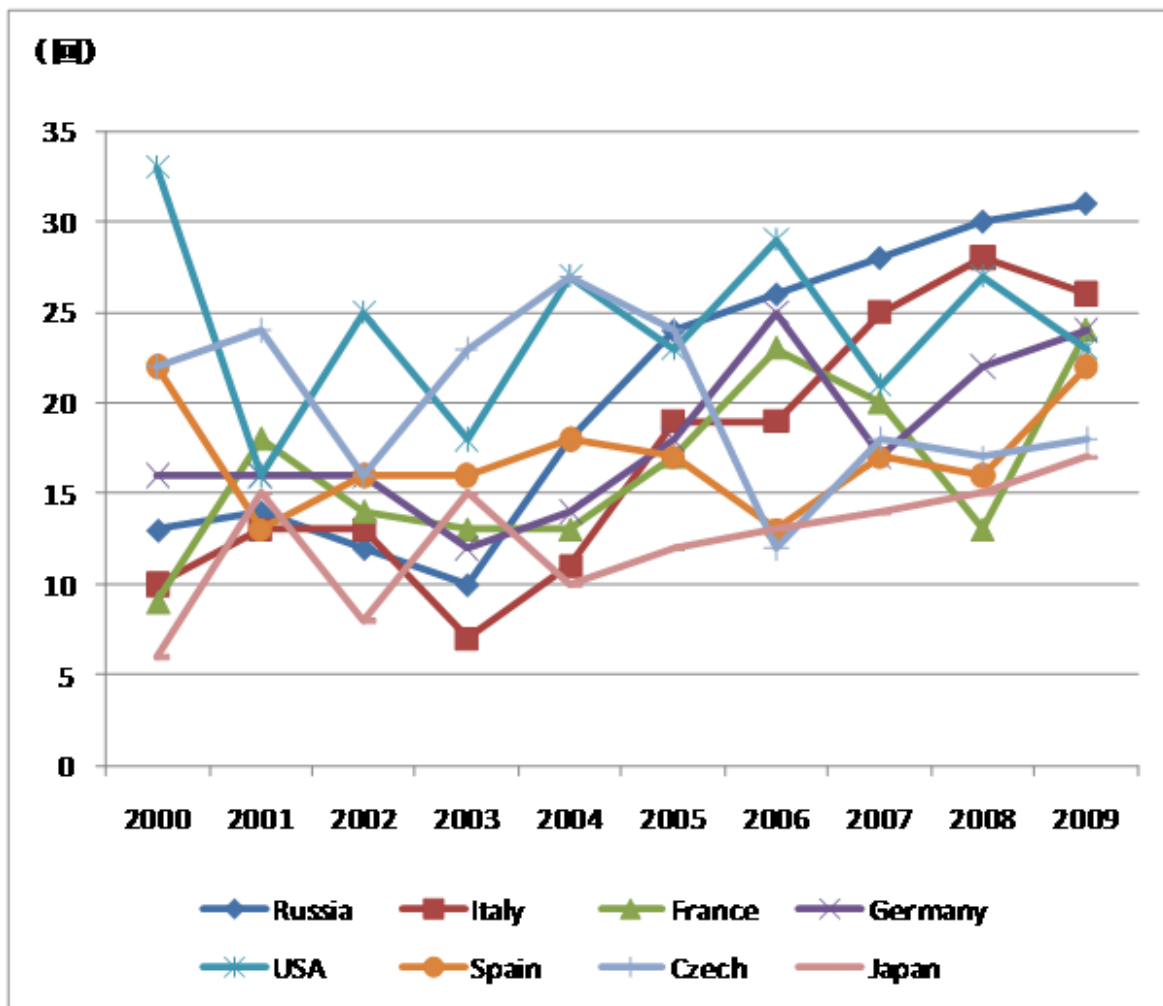


図 14 ITF トーナメント優勝回数の変遷

ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players

(2000、2001、2002、2003、2004、2005、2006、2007、2008、2009) より作成

ITF トーナメントの国別優勝回数の推移である。2000年に33回を誇っていたアメリカが2009年には23回となり、トップの座をロシアの31回に奪われている。2000年に10回と少なかったイタリアは、2009年には26回とアメリカを上回り、ロシアに次ぐ2位の地位に上がっている。

日本は2009年に17回と、歴代最高優勝数になっている。

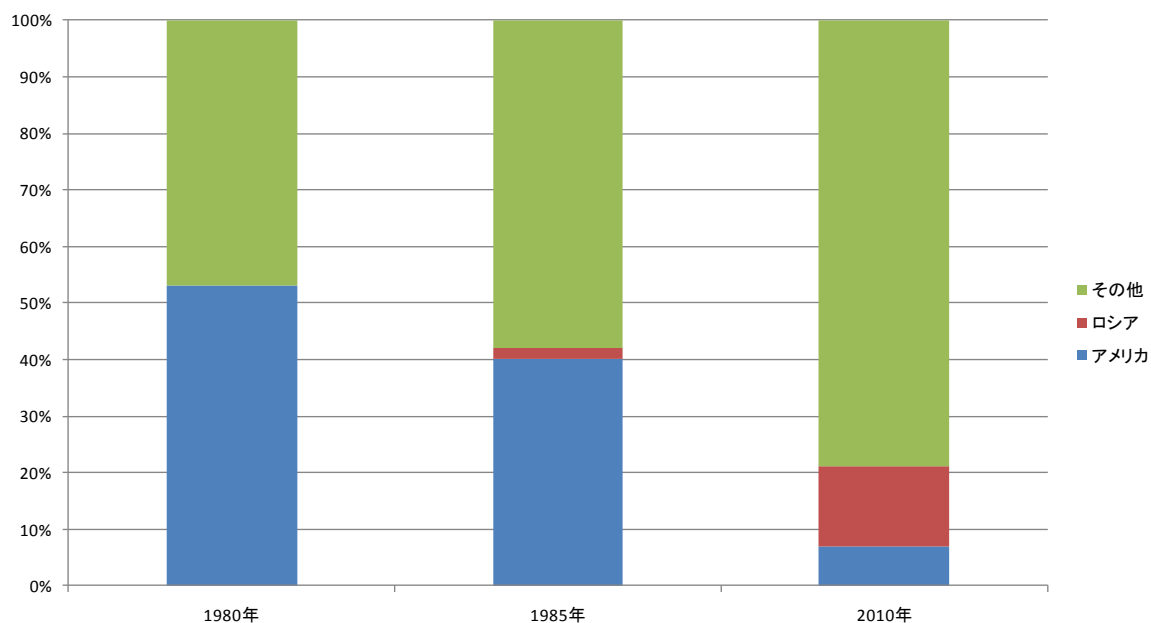


図 15 Wimbledonにおけるアメリカ、ロシアの割合の変遷

Wimbledon 提供資料より筆者作成

上の図はウィンブルドン参加選手の割合である。1980年<sup>6</sup>にはアメリカ人選手が52%を占めていたが、1985年には40%となり、2010年には何と7%となっている。1980年にロシア人選手は0であったが、1985年に若干現れ、2010年には世界で一番ウィンブルドン本戦出場選手の多い国となっている。

<sup>6</sup> 1980年はソ連連邦の首都モスクワでオリンピックが行われた年であったが、ソ連連邦のアフガニスタンへの侵攻を受けて西側諸国がオリンピックのボイコットを行った年である。それに対し、ソ連はスポーツ選手の海外派遣を自粛した年でもあった。

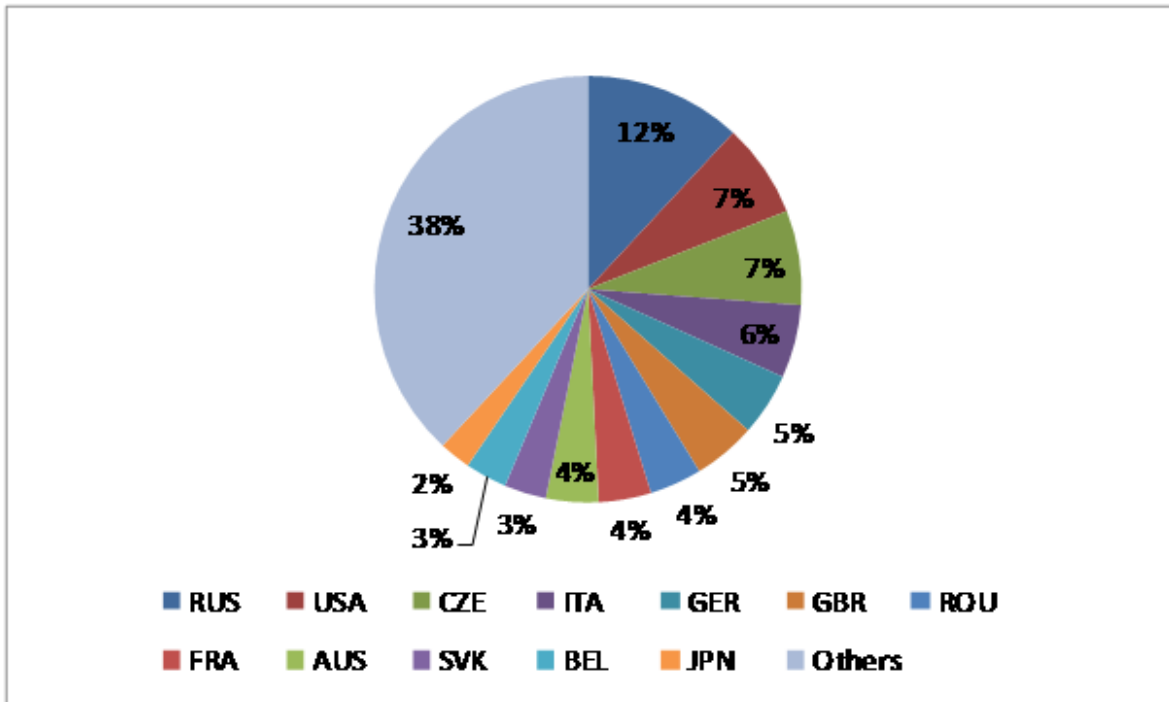


図 16 Wimbledon2010 本戦出場選手の国籍の割合  
Wimbledon 資料より筆者作成

Wimbledon2010 の Main Draw の国別出場選手を見るとロシアが 12%、アメリカが 7%、チェコが 7%、イタリアが 6%であった。NSM で好成績の値を出していた。ロシア、イタリア、アメリカの出場割合が高い。

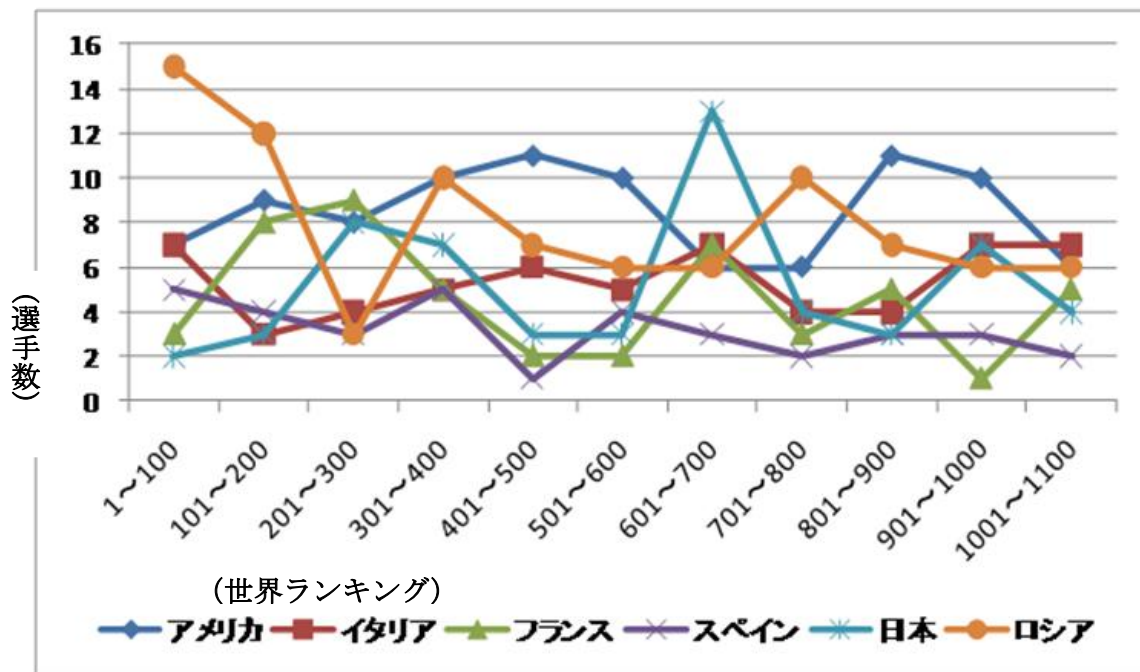


図 17 国別 WTA ランキングの階層分布

WTA 資料より筆者作成

国別の WTA ランキングの分布を見ると、ロシアの 1 位から 100 位の選手数が圧倒的に多い。各階層で選手を多く輩出している国はアメリカである。ITF トーナメントで好成績を残しているイタリアは 1 位から 100 位の選手は比較的多いが、100 位以下の選手数が少ない。この点でイタリアは NSM や Wimbledon2010 の出場数が多い結果に対して、実際の分布を見るとトップ選手の層は厚いが、下位ランキングの層は薄いことが分かった。また、日本は 1 位から 200 位まで選手数が少なく、200 位代の選手、600 位代の選手、900 位代の選手が多い。

## 第2項 NSI に見る ITF トーナメントのレベル

本項では、ITF トーナメントに出場する選手のランキングの違いから、10000 \$、25000 \$ トーナメントのレベルを国別、地域別に見ていきたい。

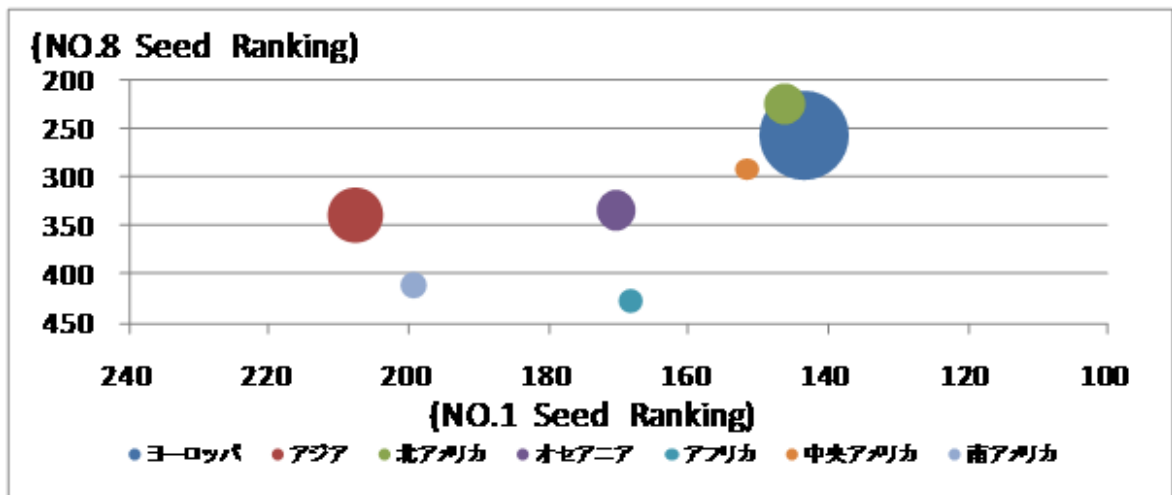


図 18 NSI \$10000(地域別)

ITF 資料より筆者作成

地域別の 10000 ドルトーナメントのシードランキングを見ると、オセアニアが第 1 シードも第 8 シードもランキングが他地域に比べて高い。しかも、バブルのサイズが小さく、出場可能な大会数が少ないことが分かる。その反対に、北アメリカは第 1 シード、第 8 シード共に低い。第 8 シードは 700 位より下のランキングと低く、オセアニアの第 8 シードのランキングで北アメリカの第 1 シードシードになることが可能である。アフリカもまたランキングが北アメリカの次に低い。そしてヨーロッパ、中米・カリブ海、南アメリカ、アジアは、ほぼ同じレベルにある。中でもヨーロッパは、オセアニアの次に第 1 シードのランキングが高く、第 8 シードのランキングも高いが、その代わりトーナメント数が圧倒的に多い。ヨーロッパのトーナメントは基本的にレベルが高いことが、ここから分かる。一方、4 地域の中でアジアの第 8 シードのランキングが最も低く、第 1 シードは中米・カリブ海が低い。



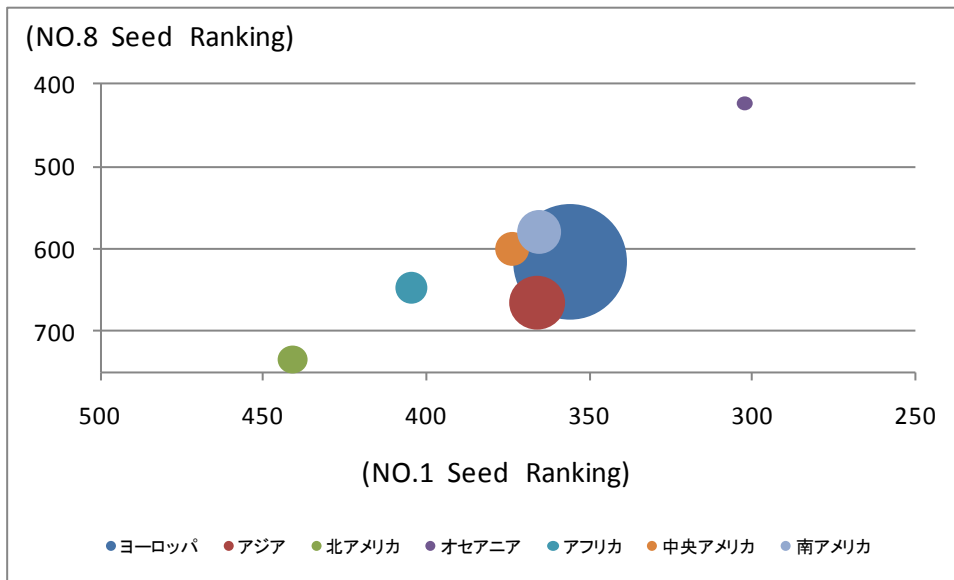


図 19 NSI \$25000(地域別)

ITF 資料より筆者作成

では 25000 ドルトーナメントはどうであろうか。ここでは地域ごとにばらつきが見られた。第 1 シードのランキングが最も高い地域はヨーロッパである。平均第 1 シードランキング 143 位、第 8 シードも 259 位と実力ある選手がシード権を獲得している。そして北アメリカもまた第 1 シードは平均 146 位とヨーロッパと型を並べる。第 8 シードはヨーロッパより高く、226 位である。北アメリカは 10000 ドルトーナメントでは比較的ランキングの低い選手が参加しているのに対して、25000 ドルトーナメントではランキングの高い選手が参加していることが分かった。第 1 シードのランキングが最も低い地域は、アジアであり、平均が 207 位である。地域の中で唯一 200 位代が第 1 シード権を獲得できる。第 8 シードはアフリカが最も低く、次に南アメリカのランキングが低い。

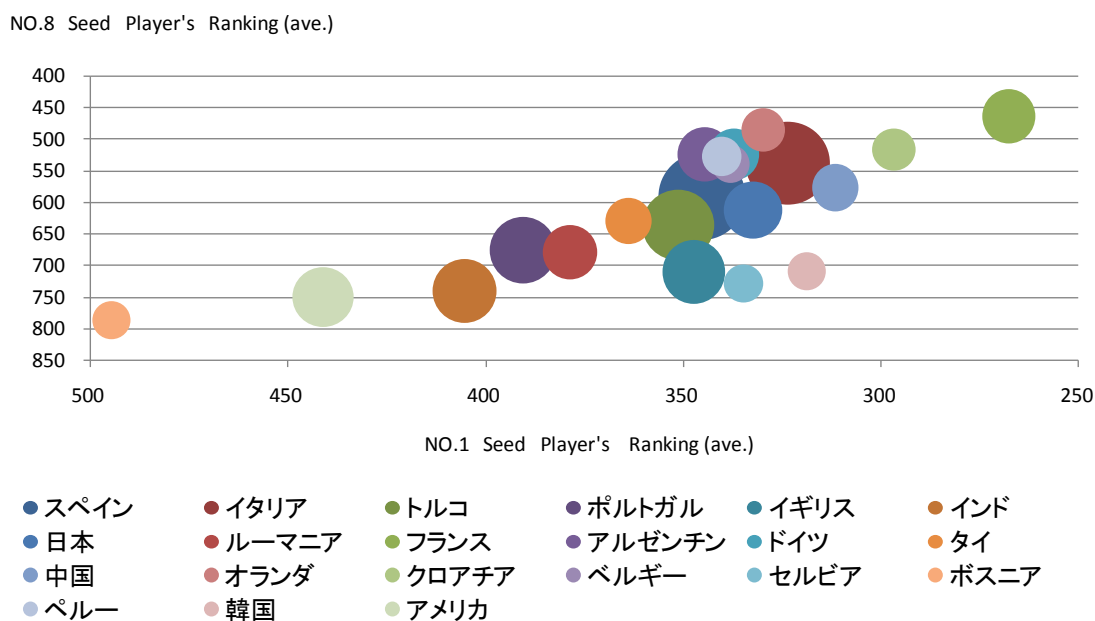


図 20 NSI \$10000(国別)

ITF 資料より筆者作成

次に、国ごとにシードランキングを見ていきたい。対象の国は年間で4試合以上開催している国である。最も第1シードのランキングが高い国はフランスである。第1シード268位、第8シード463位、共に最も高い。そしてクロアチア、イタリア、中国、オランダ、韓国は第1シードのランキングが高いが、韓国は第8シードのランキングが低いことが分かる。日本は第1シードが332位、第8シードが611位であり、中国、韓国よりも第1シードのランキングが低い。一方でボスニアの第1シード、第8シード共にランキングが圧倒的に低い。その次にランキングが低い国がアメリカ図ではアメリカとなっているのである。第1シードも400位以下、第8シードも700以下の選手である。ヨーロッパでは他にルーマニアのランキングが低い。そしてアジアで最もランキングが低い国はインド、そしてタイもランキングが低い。つまりヨーロッパはランキングが高い国と低い国の差が大きいことが、ここで分かった。またアジアは日本、韓国、中国といった東アジアのランキングが高く、タイ、インドといった中央アジアのシード選手ランキングが低いことが分かった。

NO.8 Seed Player's Ranking (ave.)

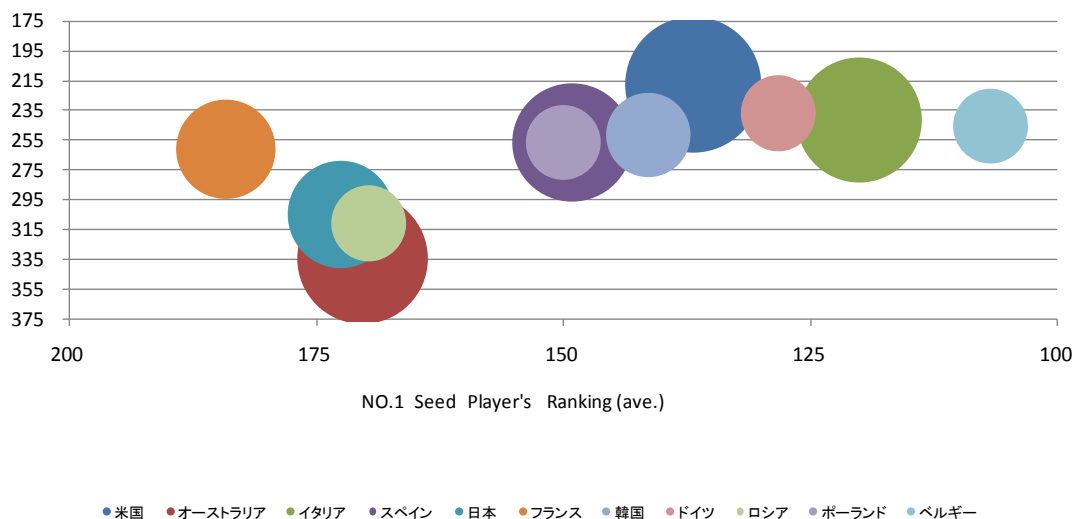


図 21 NSI \$25000(国別)

ITF 資料より筆者作成

次に、25000 ドルトーナメントを見ていきたい。第 8 シードのランキングが 225 位から 275 位の間集中している。それに対して、第 1 シードのランキングには大きなランキング差が見られた。第 1 シードのランキングが高いのはベルギー、イタリア、ドイツであり、低いのはフランス、日本、オーストラリアである。第 8 位シードのランキングは比較的差が少ないが、オーストラリア、日本、ロシアが他国よりもランキングが低いことが特徴的である。

## 第4節 ITF トーナメント開催時期

本節では ITF WOMEN'S Circuit Calendar2010 より作成した。世界の ITF トーナメントの開催時期の傾向、日本のトーナメントの開催時期について明らかにした。

### 第1項 ITF トーナメント年間スケジュール

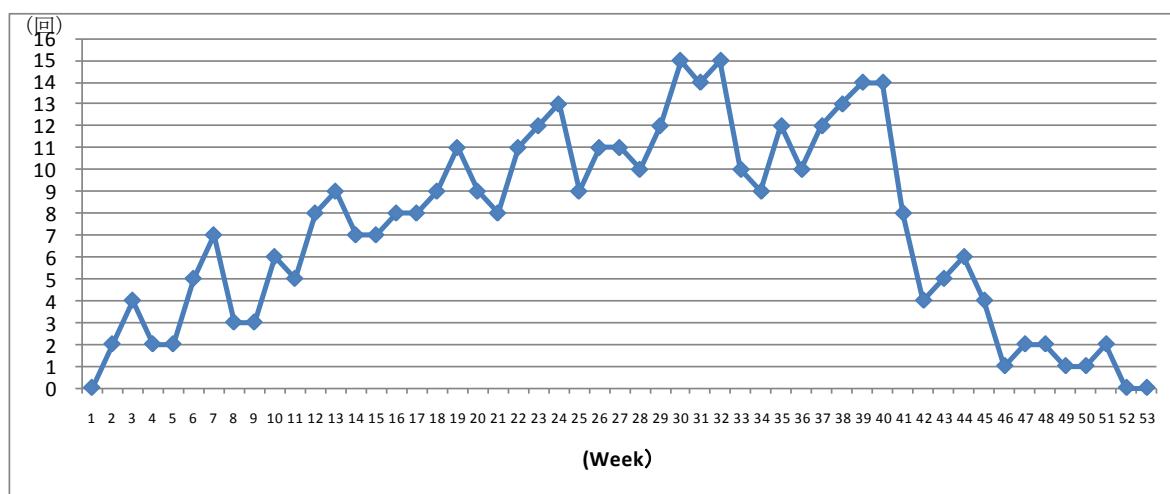


図 22 ITF トーナメント年間試合数推移 (53 週)

ITF 資料より筆者作成

ITF トーナメントの年間スケジュールを見ると、年間の試合数の増減があった。第 1 週目は試合が行われておらず、10 試合を超えるのは 19 週目の 5 月の第 1 週である。30 週、32 週目つまり 7 月の 3 週目、8 月の 1 週目が年間の中で最多の試合数になる。以降一時的に減少するが、39 週目 40 週目に 14 試合と再び試合数が増加した。しかし、41 週目には 8 回と 10 回を切り減少傾向が続き、46 週目には試合数が 1 試合になり 52 週目、53 週目は試合が行われていない。

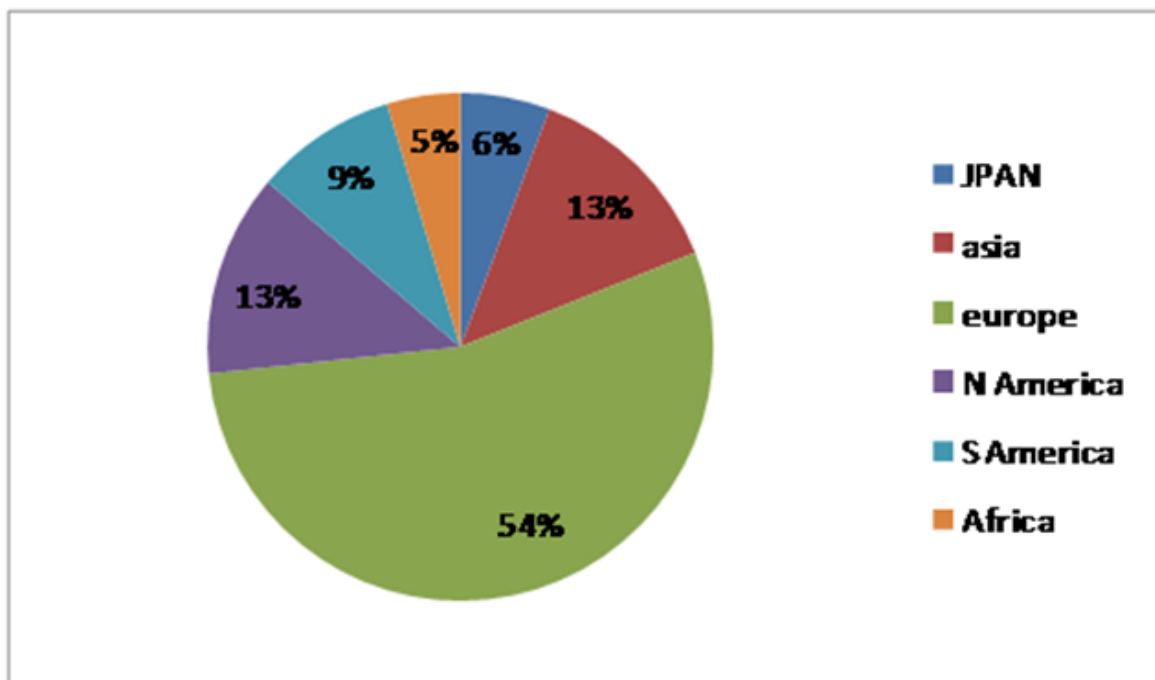


図 23 ITF トーナメント地域別割合

ITF 資料より筆者作成

年間スケジュールの中で日本及び地域別トーナメント開催数を見ると、ヨーロッパが54%、アジアと北アメリカが13%、南アメリカが9%、日本が6%、アフリカが5%の割合で開催されていた。従って、日本を含めたアジアで見ると北アメリカよりも開催数が多く、アジアは世界の中でヨーロッパに次ぐテニストーナメント開催地域であると言える。

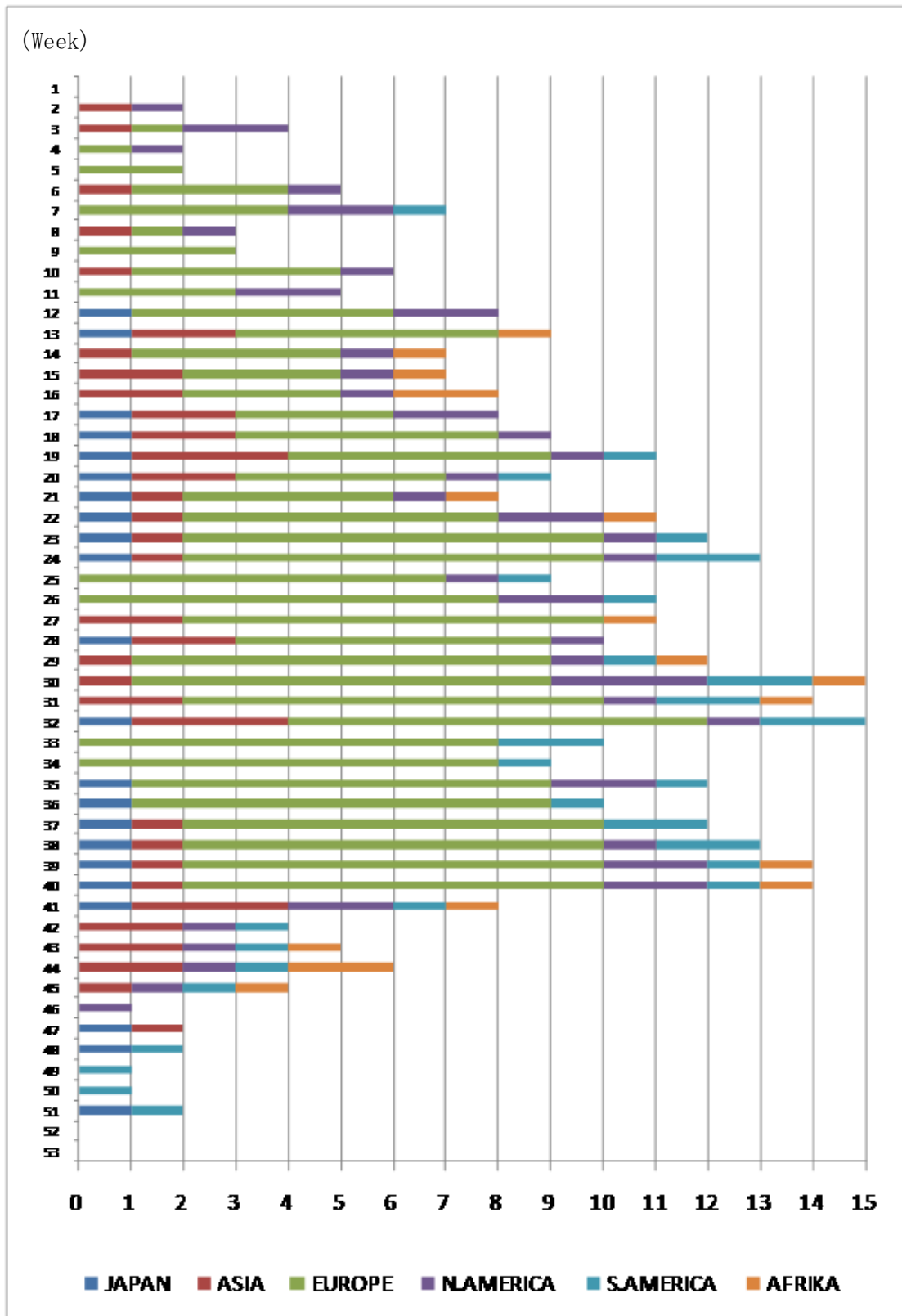


図 24 ITF トーナメントカレンダー (2010)

ITF 資料より筆者作成

## 第2項 地域別トーナメント開催数と開催頻度(期間別)

トーナメントスケジュールの中で、前半にあたる全仏オープンのエントリー期間までの地域別のトーナメント開催数を見た。

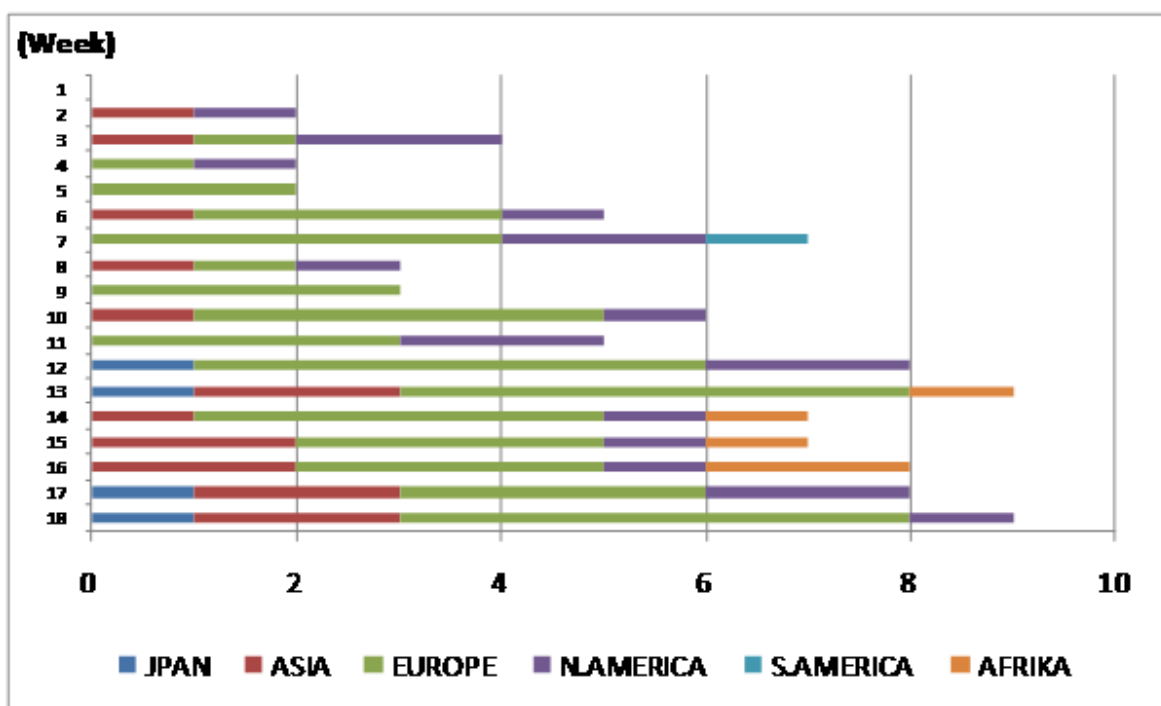


図 25 ITF トーナメント(1週～18週)

ITF 資料より筆者作成

1 番目に開催されている時期は、アジア、北アメリカは第2週、ヨーロッパは第3週目、南アメリカが8週目、アフリカは13週目、日本は第12週目に開催されている。

連続する週は北アメリカでは5週目、9週目、13週目を除き毎週1トーナメントから2トーナメント開催されている。ヨーロッパは、第3週目に1試合開催され、第8週の1試合を除き第6週以降3試合から5試合開催されている。アフリカは13週から16週目まで毎週開催されている。一方アジアは、第2週目から第12週目まで定期的で開催されておらず、13週目以降毎週開催されている。日本は12週目に初めて開催されている。

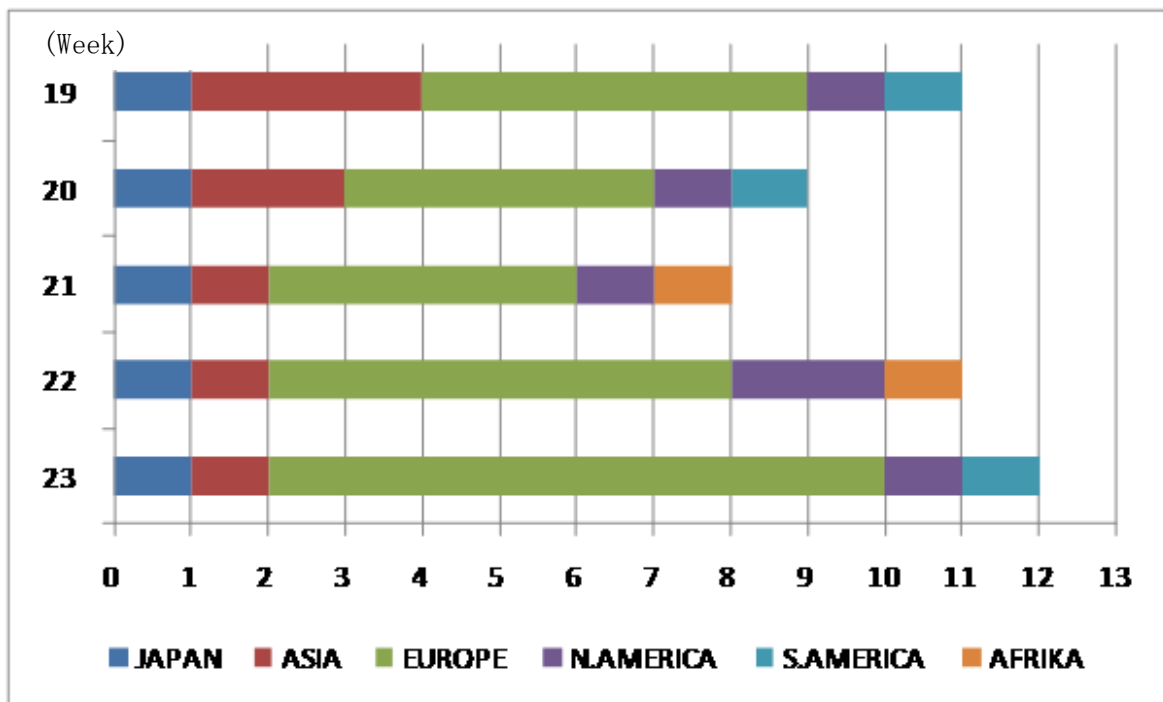


図 26 ITF トーナメント(19 週～23 週)

ITF 資料より筆者作成

次に全仏オープンからウィンブルドンにかけての5週間を見た。この時期、日本は毎週開催と同時にアジアにおいても、毎週1試合以上開催されている。ヨーロッパもまた4試合以上開催され、北アメリカも1試合以上開催されている。南アメリカ、アフリカは毎週開催されていない。従って、全仏からウィンブルドンの時期は日本、アジア、ヨーロッパ、北アメリカでは毎週トーナメントが開催され、開催頻度が高いことが分かった。



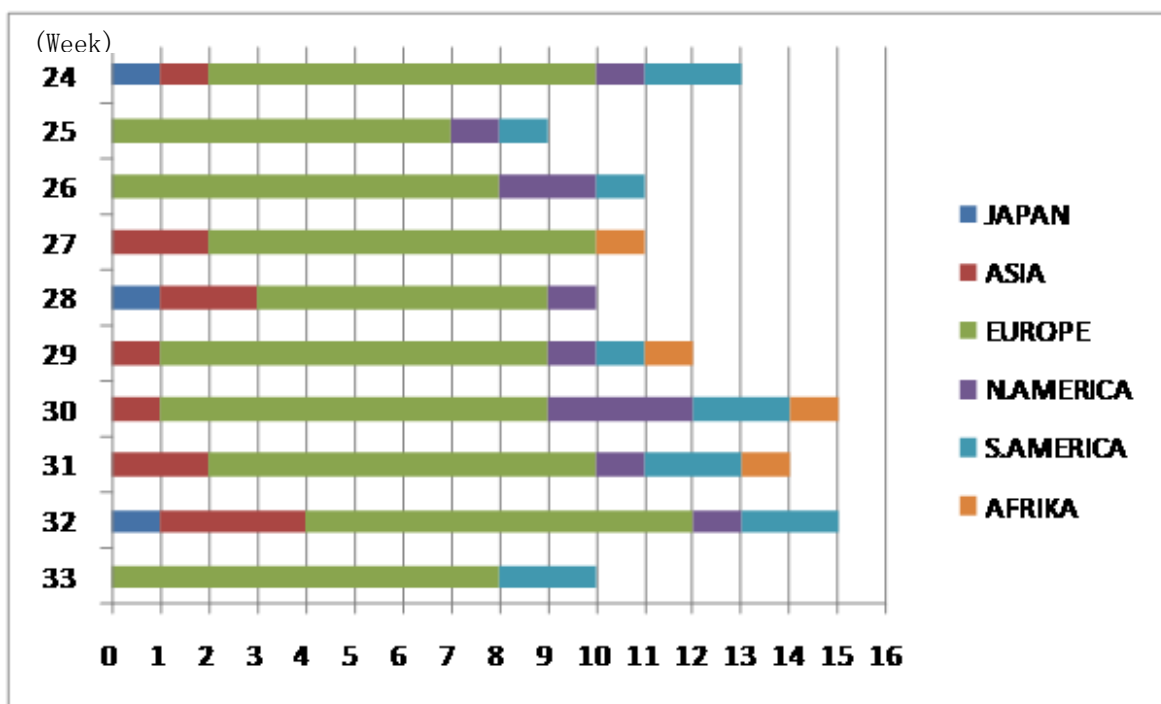


図 27 ITF トーナメント(24 週~33 週)

ITF 資料より筆者作成

次にウィンブルドンから全米オープンまでの期間はどうだろうか。日本は 24 週目、28 週目、32 週目のみの開催である。アジアは 27 週目から 32 週目に開催している。ヨーロッパは毎週 6 トーナメント以上開催されている。北アメリカは 33 週目を除き毎週開催されている。また、南アメリカは 28 週目を除き毎週開催されている。アフリカは 28 週目を除き 27 週目か 31 週目まで開催されている。従って、この期間はヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカの開催頻度が高い。

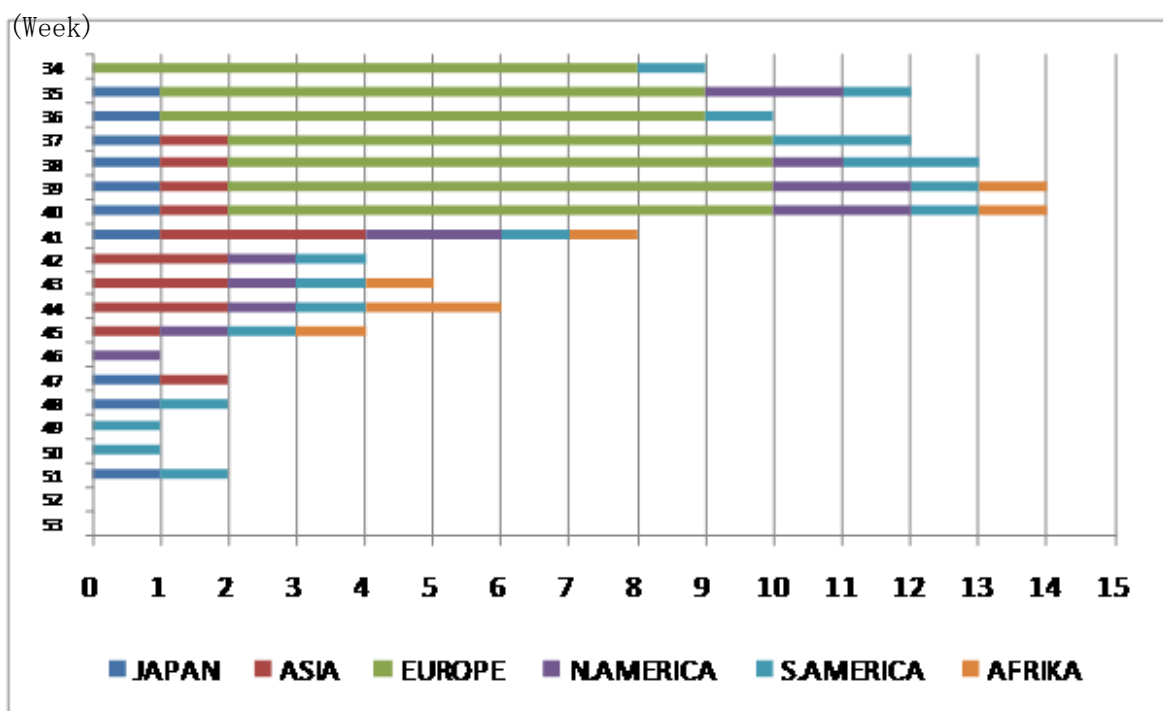


図 28 ITF トーナメント(34 週～53 週)

ITF 資料より筆者作成

そして最後に、全米オープンから全豪オープンの期間を見た。日本は 35 週目から 41 週目に開催、47 週目、48 週目、そして 51 週目が最終である。アジアもまた 37 試合目から 45 週目に開催され、47 週目が最終である。北アメリカは 38 週目から 48 週目に開催され 46 週目が最終である、そしてヨーロッパは 34 週目から 40 週目にそれぞれ 8 試合開催され、41 週目から 53 週目まで開催されていない。南米は 46 週目、47 週目を除き、34 週目から 51 週目まで毎週開催されている。

### 第3項 日本における ITF トーナメントへの出場外国人選手数

次に、日本の ITF トーナメントに参加する外国人選手数の多寡を見た。

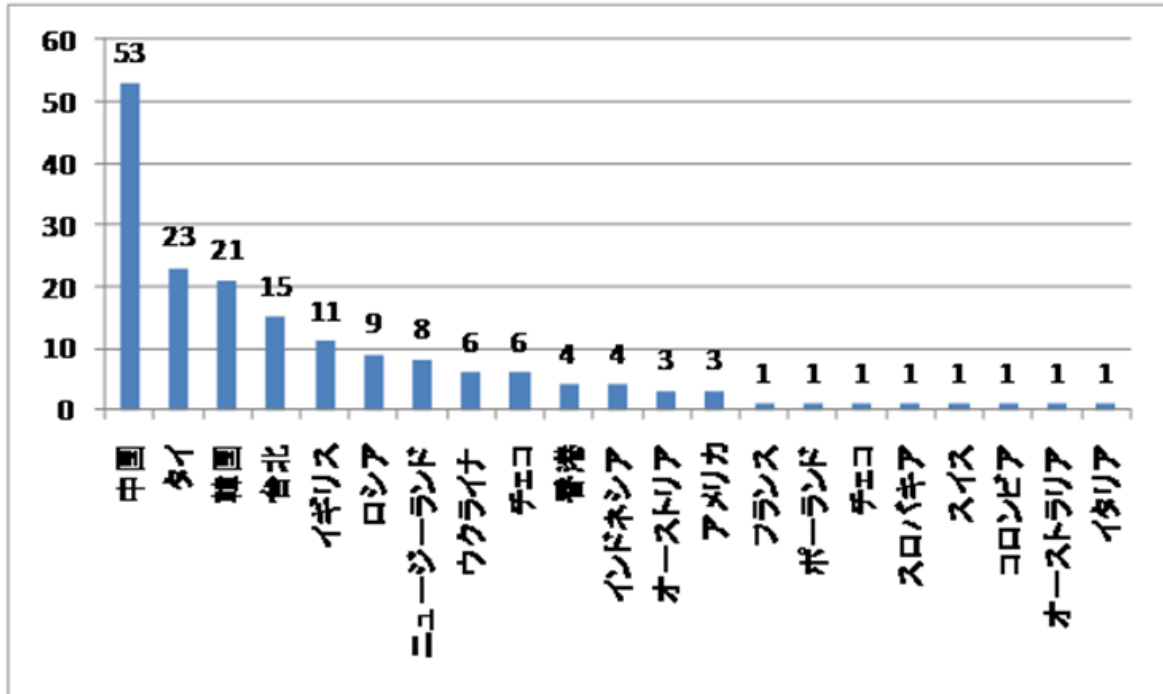


図 29 日本開催 ITF トーナメント出場外国人選手数

ITF 資料より筆者作成

2010 年日本開催トーナメントにおける外国人選手の総数である。中国、タイ、韓国、台北とアジアの近隣諸国が上位を占めている。それに次ぎ、イギリスやロシア等ヨーロッパ諸国が多い。同じアジアの中でもオセアニアのニュージーランドは 8 名参加していたが、オーストラリアは 1 名しかいない。

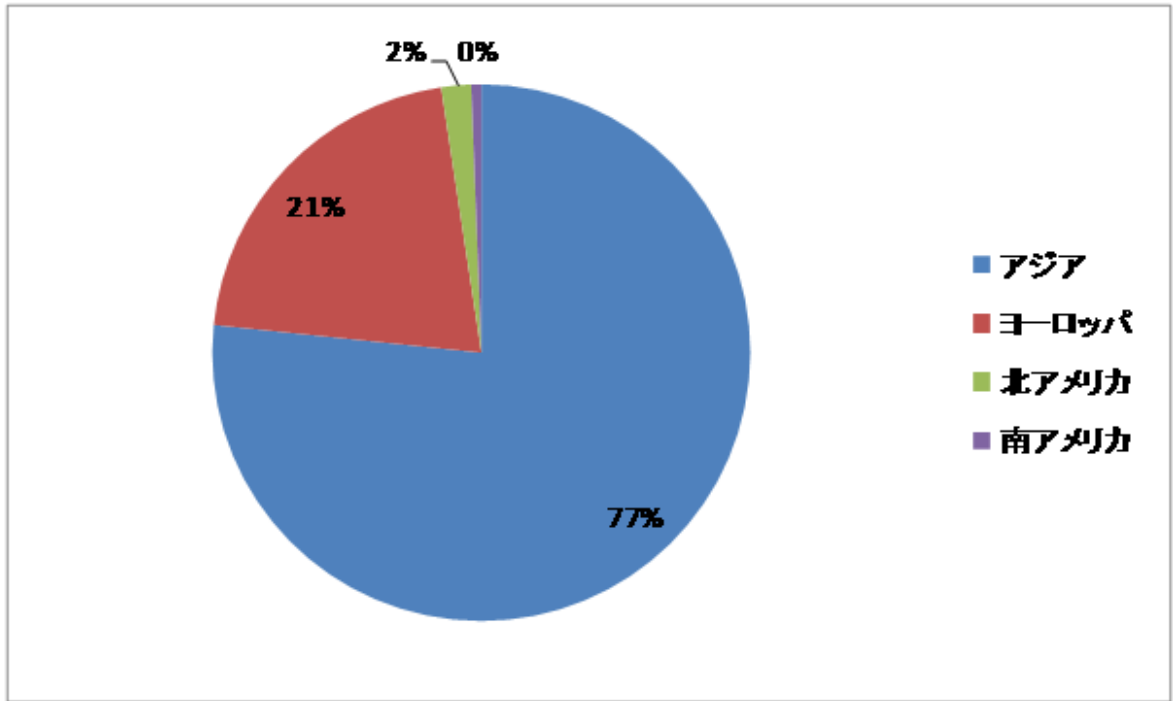


図 30 地域別日本開催 ITF トーナメント出場選手(2010 年)

ITF 資料より筆者作成

日本における ITF トーナメント参加の外国人選手の割合を見ると、アジアが 77%、ヨーロッパが 21%であり、日本の ITF トーナメントに北アメリカ、南アメリカの選手はほぼ出場していない。

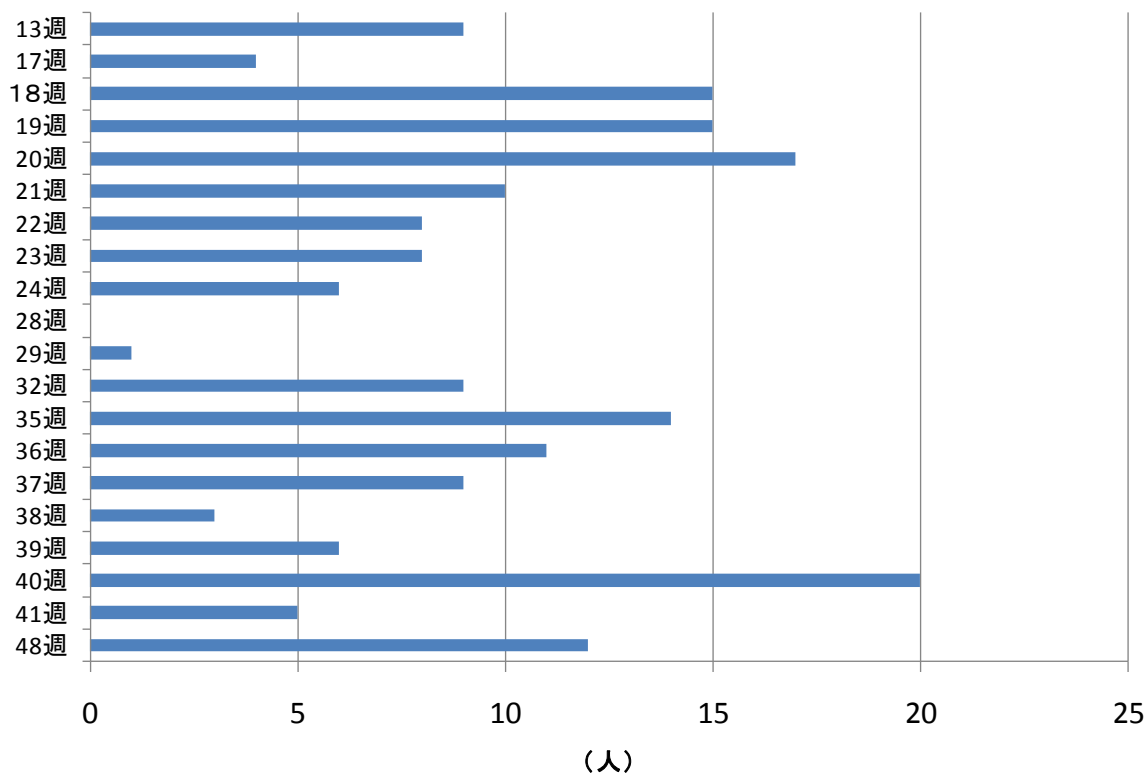


図 31 日本国内トーナメント参加外国人出場選手数

ITF 資料より筆者作成

図 31 から、トーナメント別の外国人出場選手数の推移を見ると、AUG 02 開催トーナメントと JUL 05 開催トーナメント数の外国人選手数が少ないことが分かった。

表 5 日本開催 ITF トーナメントに対するアジア開催 ITF トーナメントとアジア人参加選手数

ITF 資料より筆者作成

時期	トーナメント開催				出場選手数		
	日本	中国	韓国	タイ	中国	韓国	タイ
MAR 22	\$10K				3	2	0
APR 19	\$10K		\$25K		2	0	0
<b>APR 26</b>	\$50K		\$25K		3	1	0
MAY 03	\$50K				3	2	0
MAY 10	\$50K				4	2	1
<b>MAY 17</b>	\$25K		\$10K		3	2	2
MAY 24	\$25K		\$25K		5	0	2
<b>MAY 31</b>	\$10K				3	5	1
JUN 07	\$10K				2	4	0
JUL 05	\$10K	\$25K		\$10K	0	0	0
AUG 02	\$10K	\$75K			0	0	0
AUG 23	\$10K				4	0	0
<b>AUG 30</b>	\$25K				6	1	4
SEP 06	\$25K				4	0	3
SEP 13	\$10K				5	0	4
SEP 20	\$25K				2	0	1
SEP 27	\$25K	\$100			2	1	1
OCT 04	\$100			\$10K	0	0	2
NOV 15	\$10K				2	0	0
NOV 22	\$75K				0	1	2

次に日本のトーナメントと中国、韓国、タイのトーナメント開催時期から、日本トーナメントに参加するそれぞれの国の出場数を見る。自国でトーナメントが開催されている場合は、日本のトーナメントに参加していないケースが存在した。特に7月5日の週は、日本、タイが10000ドル、中国が25000ドルのトーナメントが開催されている。この週の日本のトーナメントに外国人選手は一切参加しておらず、日本人選手のみが参加するITFトーナメントが開催されていた。また韓国の場合、週が重なった場合の中でも日本

が 10000 ドル、韓国が 25000 ドルのトーナメントを開催している場合、韓国の選手は日本のトーナメント参加していない。

## 第 5 節 ケーススタディ能登国際女子オープンテニス

### 第 1 項 地域性

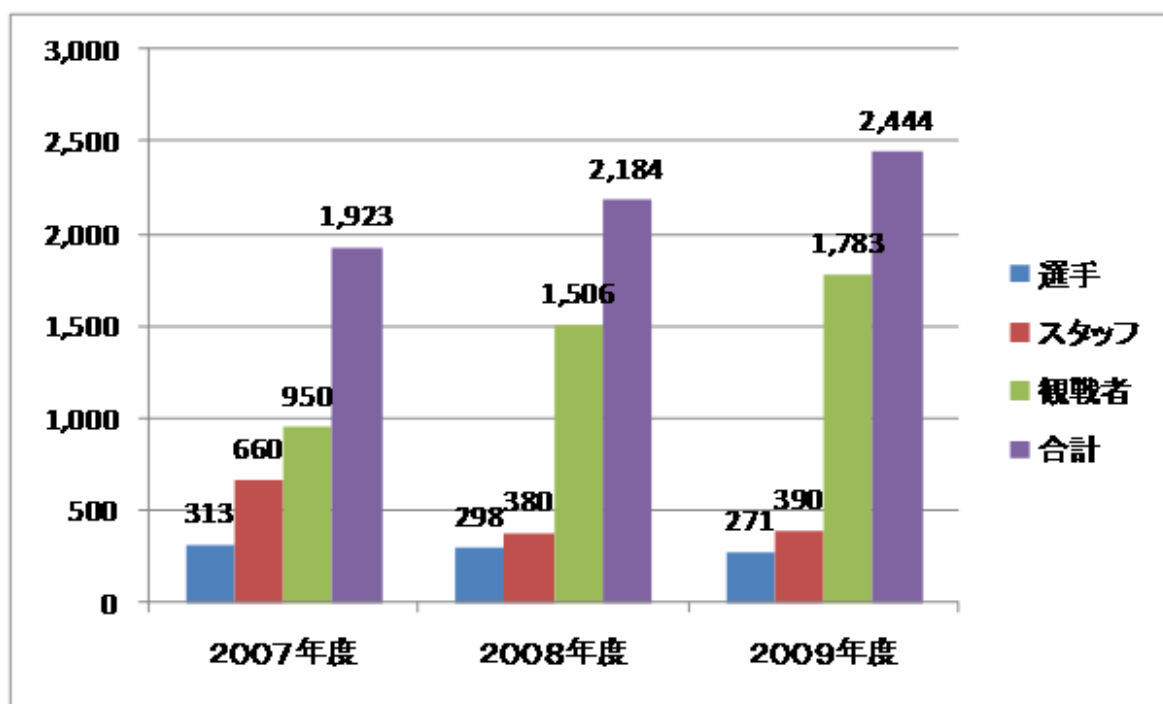


図 32 能登国際女子オープン来場者数

能登町提供資料より筆者作成

### 能登国際女子オープンテニス来場者調査表(2008~2010)より筆者作成

来場者数の推移を見ると年々観戦者の増加が見られる。ただし、大会運営側は 5000 人収容を目標として設定しているが、目標値の 50%に満たないという問題点があった。また集客力向上の観点から、観戦は無料である。また認知度の向上の為に、大会パンフレットも無料で提供している。

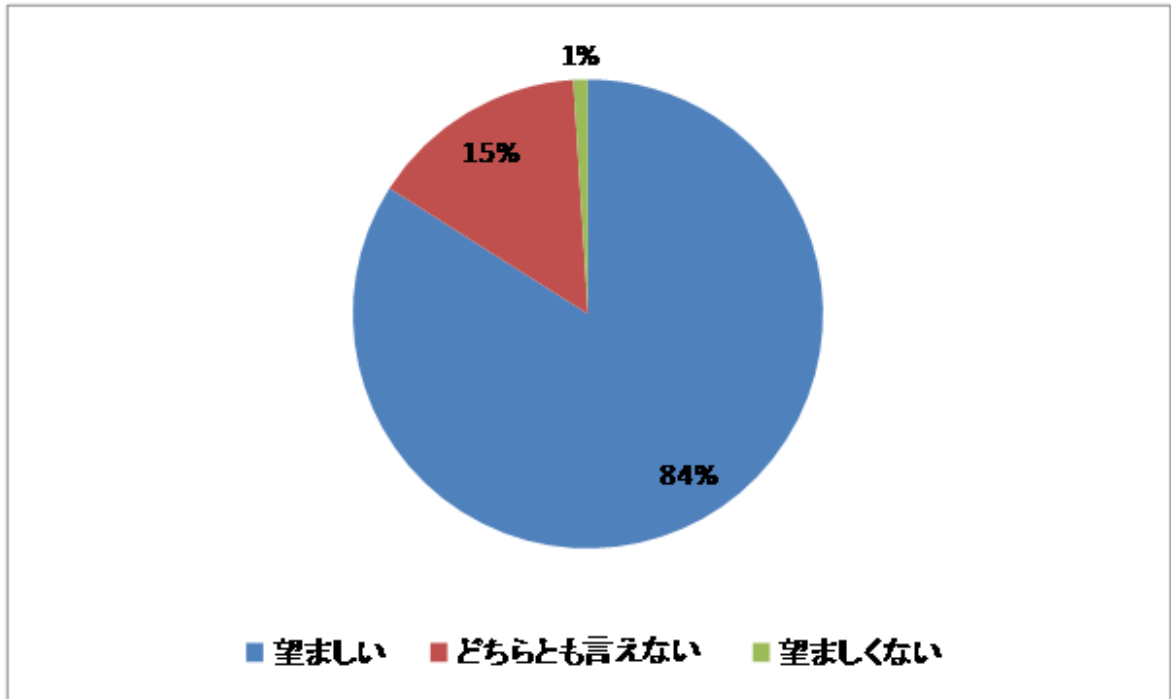


図 33 能登町民の国際大会開催の評価

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

図 34 の結果から能登町のほとんどの住民が国際大会の誘致運営を望んでいることが明らかになった。また年齢別で見ると、30 歳から 50 歳にかけての回答が最も多かった。これは大会当日に観戦していた人の世代と合致している。しかし 10 歳から 20 歳代の回答が少なかった、これも観戦者にこの世代が少なかったことが問題点として同レポートでは指摘している。



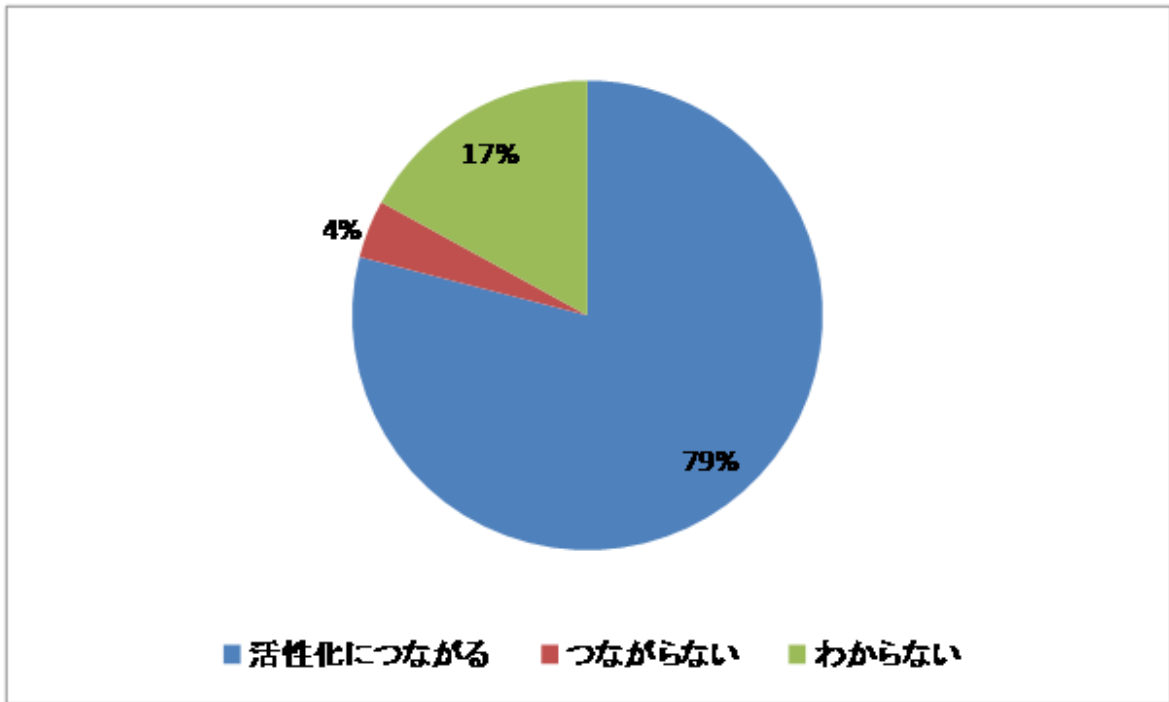


図 34 能登国際が地域活性化につながるか

能登町提供資料より筆者作成

表 6 地域活性につながる理由

能登町提供資料より

10代	全国なので他県物にもわかってもらえるから。プロテニスプレーヤーが来れば客が集まり易いから
20代	少しでも町の宣伝になるから。話題になるので継続する事に意味がある
30代	全国と能登町の町民イベントとして良い。県外者の出入りも増える。交流人口の増加になる。注目される選手を通して能登の良さを広めてもらえる。
40代	期間中に人が能登に集まる。プロの試合が観れる機会はないので刺激になる。来場者増加が観光に影響を与える。
50代	テニスの世界で町をPRできる。テニスの町として行うべき。交流の拡大、経済的に良い。
60代	コートを活用、町のPRに良い
70代	無関心な者も動員できる
80代	関心が関心が高まるから

能登国際の開催は、地域住民から地域活性になるという点で支持されている。特に大会を開催することで、市街、県外から人が来るという期待が高い。こうしたことが、地域に与える経済効果として期待されている。また地域にプロ選手が来る機会がないからという指摘もあった様に、プロテニスプレーヤーが来ること自体が地域にとって意義あるものとなっている。

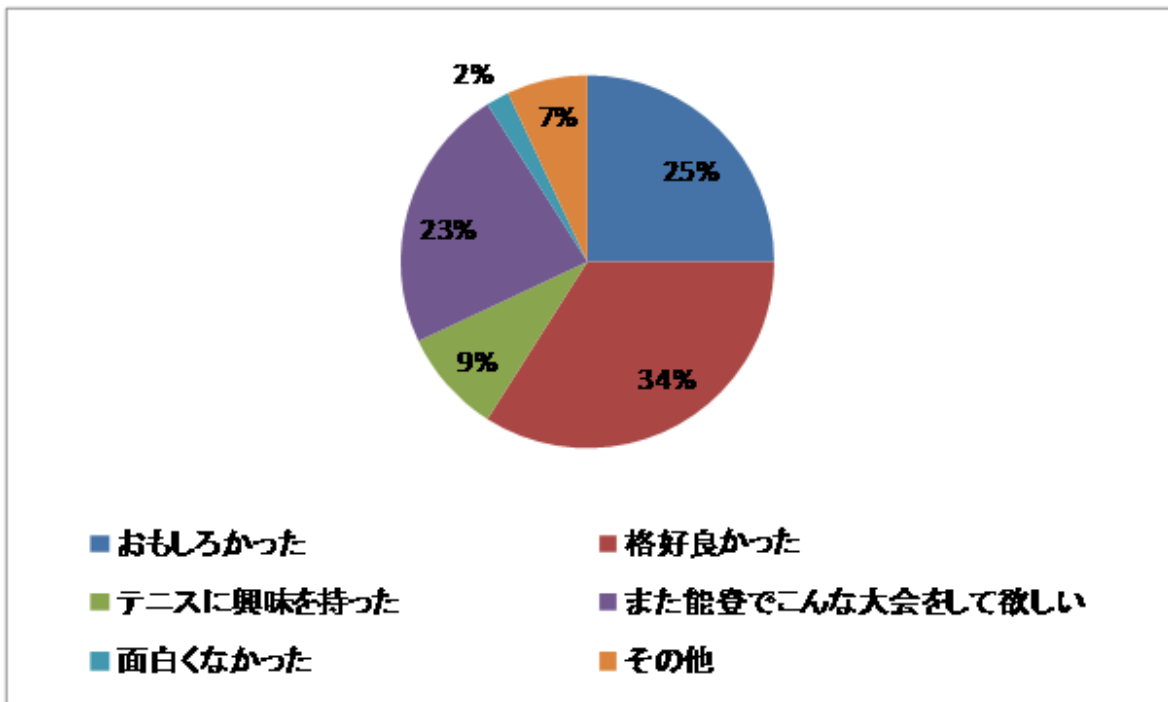


図 35 大会の印象（児童対象）

能登町提供資料より筆者作成

児童を対象に大会の印象を聞くと否定的な回答はほとんど見られなかった。こうした結果から能登町民の成人だけでなく、児童からも支持されているということが分かった。

## 第2項 テニストーナメントに対する意識調査

2010年9月5日～12日に開催された能登国際女子オープンテニス（以下能登国際）が開催された際にアンケートを実施した。本トーナメントの優勝賞金額は25000ドル、最高獲得ポイントは50ポイントの大会である。

本アンケートで能登国際出場選手のITFトーナメントに対する意識調査を行うことで、トーナメント環境の問題、及び選手の問題点を明らかにした。

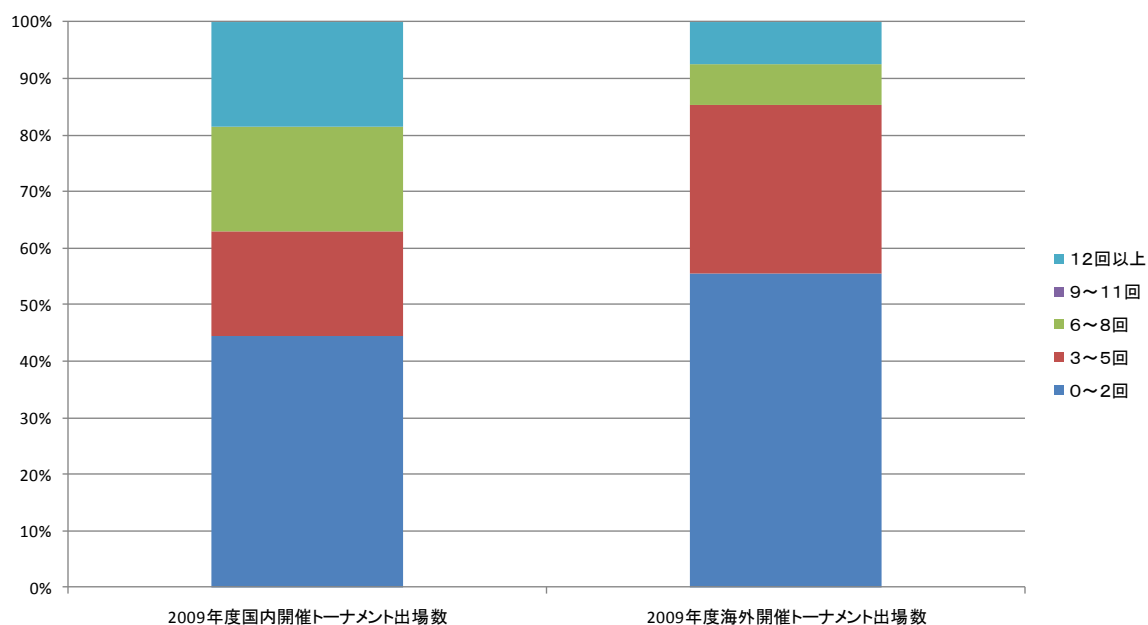


図 36 国内外トーナメント参加状況

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

まず能登国際トーナメントの出場選手の属性を見ると、トーナメント自体への出場経験のある選手が0回から2回と、実践経験が少ない選手が多い。また、海外トーナメントに参加する機会は3回~5回が最も多く、それ以上になると国内のトーナメントに参加していることが分かる。

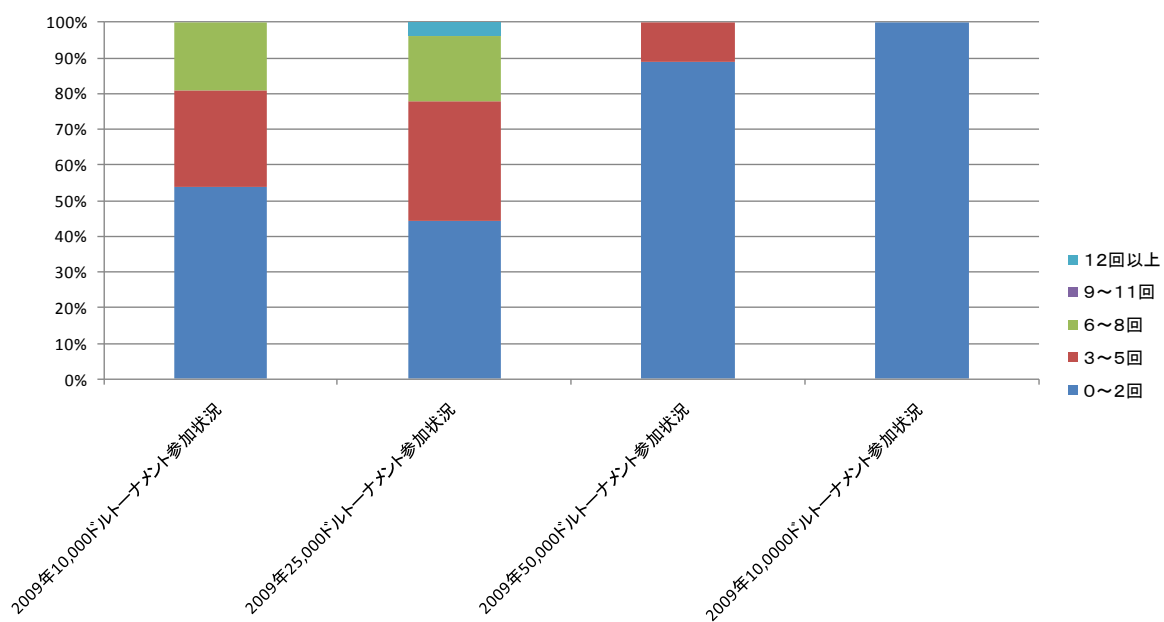


図 37 ITF トーナメント参加状況

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

また ITF の賞金額ごとに見ると、最も賞金の低い 10000 ドル、25000 ドルトーナメントの参加が多い。

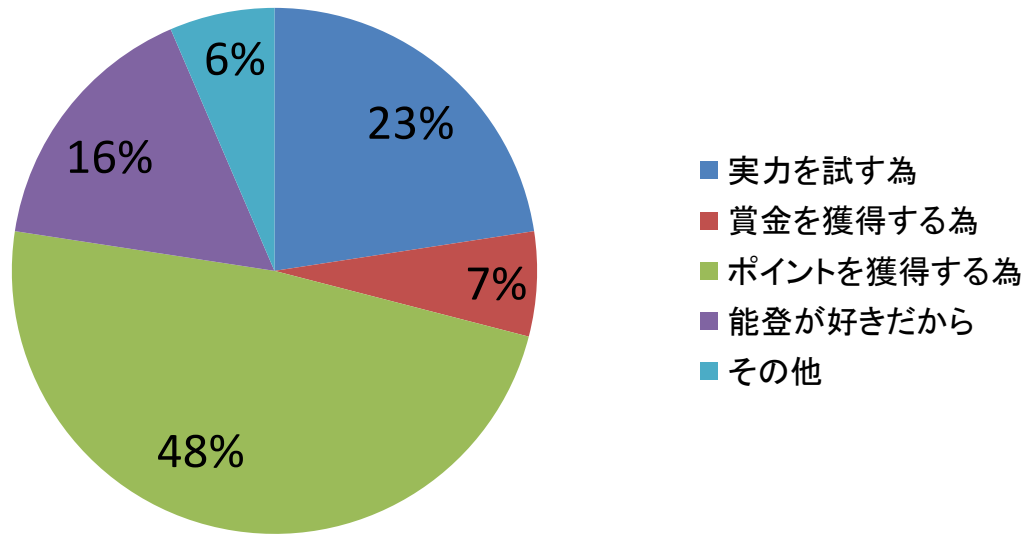


図 38 能登国際女子オープンテニスへの参加動機

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

実際に能登国際に参加した動機を聞くと、「ポイントを獲得する為」という回答が最も多く 48%、次に実力を試す為 23%であった。

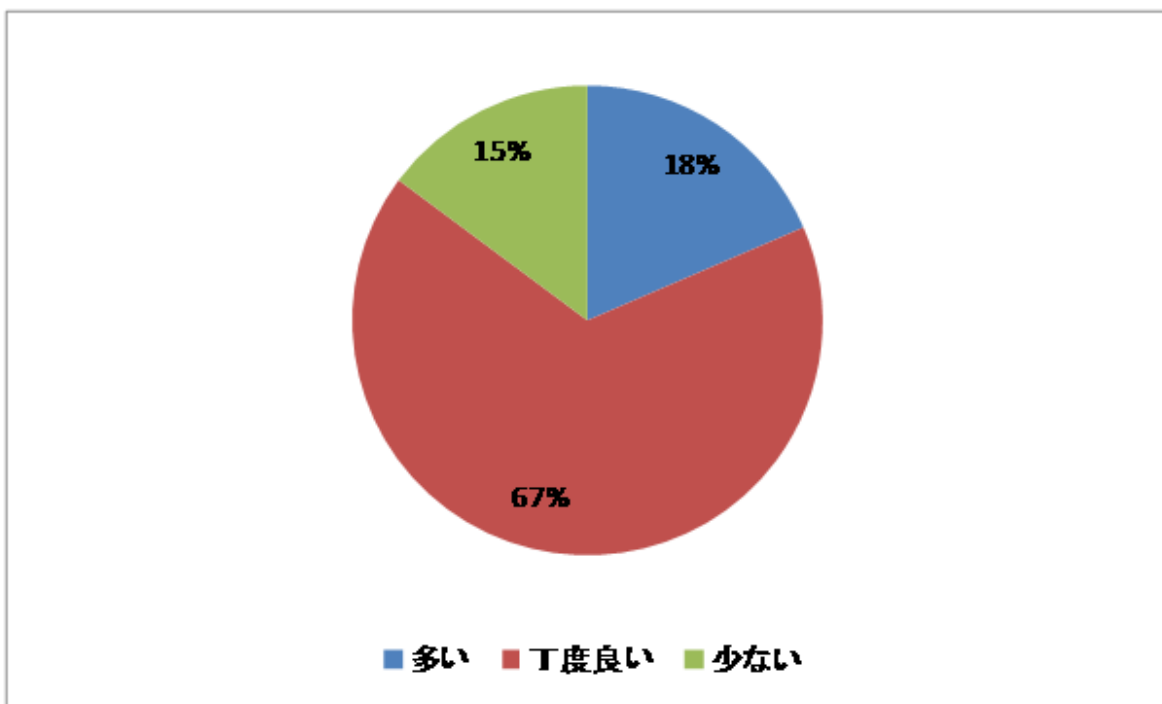


図 39 日本のトーナメント数についてどう思うか

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

次に日本のトーナメント数について聞くと、丁度良いが67%、多いが18%であり、トーナメント数に関して少ないと回答した選手は15%であった。すなわち、日本のトーナメント数に関して不満に思っている人は、ほとんどいないことが分かった。

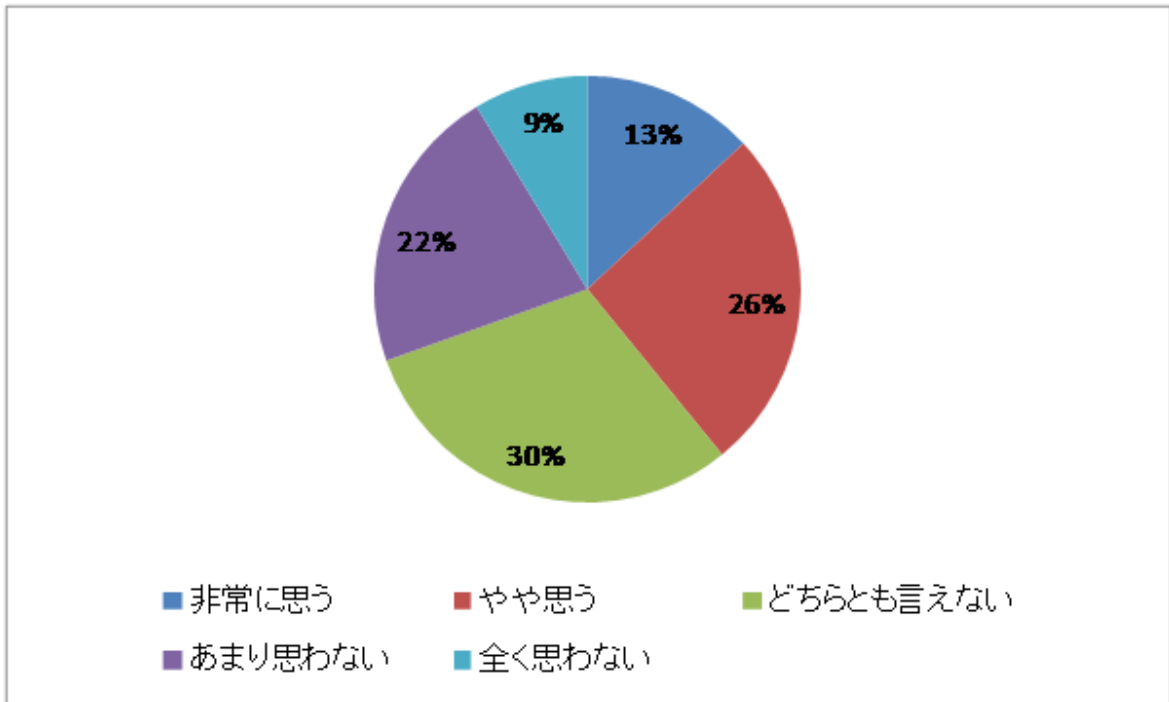


図 40 海外を拠点にプレーしたいと思う

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

また海外を拠点にプレーしたいかという問いに対して、「非常に思う」と答えた選手は13%、「やや思う」という回答は26%、全体で積極的な回答は40%であった。

その理由については、次のような積極的な回答が得られた。

- ・日本と海外とでは環境が全く違うし、プレースタイルも違う。日本よりも海外の選手のほうが勝っているから、そのようなプレースタイルのある環境でやりたいと思う
- ・日本の選手やアジアの選手だけではなく、色々な国の選手とどんどんやっていきたいから
- ・海外拠点ということはツアーをまわるという意味も含め強くないとできない
- ・海外のほうが自分にあっている気がするから

その一方で次のような消極的な回答も得られた。

- ・日本が好きだから
- ・ただ単に考えたことがない

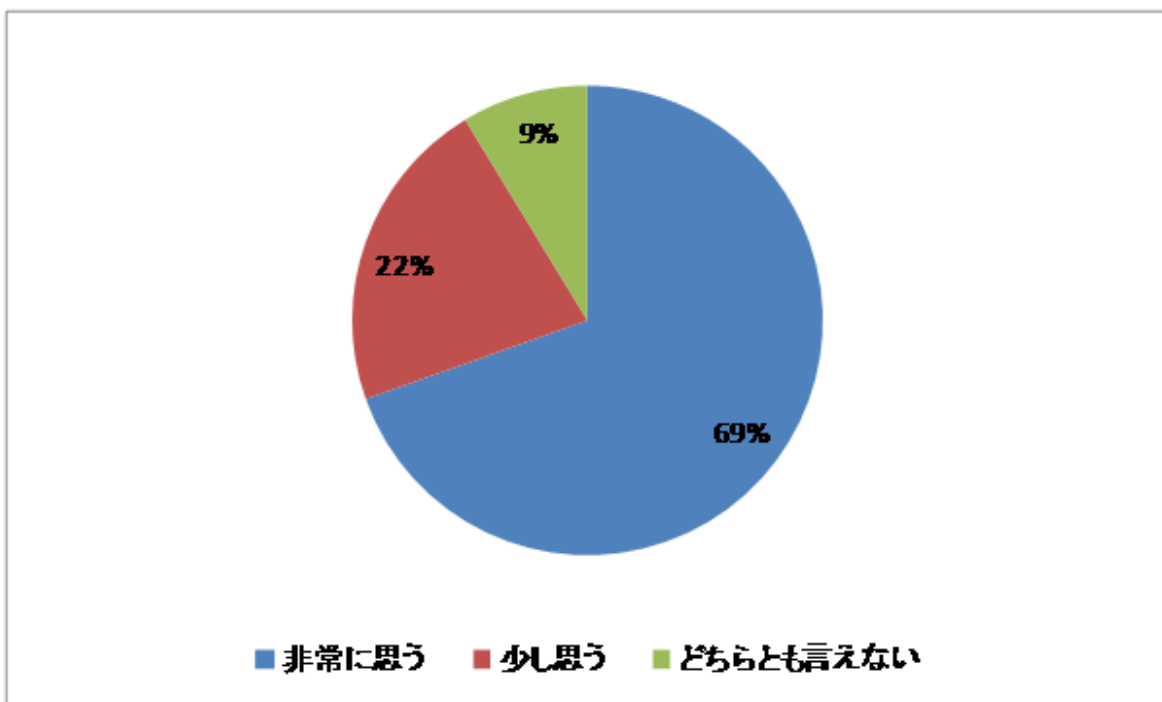


図 41 4大オープンに出場したいと思う

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成  
69%の選手が「4大オープンに出場したいと思う」という回答が得られた。しかしながら、30%の選手からは積極的な回答は得られなかった。



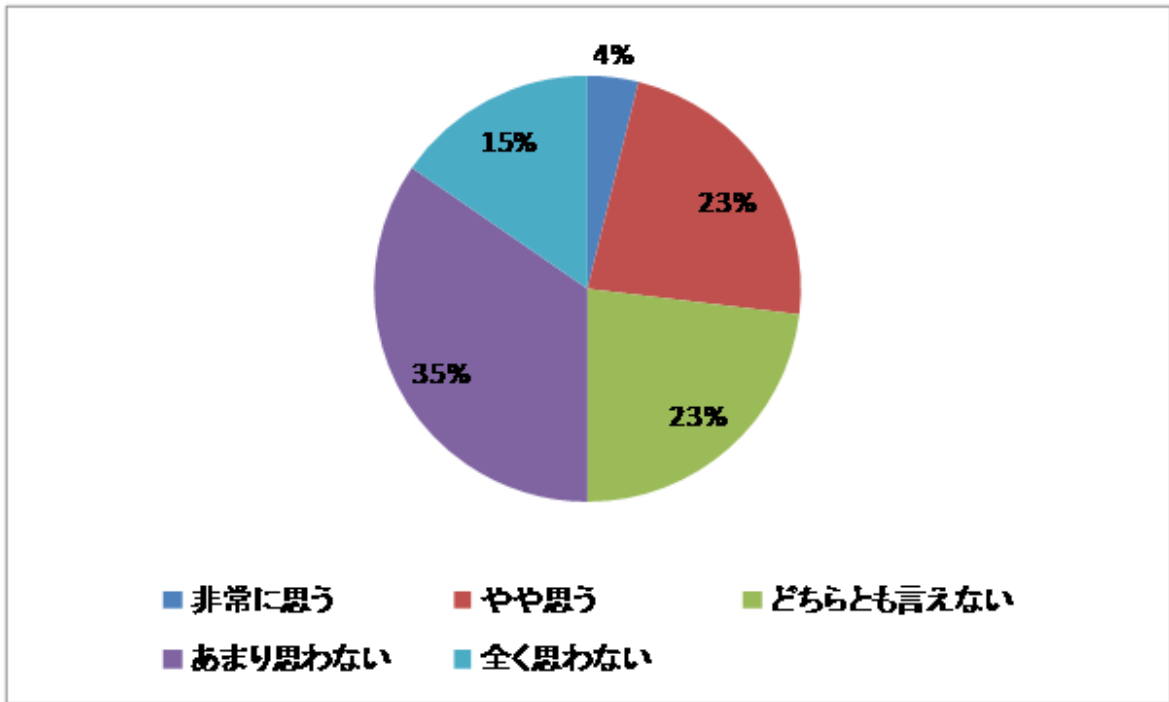


図 42 引退後の生活が不安である

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

引退後の生活が不安であるかという質問に対して、不安であるがわずか4%に留まった。選手は引退後の生活不安はないということが分かった。

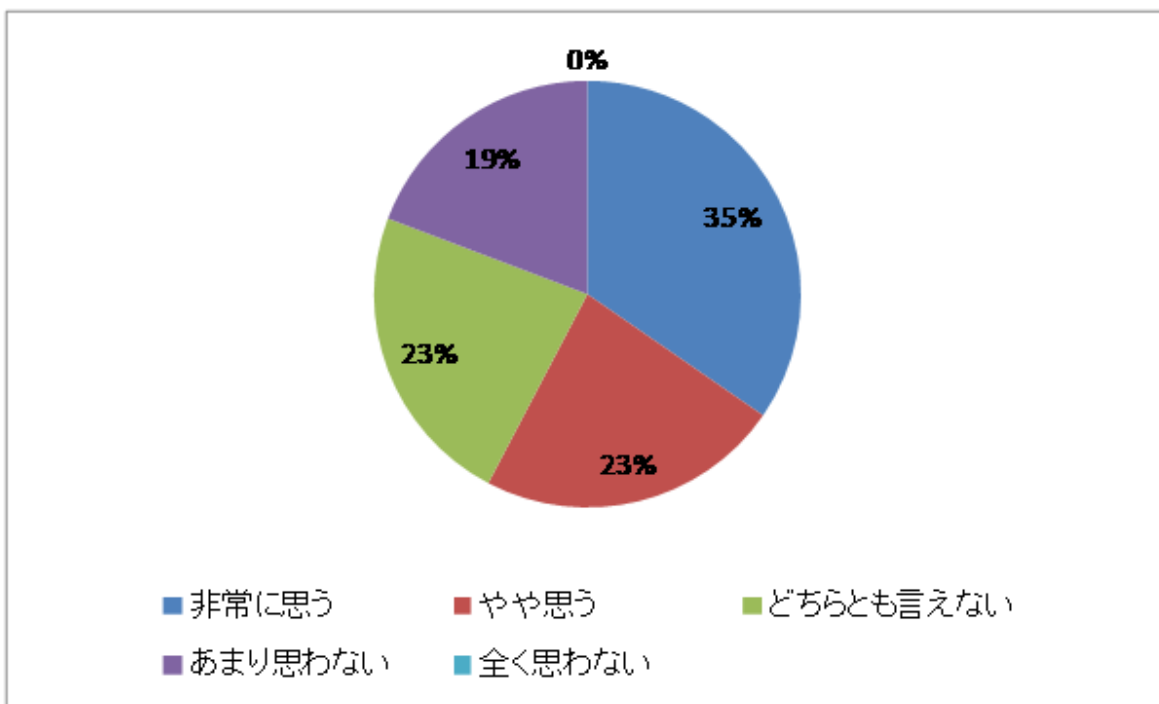


図 43 引退後もテニスをしたと思う

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成  
 引退後もテニスをしたかという問に対して、「非常に思う」が 35%、「やや思う」が 23%、「どちらとも言えない」が 23%「あまり思わない」が 19%であった。

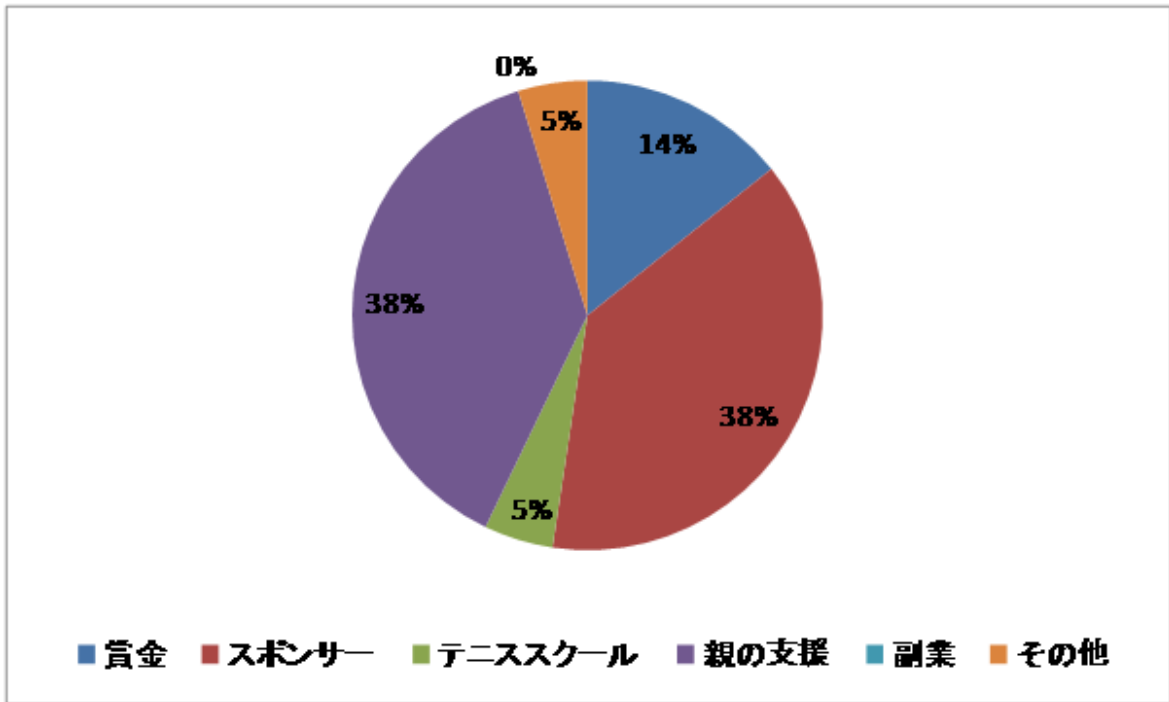


図 44 現在の主な収入は何か

能登国際女子オープン出場選手アンケートより筆者作成

現在の主な収入源は賞金が14%、スポンサーが38%である。親の支援は、10代の選手、学生選手がこれに当たる。ここから選手の収入源はスポンサーが大きいことが分かった。

### 第3項 松岡修造氏インタビュー

テニスの指導にあたり、また男子の ITF トーナメントであるフューチャーズトーナメントにスポンサーをした経験がある松岡修造氏に、日本人選手の問題点、及び日本国内トーナメントの問題点についてインタビューを行った。ただし、松岡氏がスポンサーされたトーナメントは男子トーナメントであり、このインタビューにおける同氏の考えは日本人男子選手を視野に置かれている。

#### 日本人選手の問題点

松岡氏は「日本人選手から世界を目指す気持ちが感じられない。」と日本人選手に対して指摘している。これは日本人選手が国内で賞金を稼いで満足をしており、トレーニング及び、トーナメントを通じて世界を目指すという意気込みが感じられないということである。また同氏は世界で活躍する選手には独特の雰囲気がある。周囲に緊張感を与え、周囲に視線を釘付けにする雰囲気である。フューチャーズに出場する日本人選手には、世界で活躍する為に必要な選手の基質が、欠けているのではないかと指摘している。

#### 日本のトーナメントの問題点

同氏は日本のトーナメントの問題点について「日本人選手ばかりが参加するトーナメントであり、国内で世界レベルを感じるができなくなっている」と指摘している。日本の国際トーナメントは国内選手が大半を占めており、日本における国際トーナメントから世界に対して意識が向かないという問題点がある。

## 第4章 考察

本章では、第3章で得られた結果を下に、日本テニス界のITF トーナメントに対するあり方と、今後のテニス界の発展について考察をする。

### 第1節 WTA トーナメントとITF トーナメントの関係

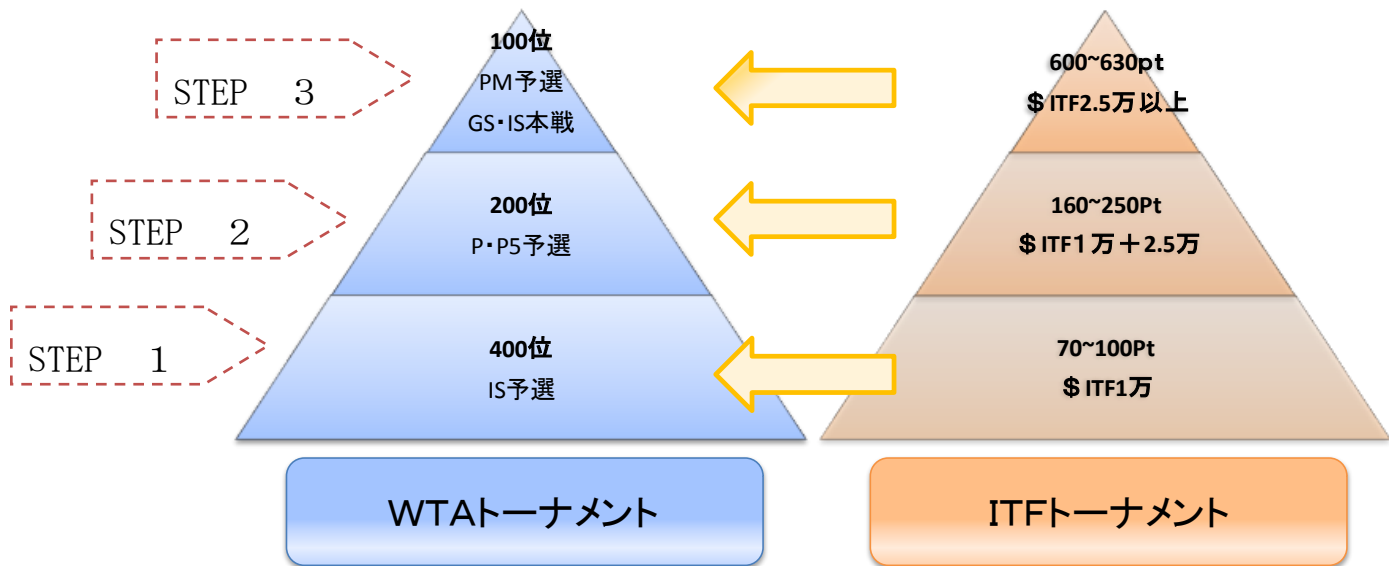


図 45 WTA と ITF の関係図

WTA・ITF 提供資料より筆者作成

第1節から、日本人選手がWTA世界ランキングの中で最も多い層は600位の層であることがわかった。また、WTA トーナメントのCutoff ランキングから、600位代の選手はWTA トーナメントに出場可能なランキングに到達していないことが明らかになった。これらの結果から、今後日本テニス界が選手を輩出する上で、次の様な層を3段階に分けてみた。

第1段階は、WTA トーナメントで最もグレードが低いISの予選出場レベルである。これは、平均で71ポイントから100ポイント獲得することでランキングが400位代になり、ISの予選のCutoff Rankingを上回ることが可能である。すなわちITF トーナメントの10000ドルトーナメントで優勝・準優勝・ベスト4などの好成績を積み重ねることができれば、出場可能である。

第2段階は、ISの上のP・P5予選出場レベル。これは平均で160ポイントから250ポイント獲得することで出場可能である。これは、10000ドル及び25000ドルトーナメントに出場し、25000ドルではベスト8以上、10000ドルではベスト4以上、数回の取

りこぼしはあってもだいたい平均的にこの程度の成績を残すことができれば、獲得可能である。

第3段階はPMの予選及び、IS・GS本戦出場レベル。これはITFトーナメント2.50000ドル以上のトーナメント及びISでの好成績が必要となる。

表7 主要国のWTAのSTEP3段階評価

WTA資料より筆者作成

国	第1段階	第2段階	第3段階
アメリカ	○	○	○
イタリア	△	△	○
フランス	○	○	△
スペイン	×	×	×
日本	×	○	×
ロシア	◎	×	○

更にこの3段階に基づいて諸外国と日本を分析すると、アメリカの選手層は1・2・3のすべての段階で充実していること、またロシアは特にトップの第3段階(PM予選・GS・IS本戦レベル)が充実していることが分かる。日本は第1段階(IS予選レベル)つまりランキング400位代の選手を輩出する必要がある。それは、現在最も多い600位代の選手に、トーナメントの経験を積ませてポイントを獲得する必要がある。第1段階(IS予選レベル)は最もグレードの低い10000ドルトーナメントで勝利を重ねることが成功の鍵となるのではないだろうか。

## 第2節 イタリア・ロシアの成功要因

第3章第1節でWTAランキング、第2節でITFトーナメントを分析した結果から、トーナメントの開催数が年々増加する中で、近年世界で活躍する選手を輩出する国の中で注目すべき国はロシアとイタリアであることがわかった。ロシアはWTA世界ランキング(2010.12.20)の30位以内に2位のV.ズボナレワを始めとして8名もの選手を出している。イタリアはこれまで特に女子テニス界で注目されたことはなかったにも関わらず、2010に協会主導の選手強化システムで育成した成果の末、突然全仏オープンのチャンピオン(F.スキアポーネ)を輩出した。しかもこのスキアポーネは多くの現在の女子選手がストローク中心の画一的なテニススタイルであるのに対し、想像力豊かな個性あふれるオールラウンドのテニスをする。この2国の類似点と相違点を指摘したい。

## 第1項 ITF トーナメントの成績

ロシア、イタリアともに「選手層の厚い国」であった。近年、国際舞台で最も良い成績を残しているのはロシアとイタリアである。2004・2005・2007・2008年にはロシアが、2006・2009・2010年にはイタリアがフェドカップ(世界国別対抗戦)で優勝している。かつてはアメリカが世界のトップを独占していた時代から、現在ではその勢力図が大きく異なっていたのである。WTA ランキング(2010. 12・20)の50位以内にアメリカ人はS. ウィリアムズ(4位)とV. ウィリアムズ(5位)の二人しかいないことからそのことが良くわかる。

特筆すべきはITF トーナメントの成績である。ロシアは2004年以降、イタリアは2005年以降に急激に優勝回数を伸ばしロシアは2009年31回、イタリアは26回の優勝を果たしている。実際にITF トーナメントの優勝推移を見るとアメリカからロシア、イタリアへという勢力図の移り変わりが見える。アメリカは2000年には優勝回数が33回もあり諸外国を圧倒していたが、2001年からは16回と減り、その後諸外国を圧倒する成績を残していない。その一方でロシアは2004年以降優勝回数が急増し、2005年にはアメリカを抜き2009年には30回を越えたのだ。また同様にイタリアは2005年以降、優勝回数が急増し、2007年には優勝回数が25回を超えている。日本が今後世界に選手を輩出する為には、まずITF トーナメントにおける優勝回数を増やすことが必要となろう。トップレベルの選手を輩出している国々は、少なくとも20勝しており、さらにもその中でもトップクラスの国は25勝以上している。この数字こそ、まずは日本テニス界が超えるべきハードルであるのではないか。

## 第2項 ITF トーナメントの開催数

ロシアとイタリアとの間の相違点を見極める必要がある。ITF トーナメントの開催数が多く(34大会、2009)且つ成績を残すイタリアに対して、ITF トーナメントの開催数が少ない(7大会、2009)一方で好成績を残すロシアの違いは大きい。かつて優勝回数が多いチェコもロシアと同様の傾向にあった。

世界のトップレベルの選手になるということは、つまり、外国(アウェイ)でのプレーを強いられるということでもある。従って、技術のみならず世界で戦うというマインド、厳しい多様な環境に対しても順応する力などを身につけることが重要である。外国を転戦しながら、実戦の中で個々の選手が成長してゆくスタイルがロシアの場合は想定される。ある意味でそれぞれの選手の力量に委ねる個人主導型である。また一方で、イタリアは国として選手達をサポートすることが可能であり、多くの選手がテニス協会のバッ

クアアップの下でチャレンジできる環境を用意している。協会のコミットが大きい協会誘導型である。しかし、ロシア選手達の目覚ましい活躍を見ると、自国でトーナメントを開催することよりも、外国のテニスクャンプに入り、コーチと共にどんどん転戦しながら選手にポイントを獲得させる仕組みの方が、優れていると言って良いのではないだろうか。

日本は自国内で主催するトーナメント数も多く、こうしたロシア型、イタリア型の双方のメリット・デメリットを吟味する必要がある。

能登国際で実施したアンケートから、プロ選手の中には海外大会を中心に活躍したいと考えるタイプと、国内大会を中心にしたいタイプの2つの雛型がある。前者は、筆者を含め世界の大会でプレーして来た日本人選手である。予想ではこのタイプが大半を占めることを想定していたが、割合は3分の1程度という回答に留まった。一方後者の選手層はこれまであまり注目されてこなかったが、こちらが多数派であった。そこで、海外を拠点に考える選手の為には、ロシア型を採用し、国内拠点を選手はイタリア型を採用しながら2軸の方法を採ることも可能である。

### 第3節      ランキング向上に寄与する ITF トーナメントへの出場

第4節では NSI から、日本人選手が効果的にポイントを獲得することができると想定される国や地域について考察をする。

#### 第1項      10000 ドルトーナメント

10000 ドルトーナメントは、北アメリカとアジアが WTA ポイント獲得のための重要地域であり、次にヨーロッパヨーロッパである。アフリカ、南アメリカは地理的問題から、移動コストが非常に高いという問題がある。しかしながら筆者としては、何らかの方法で(自分でスポンサーを探す、または安い飛行機を乗り継ぐ)アフリカまたは南アメリカへ行き、長期に渡って転戦して交通費を賄う賞金とポイントの獲得を目指す日本人選手の出現を期待したい。

全体的にシードランキングが低い国は、アメリカを除きテニスで未だ名を馳せていない国が多くを占めていた。これは ITF がトーナメントを普及させる理念の中で開拓された地域であることが考えられる。従って今後も主要国に限らず、新興トーナメントに注目する必要性を、ここから見出すことが可能である。

特に北アメリカでは、アメリカの出場選手のランキングが圧倒的に低い。第3節から ITF トーナメントの開催数が世界最多でありテニス大国として名を馳せる為、実力者が



出場することが想定されたが、実際のシードランキングを見る限り、ポイント獲得の可能性が最も高い。ただし、アメリカには世界ランキングをまだもっていないが強いジュニア選手が多く、必ずしも侮ることはできない。

また、第5節から明らかな様に、北アメリカは毎週トーナメントが開催されサーキットが成立している為、複数のトーナメントに連続出場することも可能である。

次にアジアを見ると、東アジアのトーナメントのシード選手ランキングは高い、その一方でインドやタイといった南アジア諸国のシードランキングが低い。日本のトーナメントに中国人、韓国人選手が多数参加していることから、東アジアはアクセスが良く選手が頻繁に往来していることが考えられる。その一方で、経済発展著しいとはいえインドやタイは治安やインフラ環境に課題があり、選手から敬遠されているのではないだろうか。

ヨーロッパヨーロッパでは、ボスニア、ポルトガル、トルコといった国のシードランキングが低い。ボスニアは圧倒的に低くポイント獲得の可能性が非常に高い。既にサッカーではボスニアで親善試合を行っており、環境として問題もないことが考えられる。

## **第2項 25000ドルトーナメント**

25000ドルトーナメントは、ITF トーナメントからWTA トーナメントに輩出する上で重要なトーナメントである。アジア、オセアニア地域のシードランキングが、ヨーロッパヨーロッパ、北アメリカよりも低い。日本、ロシア、オーストラリアが注目される。ここで国内における国際トーナメントの中でも25000ドルトーナメントが日本人選手にとって好都合であることから、今後積極的に選手に25000ドルトーナメントに挑戦させること、または10000ドルトーナメントを25000ドルトーナメントに格上げすることも必要なのではないだろうか。

更にオーストラリアのシード選手ランキングが低いということが、日本にとって好都合である。時差の問題がなく選手のコンディションの調整が比較的容易である。また、グランドスラムを開催していることからトーナメントのホスピタリティは充実している。日本、オーストラリアの2カ国で重点的に出場することは、得策と考えられる。

## **第3項 今後の日本及びアジアのITF トーナメント環境**

日本プロテニス協会(JPTA)が主催し、世界テニス連盟(ITF)の国際トーナメントである「JPTA 能登国際女子オープンテニス」から、外国人選手、日本人選手それぞれについての課題と展望について指摘したい。

## 東アジアサーキット構想

ITF トーナメントカレンダーから、アジアはヨーロッパヨーロッパの次ぎにトーナメント開催数が多い地域であったが、北アメリカと異なりトーナメント開催週が少ない。また、同じアジアでも中東、東南アジア、東アジア等トーナメントが点在している。こうした状況から日本は確かに世界で 5 番目にトーナメント開催数が多い国であるが、ヨーロッパヨーロッパや南米??アメリカアメリカと異なり周辺国の開催数が少ないこと、或いは自国で選手がポイントを十分獲得できる開催数までは至らないことが問題点として挙げられる。

そこで、東アジアサーキットを提唱したい。日本、韓国、中国が連携してトーナメントを開催することで、ヨーロッパ、北米地域に対抗する第 3 勢力を構築するのである。中国、韓国は経済発展著しく今後開催数の増加が見込まれる、その中でこれまでトーナメントの開催実績がある ITF の理念の実現を促進する存在として日本がイニシアチブを取り、東アジアにトーナメントを普及させることも可能ではないだろうか。

## 日本人選手にチャンスを与えるトーナメント

第 5 章から日本国内トーナメントでは、外国人選手の出場が極めて少ないトーナメントが存在した。それは韓国、中国とトーナメント開催が重なる場合である。特に日本開催が 10000 ドルで、他国開催が 25000 ドル以上の場合に発生する。従って、国内選手、特にランキング 600 位代の選手達にチャンスを与える為にも、敢えてアジア諸国とトーナメントの日程を重ねることも検討される。

## 第 4 節 日本テニス界の今後

本節では、今後のテニス界の発展について示唆したい。

### 第 1 項 逆台形モデル

能登国際トーナメントのアンケートから引退後もテニスに携わりたいと考える選手が必ずしも多くないことが明らかになった。

ここに逆台形モデル(平田・中村、2006)という考え方がある。年齢を重ねると共に競技に関わる人数が減り、勝てる選手のみが生き残る「ピラミッド型」の構成をとるというのが従来のスポーツに関する構図であった。それに対して、年齢を重ねると共に関わる人が増えるという考え方である。つまり選手のみならず審判や指導者、あるいはスポ

ンサーやメディアといった競技の発展には欠かせない多くの分野でトップになる(＝ステークホルダー)人々が増えるという構図である。現在日本テニス界で多くの人口を持つ年齢別トーナメント、車いすテニスなどの障害者テニス、なども力強いステークホルダーである。確かに、世界に優秀な選手を輩出することは優先課題であるが、こうした逆台形モデルを実現することも、今後の日本テニス界の発展のためにとっても重要である。何故なら、テニス選手はテニスを愛し一旦テニスを職業として選択し豊かな経験を持つ貴重な人的資源であるからだ。彼女達は、日本テニス界の最もコアな人材の一人と言って良いだろう。こうした人材が国内で選手として活躍し、その後もテニスを支える逆台形モデルを実現できる環境を作ることこそ、将来の日本テニス界の発展の為に不可欠である。

プロ選手の経済状況について考えたい。両者(海外を拠点に活躍したいと考える選手と、国内を拠点に活躍したい選手)のアンケート回答結果に共通する、ITF トーナメントで得たいものは賞金であった。ここから、プロ選手であるにも関わらず、活動資金に苦しんでいるという現状が垣間見られる。プロテニス選手の収入源としては、賞金、スポンサー契約、イベント出演、コーチなどがあげられる。あるいは企業の社員という位置づけをもつ、いわゆる企業スポーツに所属する部類に入る選手達もいる。こうした収入源は、昨今の日本経済の不振、少子高齢化といった将来展望の暗さから来る厳しい経済事情の下では、一番初めに切り捨て、または切り下げられやすいものであり、選手の活動環境にとっての不安要素になる。この不安は、筆者が能登国際のトーナメントディレクターをした際に肌で感じられた。日本人選手の多くは、プロ選手であってもアマチュア選手と変わらない印象を受けた。世界で活躍する選手になるために、実力は勿論として、プロ選手としての自覚・威厳を身につけることも重要な要素である。こうした要素を、経済的要因が阻害している面があると考え得る。こうした現状に対して、選手が活動資金に苦勞しない新たなトーナメントや、プロ選手に収入が入るような仕組み作りが今後求められるのではないか。

かつては、日本プロテニス協会が1980年代前後に実施していた日本人プロ選手のためのトーナメントがあった。8名から16名のドローで、各地のテレビ局、スポンサーと組んでのプロトーナメントは、1回戦負けで10万円程度、優勝賞金100万円程度の大会であり、年間7～8トーナメントあった。世界ランキングとは関係なかったが、日本国内における生存を目指す日本人プロ選手にとっては賞金獲得の場、沢山の観客の前での活躍の場、マスコミへの自己アピールの場として、多くの日本人プロテニス選手の生活を守っていた。当時アメリカでも「ハンサム8」という世界トップのハンサム選手8名でのトーナメント興業をしていた。もう一度この種の大会を復活させて、テニス選手、そしてテニス関係者、関連業者の収入の場を創設する必要がある。

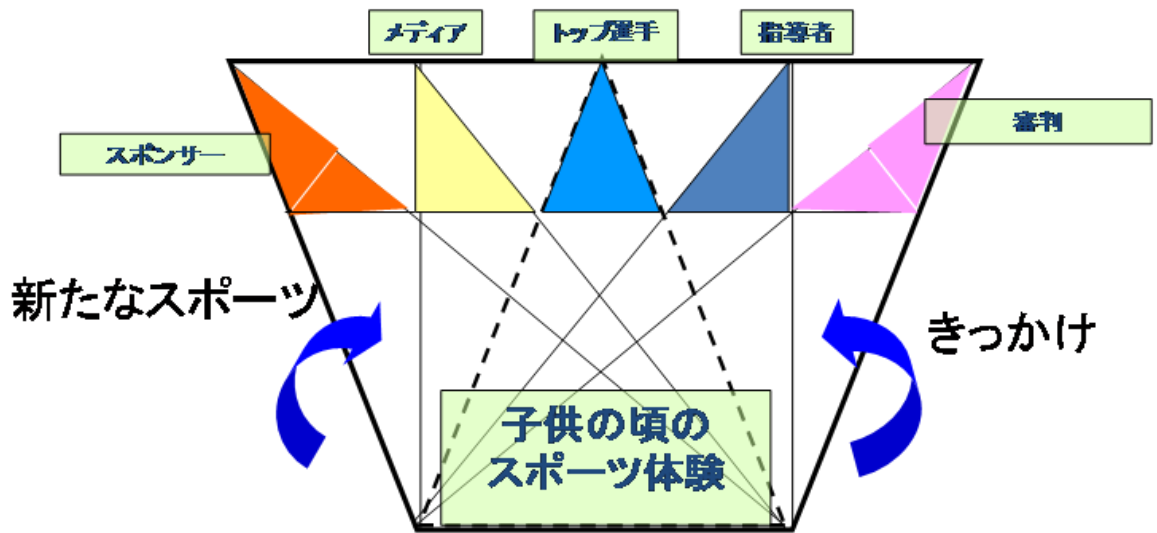


図 46 逆台形モデル(平田・中村、2006)

## 第2項 トリプルミッション

平田・中村(2006)は、プロスポーツ界において競技団体やプロクラブが永続的な発展をしていくためには、競技力向上を図っての「勝利」の増加、収益最大化のための「市場」の拡大、競技の裾野を広げる「普及」活動という3点の要素がそれぞれに拡大しつつ、互いに好影響を与え合うという循環が必要不可欠であると指摘している。そして、これを「トリプルミッション」と名付けている。

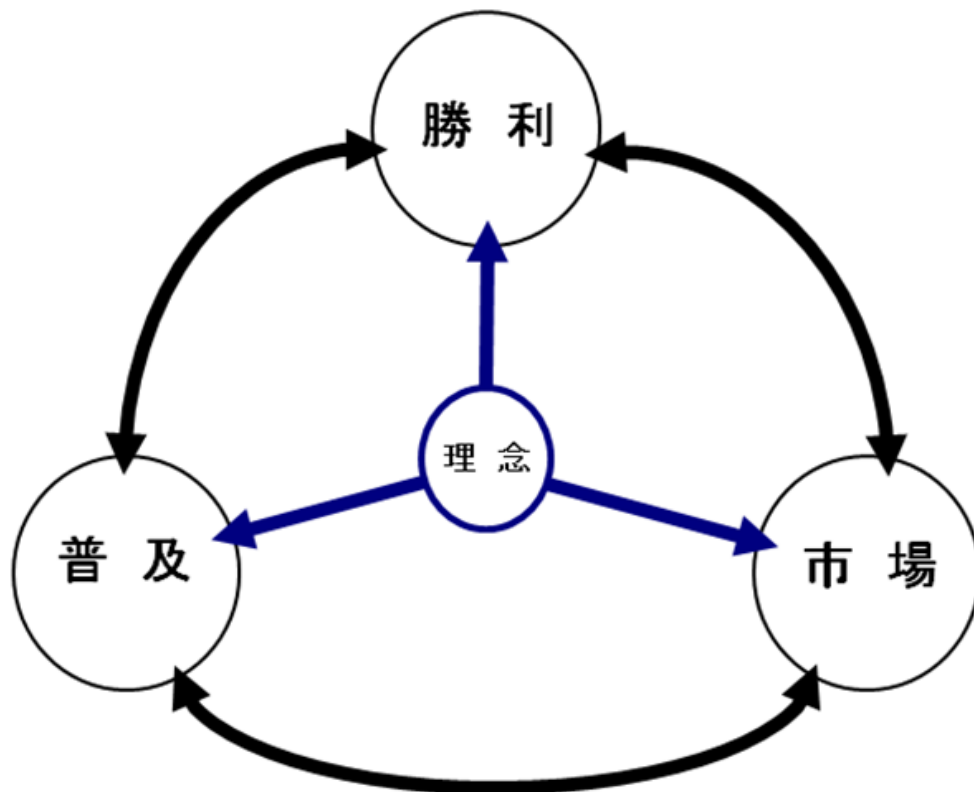


図 47 トリプルミッション(平田・中村、2006)

また、これら3つの各要素を拡大させる原動力となり、互いを密接に結びつけスムーズに好循環に導くために最も必要なものが、スポーツ組織がそれぞれに持つ「理念」であると説いている。「理念」とは、ビジネスにおける「企業理念」や「ミッション」と同等のものであり、全ての施策の方向性や方針はこの「理念」に従う。そして、この「理念」が欠如してしまうと各要素での拡大はもちろんのこと、互いを結び付けてトリプルミッションを好循環させて成功を得ることは困難になってしまう。

本節では、このトリプルミッションモデルを用いて日本テニス界の新たな展望を「勝利」、「市場」、「普及」のミッションにおいてどのような理念を持って好循環を目指せばいいのかを考察していく。

## 『勝利』とテニス界

### 「WTA トーナメント選手の輩出」

- ・ ITF トーナメントで優勝(25回～30回)
- ・ テニスサーキットの東アジア圏の形成
- ・ ポイント獲得の可能性の高いトーナメントへの積極的出場

日本テニス界における「勝利」はまずは前述の通り ITF トーナメントでの日本人の優勝回数を 25 回～30 回に上げることである。これは、ITF トーナメントから WTA トーナメントに選手を輩出する為には必要であろう。「日本テニス界にとってクリアすることが可能にみえる具体的な数字」という意味で、この「勝利」の位置づけは妥当ではないか。勿論、簡単な目標ではないことは言うまでもない。偶然の産物として輩出するのではなく、世界に挑戦するテニスプレーヤーの層を厚くすることが重要である。

日本人の優勝をトーナメント環境からサポートする意味での「東アジアテニスサーキット」を東アジア諸国と連携して形成する。そして、大陸を横切りまた帰るといった交通費の大量支出なく順番にトーナメントを回っていくことのできる経済的にも選手の体力的にも「e c o」サーキットであることが望ましい。

そしてポイント獲得の可能性が高いトーナメントに計画的に選手を出場させることで、選手のランキング向上に寄与したい。

## 『普及』とテニス界

### 「テニス人口の拡大」

- ・ テニスコンテンツの充実、多様化
- ・ 観るテニスの普及

日本のテニス人口が減少する一方で、アメリカのテニス人口は 2000 年から 2008 年にかけて 43% 増となっている。U S T A (US Tennis Association) はテニス人口を年齢別・地域別・テニス歴別など細かい区分別で把握しテニス人口増加に積極的に取り組んでいる。その要因としてあげられるのは、既存のテニス競技ではなく競技から派生した、人々が楽しみやすいコンテンツを U S T A が中心となって推進したことである。テニスとフィットネスを融合させたカーディオテニスは、健康志向の社会に浸透し普及が進んでいる。それらのコンテンツのキーワードは「健康」「大衆化」「オンライン」「簡単」「草の根」「安いまたはただ」「楽しい」であり、それらのキーワードとテニスを上手く結び

つけたことも、アメリカテニス人口の増加を大きく牽引している。このコンテンツは1コートに占める人数が既存のテニスより多い点で評価できる。日本でも「テニスの王子様」等アニメによるテニスブームが再燃されたが受け皿がないことが問題点として挙げられる為である。したがって、日本もこうしたテニスコンテンツの充実を行うべきである。

#### 「観るテニス」の普及

テニスの普及を考える上で、テニスプレーヤーの増加は勿論重要であるが、それに加えて「観るテニス」ファンをいかに増やすか、こちらにも普及の大きな力を注ぐことが必要である。東レパンパシフィックやジャパンオープン等、規模の大きな大会は勿論日本では、全国各地でトーナメントが開催されており、日本全国でプロトーナメントを観る機会を提供する。

### 『市場』とテニス界

#### 「テニストーナメントのビジネスモデルの構築」

- ・テニストーナメントの興行化
- ・トーナメントを通じた地域経済の活性化

#### 「テニストーナメントの興行化」

スポーツ市場の中でもスポーツ観戦料が成長分野であり、テニストーナメントで収益を拡大することができるようなモデルの構築が必要である。日本国内 ITF トーナメントの現状は、観戦料が無料であり、スポンサー収入に支えられた運営をしているのが現状である。プロトーナメントとしてスポンサー収入に加え、自前で収入を獲得できるモデルが求められる。

#### 「トーナメントを通じた地域経済の活性化」

筆者がトーナメントディレクターを務めた能登国際では、住民の期待が非常に大きいことがアンケートを通じて明らかになった。ITF トーナメントは、国際大会が地方で開催可能である点で、地域活性化に有効であるのではないかと。今後トーナメントを開催する上で地域の自治体や住民と協力してトーナメントを運営することで、将来的にはテニスを通じて地域に経済効果を生むようになることが望ましい。筆者は能登国際女子オープンテニスの実行委員長・トーナメントディレクターをしており、能登町役場の方々と力を合わせて能登国際の企画運営に努めて来た。まだ道半ばではあるが、能登町は人口約2万人(高齢者の比率が高い)の町であり、そこにいかに人々を集めるかに苦心惨憺して来た。金沢市から車で2時間半(つまり往復5時間)掛かる会場に、いかに足を運んで貰うかは大きな難問である。参加選手と打つことができるレッスン会・合宿のコーチ提供・お楽しみ抽選

会・選手と写真が撮れる会・金沢市からの観客バス輸送・表彰式でのマーチングバンドの演奏など、いろいろ考え 2010 には物産展も開催した。

## 「理念」とテニス界

### 「ノーブレス・オブリージュ」

最後に「勝利」「普及」「市場」のトリプルミッションが継続拡大していく好循環を起こすために、根幹となる理念が重要である。この理念はノーブレス・オブリージュとした。この言葉は中世ヨーロッパの貴族に用いられた言葉で「貴族には義務あり」の意味である。この考え方がヨーロッパにおける指導者観の基本といわれる。指導的立場にある人間は、当然、他の人より優れた勇気と力、自制心、高潔さ、犠牲的精神などの「徳」を備えていなければならない。つまりテニスは社会の模範となるスポーツであり、テニスプレーヤーは社会の模範となるように振る舞うべきである、ということである。本稿では、日本テニス界の再浮上は勝利にあることから端をなしているが、勝てば良いと言う訳ではない。

「見えなかったボールは、相手に有利な判定をせよ。」という教えは、テニス界の常識である。それは、相手を敬うというフェアプレー精神が本質にあり、テニスはこれを忘れてはならない。これまで述べてきた様に ITF トーナメントの拡大は、プロ競技としてのテニスを発展させてきたことはこと実であろう。しかしながらこうした機会の拡大は、勝利を優先する余り、プロ選手としての振る舞いが損なわれることが懸念される。

何故、ひとりでも多くの選手を世界に輩出する必要があるのか。それは、日本人テニスプレーヤーの活躍を通じて、日本に活気をもたらすことができるからだ。世界で活躍する選手の目標に向かって努力する直向な姿、日常の立ち居振る舞いから、人に夢や希望を与え続けることがテニス界の役目であろう。



## 第5章 結論

本研究の目的は、日本におけるITFトーナメントのあり方と今後の発展策に関する示唆を得ることである。

第1章では、筆者はプロテニスプレーヤーとしてまた、日本プロテニス協会第1号会員として日本のテニス界を再浮上させたいと考えており、ITFトーナメントの重要性を唱えたことを端に本研究を行った。

第2章では、本研究を次ぎの6つの視点から分析を行ったことを示した。1、ITFトーナメントとWTAトーナメントの関係について。2、ITFトーナメントの発展について。3、ITFトーナメントと諸外国の関係について。4、ITFトーナメントのレベルの違いについて。5、ITFトーナメントの開催時期による違いについて。6ITFトーナメントに参加する日本人の意識について。

第3章では、研究の結果を明らかにした。第1節では、WTAトーナメントに出場する為には、インターナショナルトーナメントが最も出場し易いトーナメントであることが分かった。第2節では、ITFトーナメントは大会開催数、賞金額共に右肩上がりに増加していることが分かった。第3節では、ITFトーナメントで近年成績を伸ばしている国はロシアとイタリアであり、それに対してアメリカの成績の低迷が見られた。第4節では、国別のレベルとしてアジアのレベルが低いこと、テニス後進国のレベルが低いことが分かった。第5節では、トーナメントの開催数は多いにも関わらず、アジアトーナメントの開催が重複するため、サーキットが形成されていないことが分かった。第6節では、選手の意識から、海外を拠点にプレーしたい人と国内でプレーしたい人に別れ、後者が多数を占めた。

第4章では、第3章の結果を受けて考察を行った。WTAトーナメントへ進むためのITFトーナメントでの獲得ポイント基準をSTEP1、STEP2、STEP3を設定した。そして選手の育成には、選手個人に委ねるロシア型と、協会のバックアップがあるイタリア型に分けることができた。そして1万ドル、25000ドルトーナメントの今後の方向性を提示した。更に、東アジアサーキットの形成を提唱した。そして最後に、日本のテニス界の今後を逆台形モデル(平田・中村 2006)及び、トリプルミッション(平田・中村 2006)によって提唱し、その理念を「ノーブレス・オブリージュ」と定義し、日本テニス界が世界に選手を輩出する意義を、社会の模範となる人間を世の中に輩出することで社会に貢献するとして、論をとじた。

## 第6章 謝辞

筆者は生まれたその日にテニスラケットに触り、プロテニス選手になるべく育てられ、今もテニスのお陰で幸せな日々を送ることができています。現在日本プロテニス協会の理事をしていますが、現役引退後はテニスへの還元を考えなさいと親に言われ、そのためにテニスを学術的に研究してみたいと思いました。

早稲田大学大学院スポーツ科学研究科で学ぶきっかけをくださったのは平田竹男教授です。厳しい、しかし愛情あるご指導の元、筆者を導いてくださった平田竹男教授に心より御礼申し上げます。この研究にあたり、日本テニスの歴史、日本人特に女子テニス選手の軌跡、世界各国のテニス事情など、深く掘り下げて分析できたことは大きな喜びでした。

その他、アンケートに御協力くださった能登国際女子オープンテニス関係者、インタビューに快く御協力くださったテニス関係者のみなさま、特に何回ものしつこい筆者の質問にお答えくださった日本テニス協会、日本テニス事業協会様には、この論文が今後のテニス界に貢献することによって御礼とさせていただこうと、最大限の力を注ぎました。

この論文執筆にあたり、ご指導頂きました副査の中村好男教授、木村和彦教授をはじめ、早稲田大学スポーツ科学研究科でご指導下さった教授及び講師の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。さまざまなサポートをして頂いた畔蒜洋平氏をはじめとする学生の方々、苦楽を共にした平田研究室5期生のみなさまにも、心より御礼申し上げます。

筆者を育て、今回早稲田大学大学院入学にあたり、このような年になる私の学費を支払ってくれた親、そして心で支えてくれた夫にも感謝の意を表します。

最後に、筆者の愛するテニス、生まれてからこの方ずっと共に歩み続けてきた友とも言えるテニスに感謝し、今後もテニスを高めつつ邁進することを誓って、謝辞とさせていただきます。

## 第7章 文献目録

- ITF. (2004). ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players in 2004.
- ITF. (2005). ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players in 2005.
- ITF. (2006). ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players in 2006.
- ITF. (2007). ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players in 2007.
- ITF. (2008). ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players in 2008.
- ITF. (2009). ITF Pro Circuit Titles Won By Nations Players in 2009.
- ITF. (2009). ITF WOMEN'S CIRCUIT Prize Money 1983-2008.
- ITF. (2009). ITF Women's Drawsheet Statistics Period 29 Dec 2008 to 05 Jul 2009.
- ITF Women's Tennis Circuit. 参照日: 2010年12月24日,  
参照先: <http://www.ITFtennis.com/womens/>
- Sony Ericsson WTA Tour. (2010). 2010 Sony Ericsson WTA Tour Cut-Offs As of 10/27/2010.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2003). Singles Rankings Numeric List For 10 November 2003.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2004). Singles Rankings Numeric List For 27 December 2004.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2005). Singles Rankings Numeric List For 14 November 2005.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2006). Singles Rankings Numeric List For 18 December 2006.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2007). Singles Rankings Numeric List For 12 November 2007.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2008). Singles Rankings Numeric List For 10 November 2008.
- Sony Ericsson WTA Tour. (2009). Singles Rankings Numeric List For 9 November 2009.
- SSF 笹川スポーツ財団. (1996). スポーツ白書～2001年のスポーツ・フォー・オールに向けて～.
- SSF 笹川スポーツ財団. (2001). スポーツ白書 スポーツ・フォー・オールからスポーツ・フォー・エブリワンへ.
- SSF 笹川スポーツ財団. (2006). スポーツライフ・データ.
- SSF 笹川スポーツ財団. (2006). スポーツ白書～スポーツの新たな価値の発見～.
- WTA. (2010). WTA TOUR RANKING SYSTEM.
- WTA ホームページ 参照日: 2010年12月24日,

参照先: <http://www.WTAtour.com/page/Home/0,,12781,00.html>.

社団法人テニス事業協会. (2008). テニスカムバック・テニスインテグレーション調査.

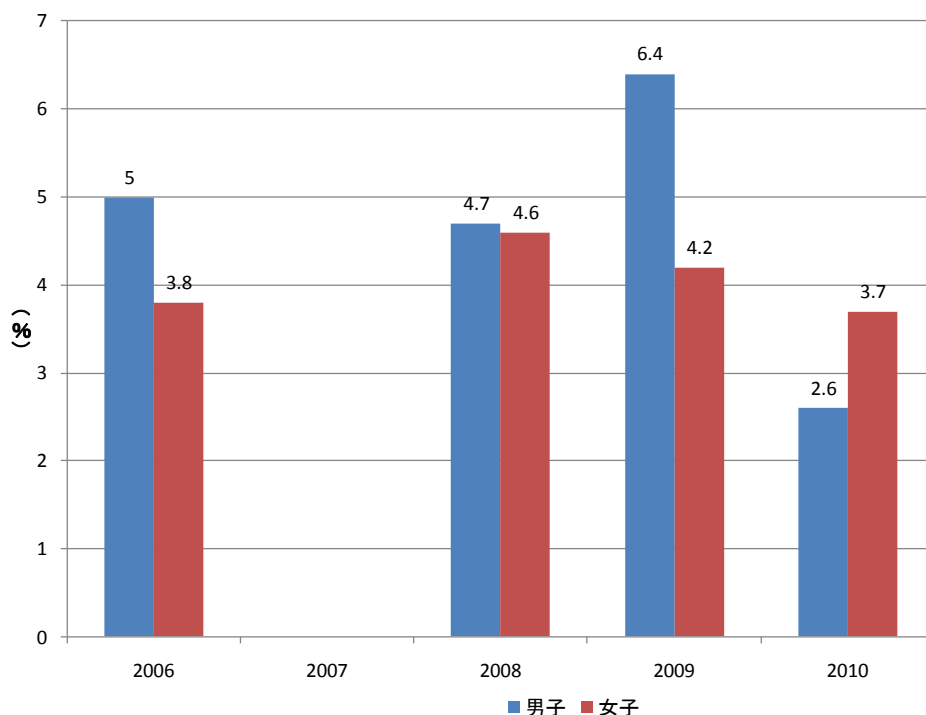
社団法人テニス事業協会. (2008). テニスに関するアンケート(過去経験者). アンケート.

社団法人テニス事業協会. 条件別テニス人口調査.

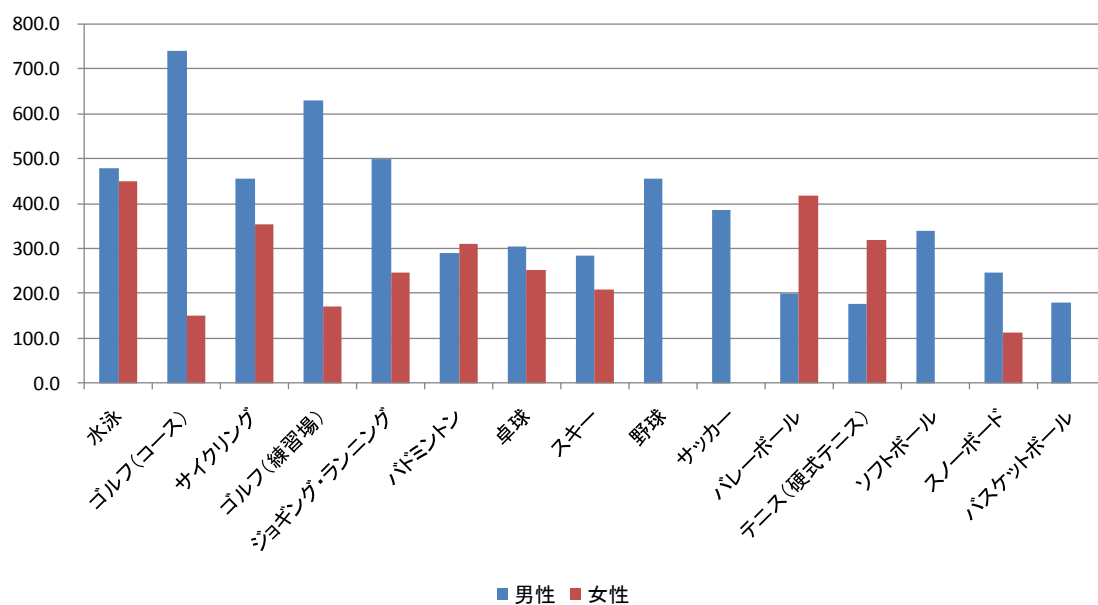
社団法人日本テニス事業協会. (2002). 民間テニス事業所閉鎖一覧表.

日本生産性本部. (2010). レジュー白書 2010.

② ウィンブルドンテニス視聴率

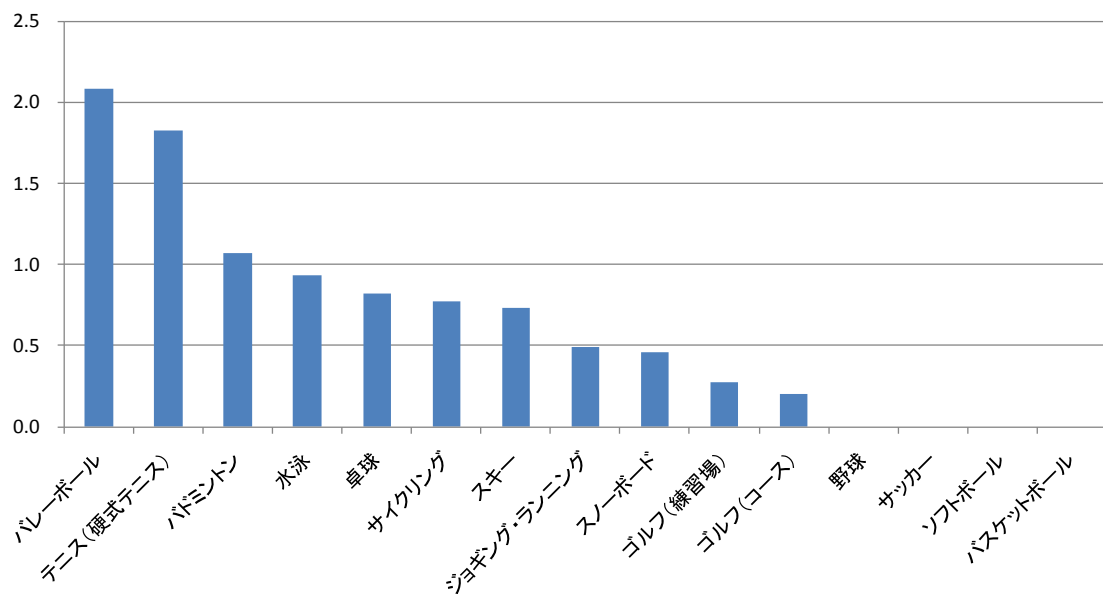


③ 種目別運動・スポーツ男女推計人口 (全体・性別・実施年1回以上)  
SSF 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2008



④ 男女比率

出典：SSF 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2008

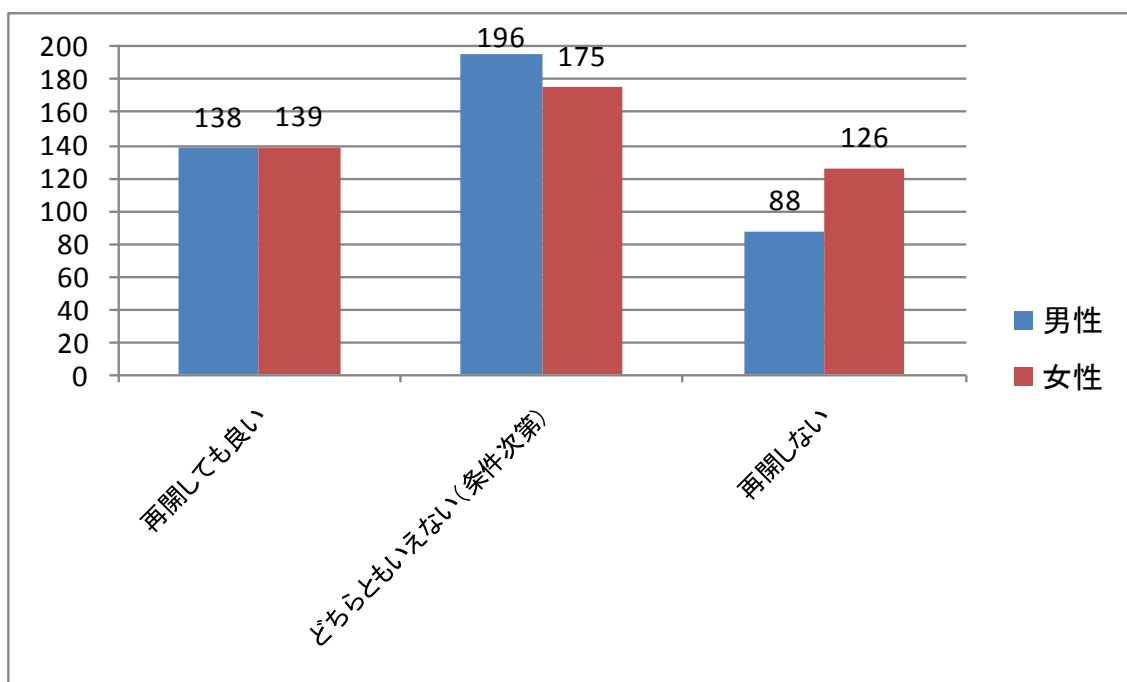


⑤ 好きなスポーツ・よく観るスポーツ・行っているスポーツ (2006)

出典：三菱UFJリサーチ&コンサルティング・Yahoo!リサーチの共同調査 (n = 2000)

	好きなスポーツ (単数回答)	よく観るスポーツ (複数回答)	行っているスポーツ (複数回答)
1	野球 19.7%	野球 53.1%	水泳 8.3%
2	サッカー 12.2%	サッカー 46.2%	スキー・スノーボード 8.2%
3	バレーボール 6.3%	バレーボール 28.5%	体操・トレーニング・エアロビクス 8.1%
4	スキー・スノーボード 6.2%	K-1などの総合格闘技 24.2%	ゴルフ《体操と同率》8.1%
5	F1・ラリー・バイクなどのモータースポーツ 5.5%	ジョギング・マラソン・駅伝 18.8%	テニス 7.3%

⑥ あなたは機会があり、条件が整えばテニスを再開しようと思っっていますか。出典：テニスクラシック・テニスインテグレーション調査



⑦ あなたがテニスを止めてしまった一番の理由は何ですか。n=862

	男性	女性	総計	割合(%)
一緒やる仲間がいないから	129	86	215	24.9%
テニスをする時間がないから	85	104	189	21.9%
その他	32	45	77	8.9%
テニス自体が楽しくない(楽しめない)から	27	46	73	8.5%
いくらやってもなかなか上達しない(しなかった)から	22	48	70	8.1%
体力が衰えたから	24	30	54	6.3%
近所にコートがないから	23	16	39	4.5%
テニスに回すお金がないから	16	20	36	4.2%
他のスポーツを行っているから	26	9	35	4.1%
体に支障をきたした(テニスひじ等)から	14	14	28	3.2%
テニスコートの予約が取りづらいから	14	10	24	2.8%
以前プレーしていたテニスコートがなくなってしまったから	6	3	9	1.0%
良い指導者にめぐり合えなかったから	1	6	7	0.8%
近所にスクールがないから	2	3	5	0.6%
試合に勝てないから	1	0	1	0.1%

⑧ あなたがテニスを再開するにあたり、最も重要な機会、条件は何ですか。(n=648)

	男性	女性	総計	割合(%)
手軽でリーズナブルな金額でテニスが楽しめる	67	87	154	23.8%
テニスコートが自宅や勤務先の近所にある	57	37	94	14.5%
遊びながらテニスができるようになる(楽しめる)プログラムがある	28	34	62	9.6%
一人で行ってもテニスができる(壁打、オートテニス等)	33	21	54	8.3%
早朝、昼休み、夜間等、自分の都合に合わせてプレーができる	29	18	47	7.3%
気軽に指導してくれるコーチやプログラムがある	12	31	43	6.6%
一人で行っても相手をしてくれるスタッフがいるサービス	24	14	38	5.9%
一人で行っても一緒にプレーする仲間をアレンジしてくれるサービス	19	10	29	4.5%
テニススクールが自宅や勤務先の近所にある	12	14	26	4.0%
テニスコートの予約が簡単に取れる	15	10	25	3.9%
上手くなくておゲームなどに参加できるプログラムがある	11	13	24	3.7%
テニス以外にエクササイズ等のプログラムが併設されている	6	7	13	2.0%
その他	21	18	39	6.0%

⑨ あなたがテニスを再開するにあたり、魅力的に感じる施設、サービスは何ですか。(いくつでも) n=2532

	男性	女性	総計	割合(%)
インターネットや携帯電話で近くでテニスができる場所を検索できるシステム	93	82	175	6.9%
インターネットや携帯電話でテニスを教えてくれるサービスを検索できるシステム	28	29	57	2.3%
インターネットや携帯電話でレッスン・コートの予約が出来るサービス	62	79	141	5.6%
自分の都合に合わせてプレーする日時を指定できるサービス	152	170	322	12.7%
テニスの技術レベル(ゴルフのハンディキャップのようなもの)のを計ってくれるサービス	39	35	74	2.9%
同等のレベルの人とプレーさせてくれるサービス	88	72	160	6.3%
テニスを再開するために必要な手引きや情報を提供視してくれるサービス	42	38	80	3.2%
壁打ちできる場所(壁打ちコート)	98	84	182	7.2%
遊びながらテニスができるようになるプログラム	83	126	209	8.3%
一人で行ってもプレーする相手が見つかるサービス	83	76	159	6.3%
一人で行っても相手をしてくれるスタッフがいるサービス	90	99	189	7.5%
テニス以外にエクササイズ等のプログラムが提供されている	18	43	61	2.4%
ラケット、ウェア、シューズの貸し出しサービス	68	110	178	7.0%
家族と一緒にプレーできる施設	87	104	191	7.5%
オートテニスマシン	65	49	114	4.5%
早朝、昼休み、夜間にプレーできるサービス	74	61	135	5.3%
指導してくれるコートが常駐しているテニスコート	32	61	93	3.7%
その他	8	4	12	0.5%

⑩ リバイバル需要を掘り起こす

出典「レジャー白書 2010～2020年の余暇 人口減少社会への挑戦～」

人口減少・少子高齢化が進む中、過去にある余暇活動種目を経験したことのある人々の掘り起こし、いわゆる“リバイバル需要”へ業界の関心が高まっている。すでにその活動の楽しみ方を知っている人々は、新規顧客に比べて需要掘り起しのハードルが低いといわれ、どのような種目・業種で需要のリバイバルが期待できるのか可能性を探った。

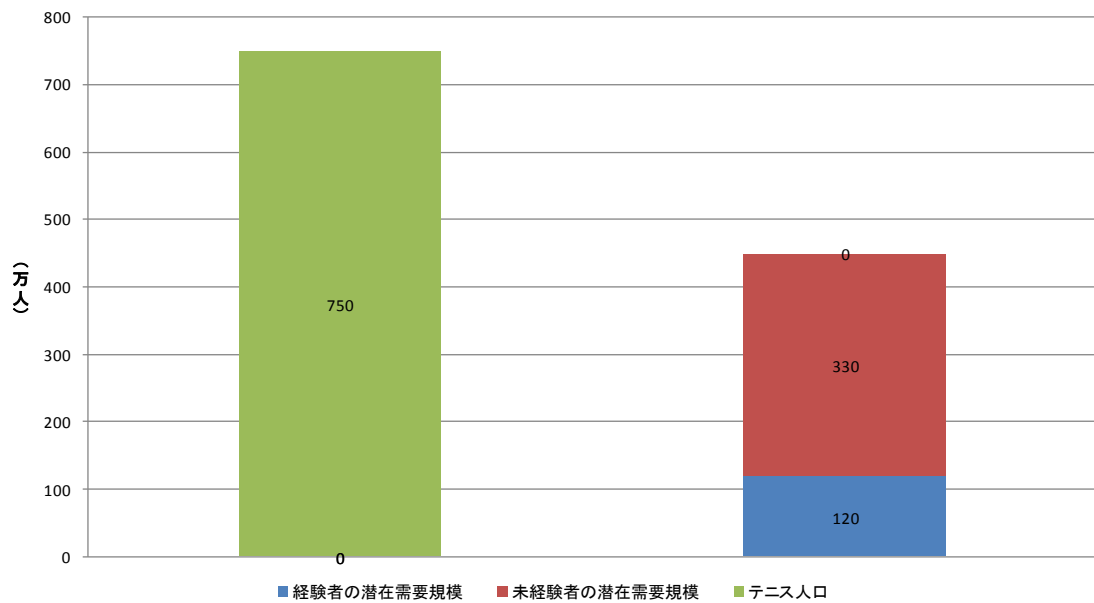
ある活動に過去に参加した経験のある人々のもつ“潜在需要”(現在実現していないニーズ)を調べた結果である。「海外旅行」「オートキャンプ」「登山」など観光・行楽部門の種目が高い値となっているほか、スポーツ部門「水泳(プールでの)」「スキー」「テニス」、趣味・創作部門「観劇(テレビは除く)」「音楽会・コンサートなど」などの種目が上位となった。娯楽部門の種目では、大きな経験者の潜在需要は見られなかったのも特徴である。特に「スキー」など、経験者の潜在需要が現在の参加人口の半数を超える種目もある。



図表5 経験者の潜在需要 上位10種目

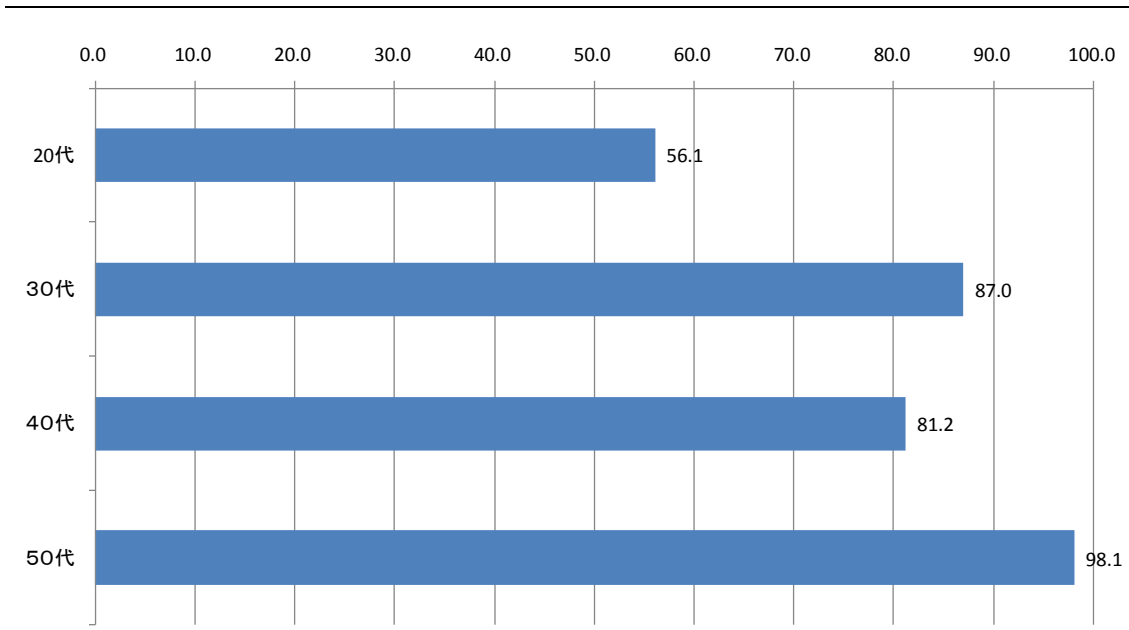
	参加率 (%)	参加人口 (万人)	経験者の潜在需要 (%)	経験者の潜在需要規模 (万人)	休眠率 (%)
1 海外旅行	16.7	1050	28.0	2870	45.1
2 水泳 (プールでの)	15.8	1620	7.9	810	51.1
3 観劇 (テレビは除く)	16.9	1730	5.4	550	26.7
4 オートキャンプ	4.7	480	5.2	530	20.6
5 登山	12.0	1230	4.5	460	39.1
6 催し物、博覧会	29.9	3070	4.5	460	34.2
7 スキー	7.0	720	4.3	440	46.2
8 音楽会、コンサートなど	34.7	3560	3.7	380	28.2
9 テニス	7.3	750	3.2	330	37.7
10 釣り	10.2	1050	2.5	260	34.0

⑩ テニス潜在人口 出典：レジャー白書 2010

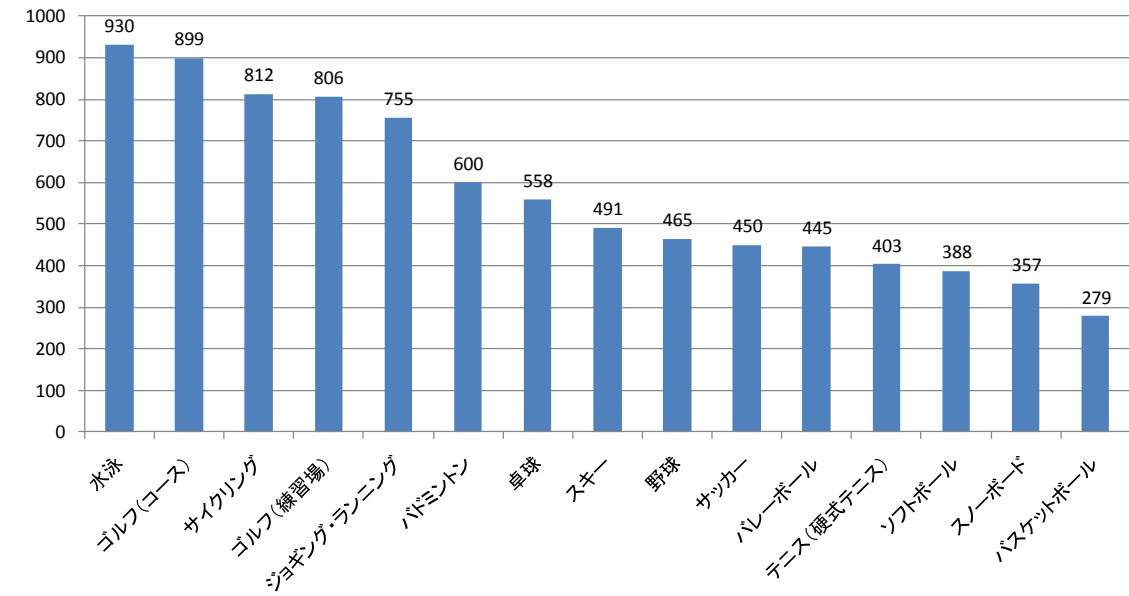


⑪ テニスの潜在人口 (年代別)

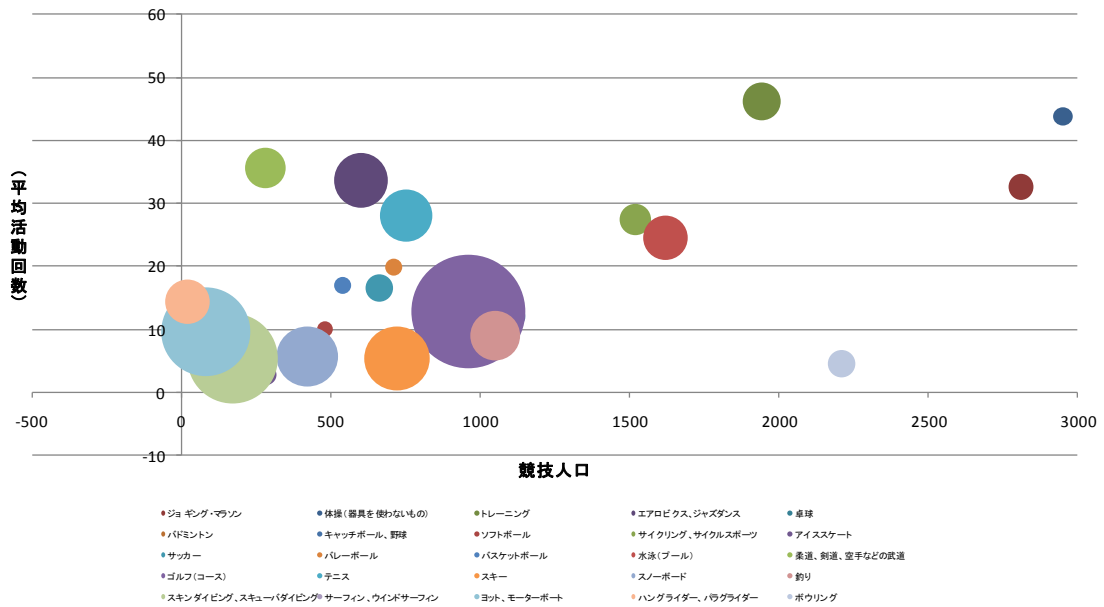
SSF 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2008「最も行いたいスポーツ」及び平成19年3月31日現在の住民基本台帳人口より筆者作成



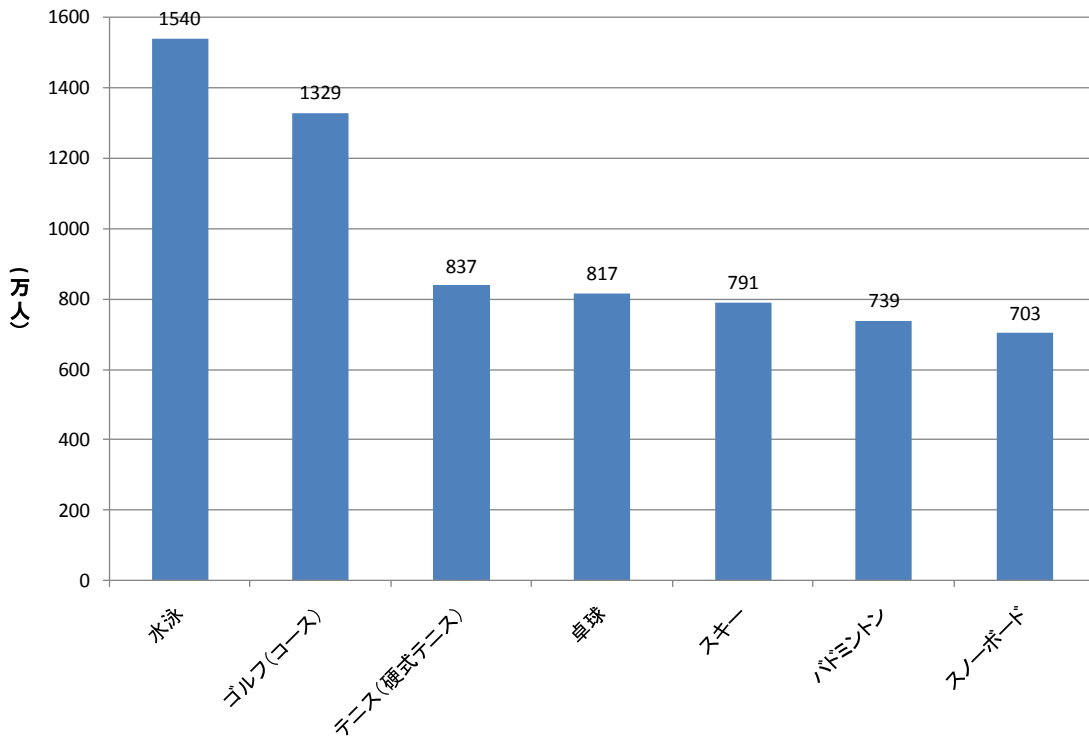
⑬ 種目別運動・スポーツ実施率及び推計人口（全体・性別・年1回以上）



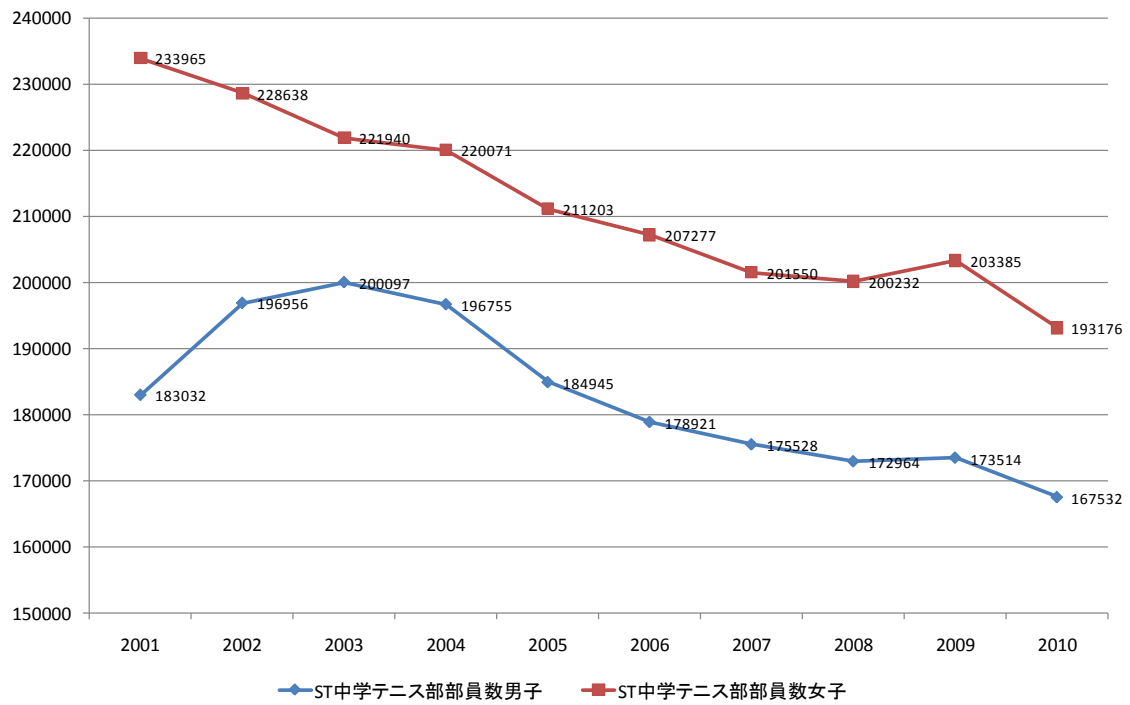
⑭ 日本の競技俯瞰



⑮ 今後行ないたい運動・スポーツ種目一覧 (オリンピック種目)  
出典：SSF 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2008

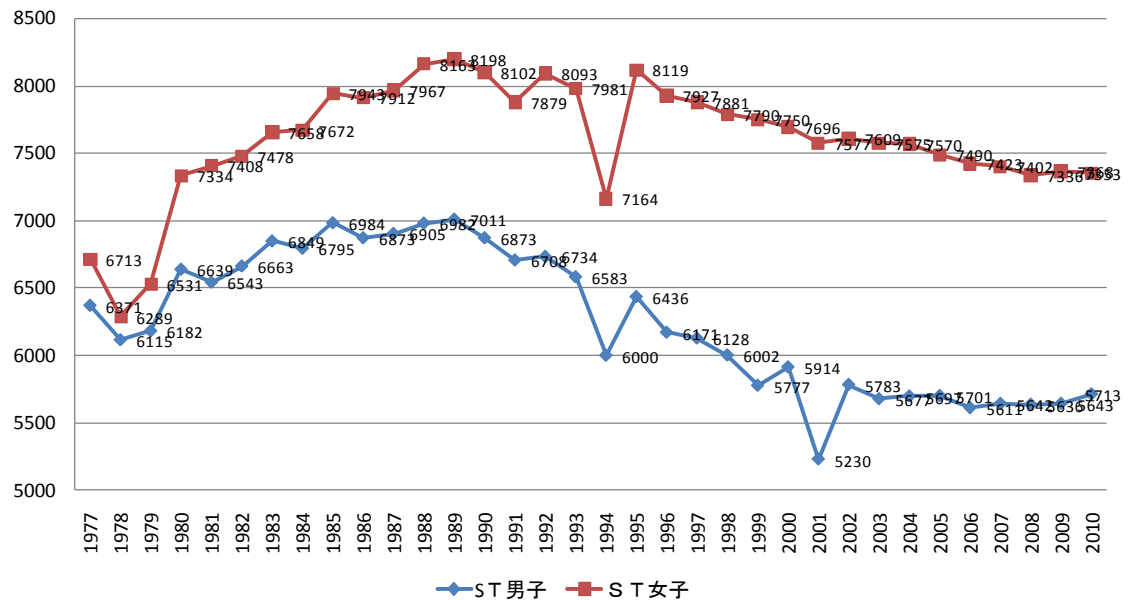


⑯ 中学ソフトテニス部員数  
出典：文部科学省「全国中学校体育大会競技加盟校の推移」



⑰ 中学におけるソフトテニス部数の推移

出典：文部科学省「全国・中学校体育連盟 加盟校・参加校調査」及び「全国中学校体育大会競技加盟校の推移」から筆者作成

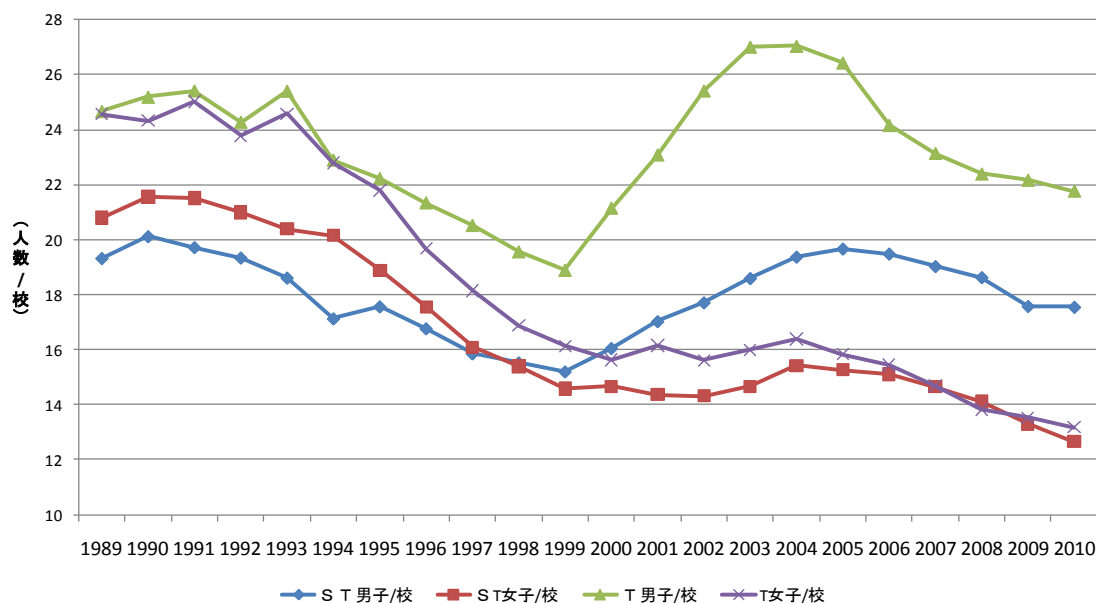


⑱ テニスの王子様

テニスの王子様	
作者	許斐剛
出版社	集英社
掲載誌	週刊少年ジャンプ
発表期間	1999～2008
巻数	42巻
2001～2005テレビアニメ化	

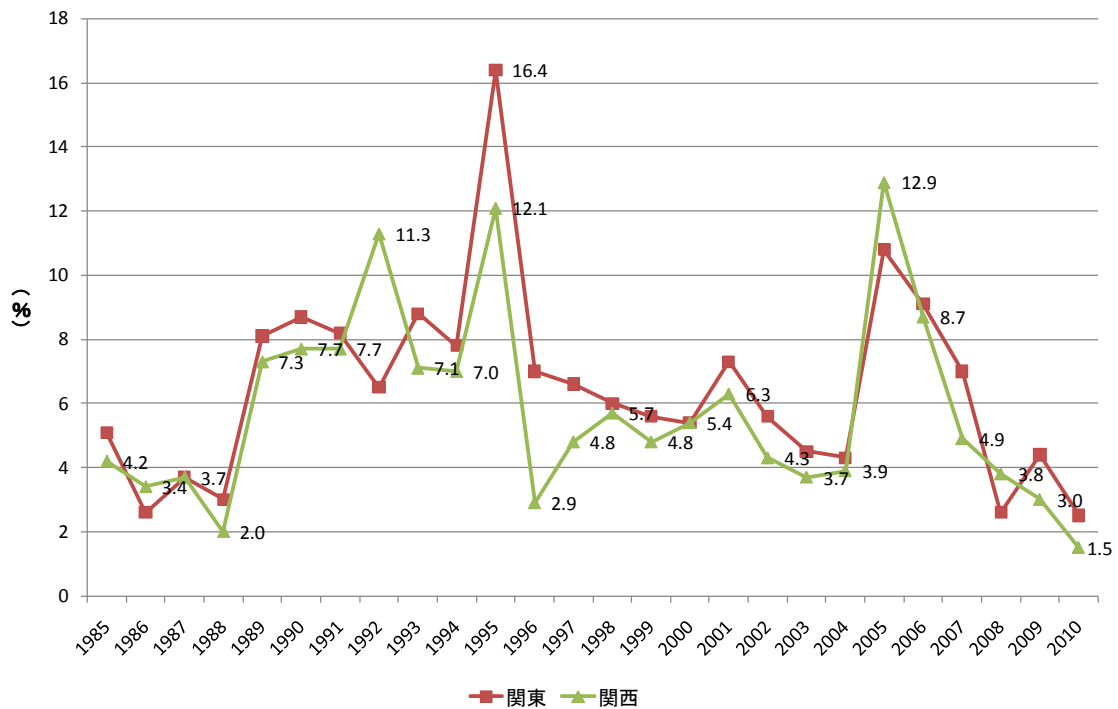
新テニスの王子様	許斐剛
作者	集英社
出版社	ジャンプスクエア
掲載誌	2009年4月～連載中
発表期間	既刊4巻(2010年11月時点)
巻数	

㊿ テニスとソフトテニスの高校テニス部一校当たりの平均部員数



テニス部員の増加がそのまま、テニス部当たりの人数の増加になってしまっている。つまり受け皿は拡大されていないという事である。

<sup>21</sup> 東レパンパシフィック視聴率の推移 (決勝日)

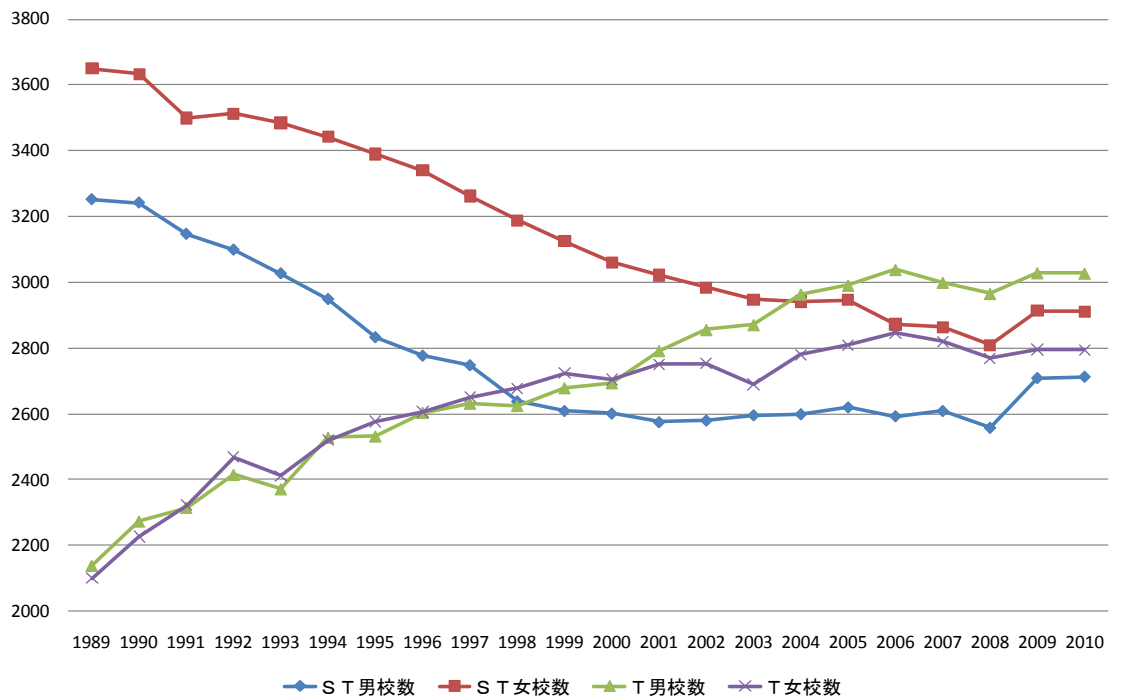


1995年伊達公子、2005年マリア・シャラポワ優勝

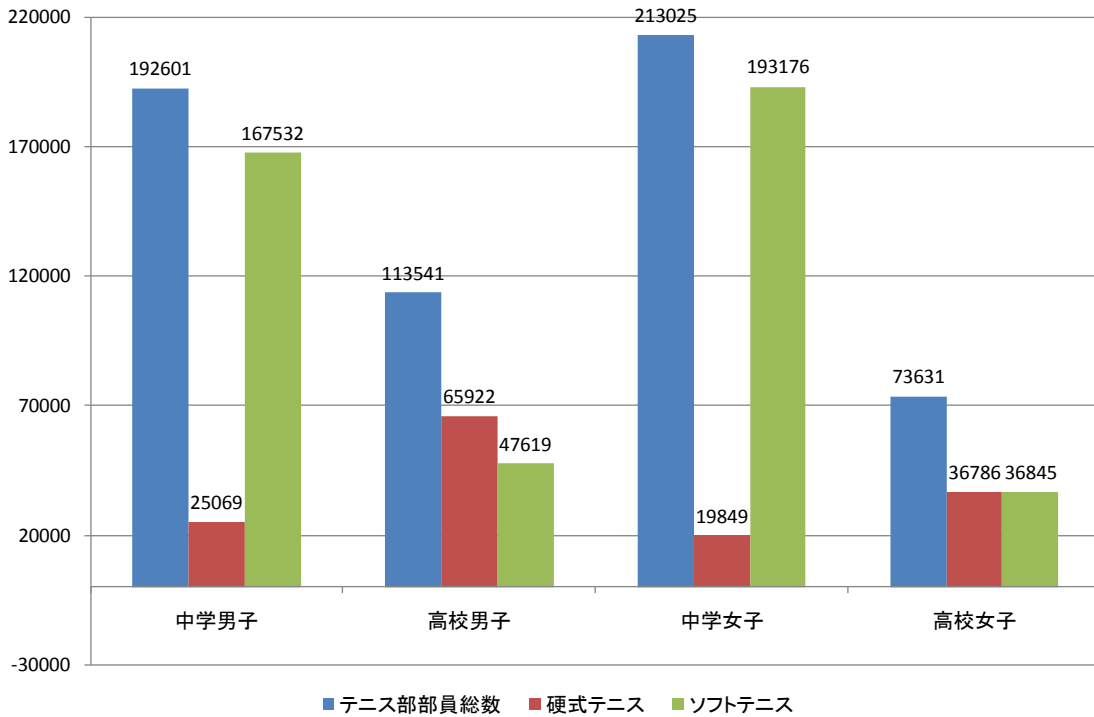
22 東レ・パンパシフィックテニス 実施概要推移

開催年	開催場所	本戦開催日程	シングルス優勝者	賞金総額	観客動員	TV視聴率(決勝)	
						関東	関西
1984	東京体育館	12月11日～16日	マヌエラ・マレーバ	US\$300,000	11,600人		
1985	東京体育館	12月10日～15日	マヌエラ・マレーバ		16,800人	5.1	4.2
1986	湘南スポーツセンター	9月9日～14日	ステフィ・グラフ		10,700人	2.6	3.4
1987	湘南スポーツセンター／代々木第2体育館	9月15日～20日	ガブリエラ・サバティーニ		13,500人	3.7	3.7
1988	湘南スポーツセンター／青山学院記念館	4月26日～5月1日	パム・シュライバー		13,400人	3.0	2.0
1989	青山学院記念館	1月31日～2月5日	マルチナ・ナブラチロワ		19,395人	8.1	7.3
1990	早稲田大学記念会堂／代々木第2体育館	1月30日～2月4日	ステフィ・グラフ	US\$350,000	17,450人	8.7	7.7
1991	東京体育館	1月29日～2月3日	ガブリエラ・サバティーニ		31,700人	8.2	7.7
1992	東京体育館	1月28日～2月2日	ガブリエラ・サバティーニ		32,171人	6.5	11.3
1993	横浜アリーナ	2月2日～7日	マルチナ・ナブラチロワ	US\$750,000	35,700人	8.8	7.1
1994	東京体育館	2月1日～6日	ステフィ・グラフ		39,100人	7.8	7.0
1995	東京体育館	1月31日～2月5日	伊達公子	US\$806,250	36,574人	16.4	12.1
1996	東京体育館	1月30日～2月4日	イバ・マヨリー	US\$926,250	41,924人	7.0	2.9
1997	東京体育館	1月28日～2月2日	マルチナ・ヒンギス		43,458人	6.6	4.8
1998	東京体育館	2月3日～2月8日	リンゼイ・ダベンポート		45,638人	6.0	5.7
1999	東京体育館	2月2日～2月7日	マルチナ・ヒンギス	US\$1,000,000	42,941人	5.6	4.8
2000	東京体育館	2月1日～2月6日	マルチナ・ヒンギス	US\$1,080,000	42,909人	5.4	5.4
2001	東京体育館	1月30日～2月4日	リンゼイ・ダベンポート	US\$1,180,000	41,448人	7.3	6.3
2002	東京体育館	1月29日～2月3日	マルチナ・ヒンギス	US\$1,224,000	41,910人	5.6	4.3
2003	東京体育館	1月28日～2月2日	リンゼイ・ダベンポート	US\$1,300,000	43,673人	4.5	3.7
2004	東京体育館	1月29日～2月3日	リンゼイ・ダベンポート		44,630人	4.3	3.9
2005	東京体育館	2月1日～2月6日	マリア・シャラポワ		50,350人	10.8	12.9
2006	東京体育館	1月31日～2月5日	エレナ・デメンティエフ	US\$1,340,000	52,186人	9.1	8.7
2007	東京体育館	1月30日～2月4日	マルチナ・ヒンギス		53,357人	7.0	4.9
2008	有明コロシアム	9月16日～9月21日	ディナラ・サフィナ		55,431人	2.6	3.8
2009	有明コロシアム	9月27日～10月3日	マリア・シャラポワ	US\$2,000,000	55,008人	4.4	3.0
2010	有明コロシアム	9月26日～10月2日	キャロライン・ウォズニアッキ	US\$2,000,000	55,412人	2.5	1.5

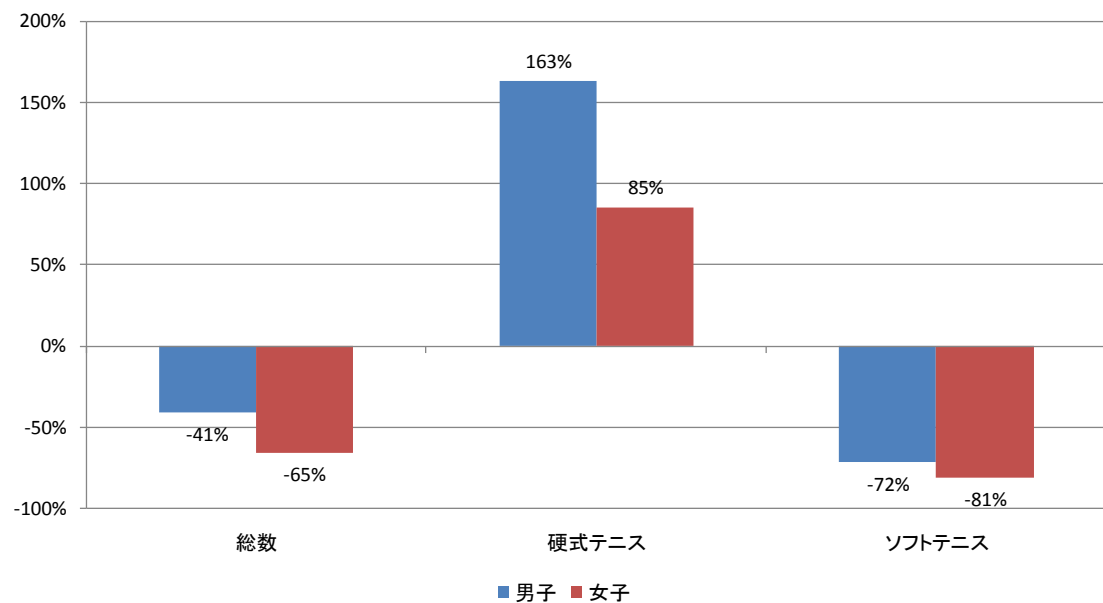
23 高校におけるテニス部及びソフトテニス部数の推移



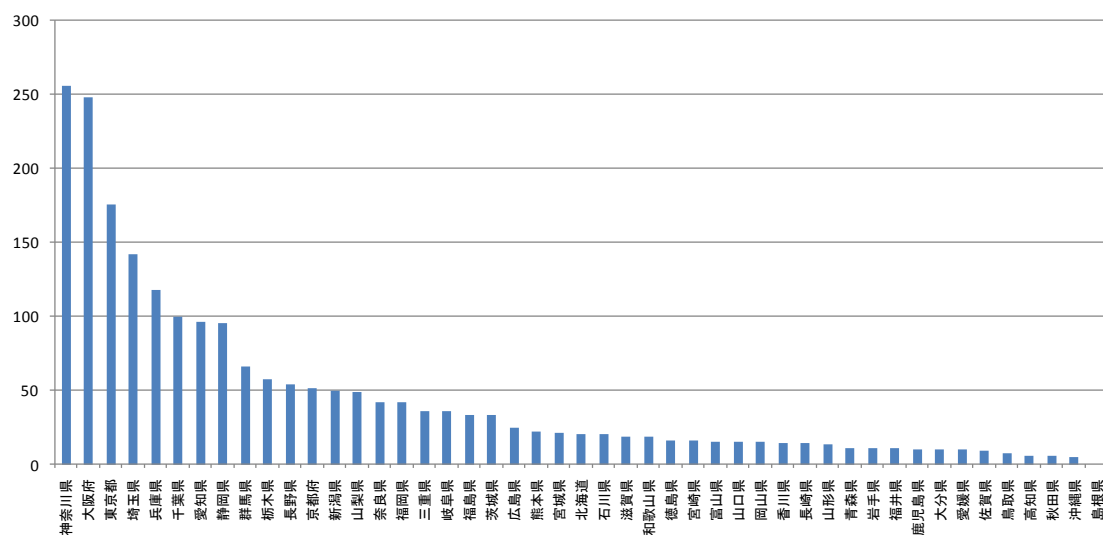
24 2010年 硬式・軟式テニス部員数（中学・高校）



25 2010年 硬式・軟式テニス部員数増減（中学・高校）



<sup>26</sup>民間テニス施設閉鎖事業所数都道府県別（1992～2001）  
 出典：社団法人テニス事業協会 民間テニス事業所閉鎖一覧表



<sup>28</sup> 成城グリーンプラザテニスクラブの閉鎖理由について、(株) サッポロススポーツプラザ代表取締役社長斎藤興治氏は、「バブル経済が崩壊し、景気が長期低迷する中、営業不振、売上減少の一途で歯止めがかからず業績が悪化。クラブ会員数が平成2年の5割となった。近隣テニスクラブとの競合、会員制テニスクラブ利用需要減少の現れである。景気低迷下、消費支出の選別指向はさらに強まると思われ、スポーツ関連事業の環境好転は厳しく、成城グリーンプラザ事業も回復の期待は今後とも難しい。」としている。(平成11年10月・成城グリーンプラザテニスクラブ様宛の書簡より)

<sup>29</sup> テニス難民 (テニスシンポジウム実行委員会2000)



---

「難民の実態ですが、私ども、この東京周辺でいろいろできる限りに調べてみました。1994年から本年に至るまで、21のクラブが閉鎖になっています。コート数で200、会員が1面50人として、約1万人の会員が会員資格を喪失、これを「テニス難民」と呼んでいるわけです。傾向としては、1994年から8年までの間は、どちらかという、個人のいわゆるオーナーが、相続税の支払いのためにクラブを閉鎖されて、後ほど売却されるというような、個人的な色彩が強かったわけですが、この2、3年は、大型の、いわゆる企業系の大型クラブの閉鎖が目立っています。日本鋼管の京浜テニスクラブ、それから、講談社のミタカファミリー、東武鉄道の北春日部テニスクラブとか、また、本日もパネリストとしてご出席いただいております、東急不動産の多摩川園ラケットクラブとかというように、大企業系のクラブが閉鎖に追い込まれています。閉鎖の理由や、その原因、背景につきましては、パネリストの皆様方のお話を伺いますが、我々調べてみまして、この2000年に入りまして、実に5つのクラブが閉鎖になっています。毎月、約1つの割合でテニスクラブがつぶれているということで、まさに都会周辺では、テニスができなくなるのではないかという、会員一同、ショックを感じているわけでございます。」

- 「重い税負担」を訴えるクラブ経営者の陳情（テニスシンポジウム実行委員会事務局）

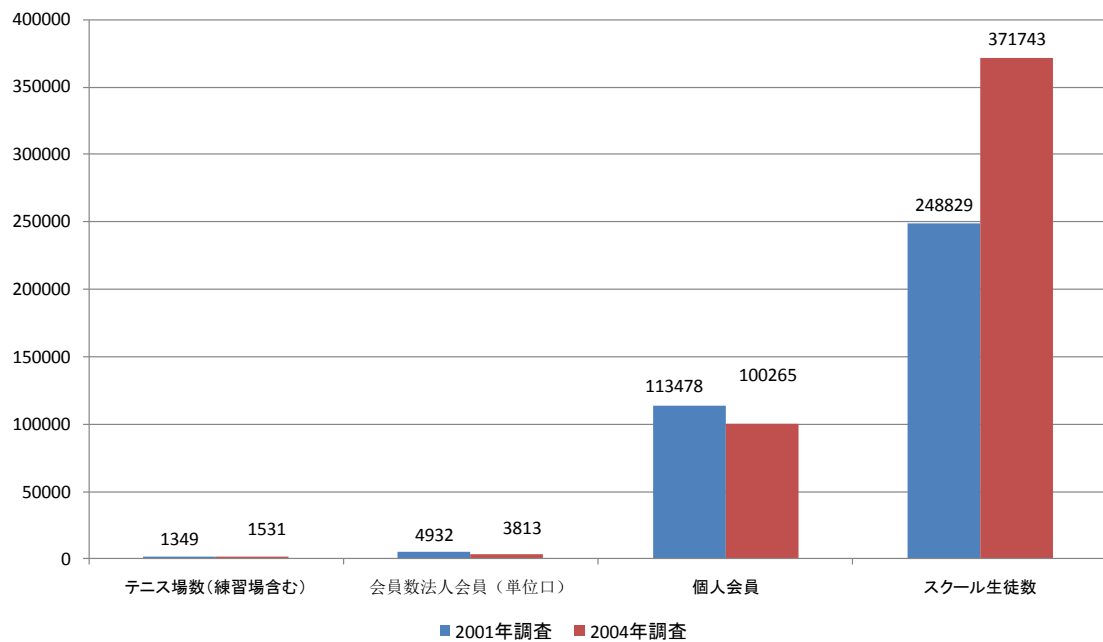
◇都会地クラブは固定資産税が収入の5割とも

テニス事業者が抱えている一番大きな問題は、現行の税制という。一つは固定資産税で、土地の評価額の上昇と地価税によりここ数年の固定資産税の伸びが高く、クラブ収益の30～50%にも達するという。もう一つは相続税で、オーナーの代替わりの時にはその負担に耐えられず土地を処分することになってしまふ。また、永続的不況ゆえであろうか、クラブ会員数の減少も目立つとしている。会費収入が目減りし、税金の上昇と相まってクラブの経営を圧迫している、という。事業者側としては、多方面に税金に対する特別配慮を陳情しているが実効は上がっていない。

◇災害避難地にも有用、スポーツ緑地法導入を

スポーツ施設は地域に密着した準公共的文化施設であり、災害時の避難地としても有用である。これらの公益性を考慮して 税制面で固定資産税の評価を生産緑地なみとする「スポーツ緑地法」（仮称）を制定して税負担を軽減し、事業が継続できるよう スポーツ界を挙げて取り組む必要がある。

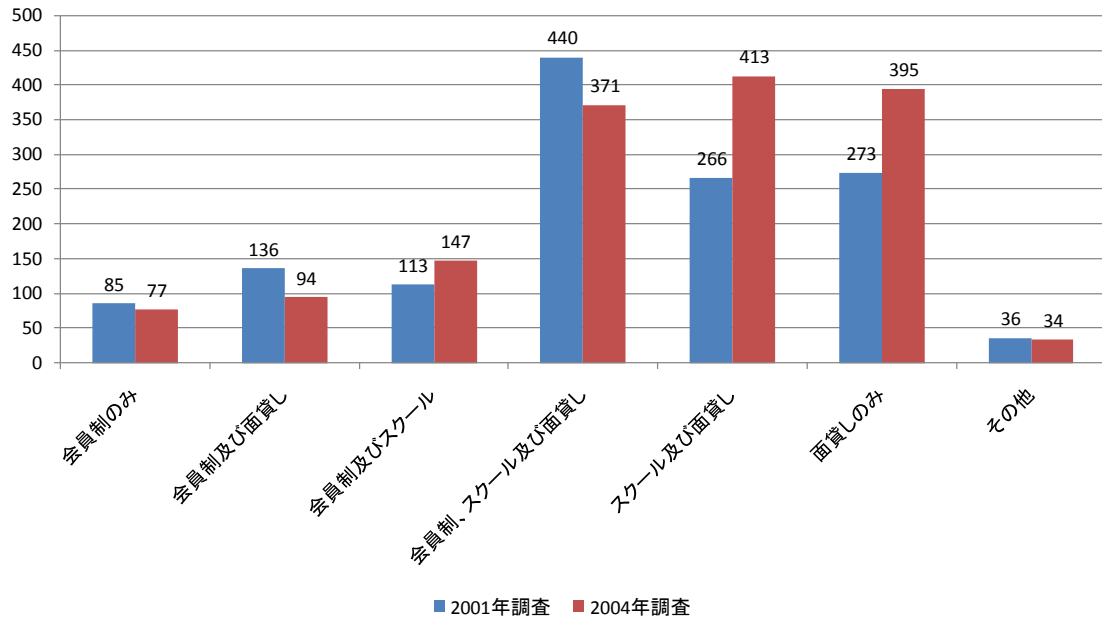
30 日本のテニス場数と会員数



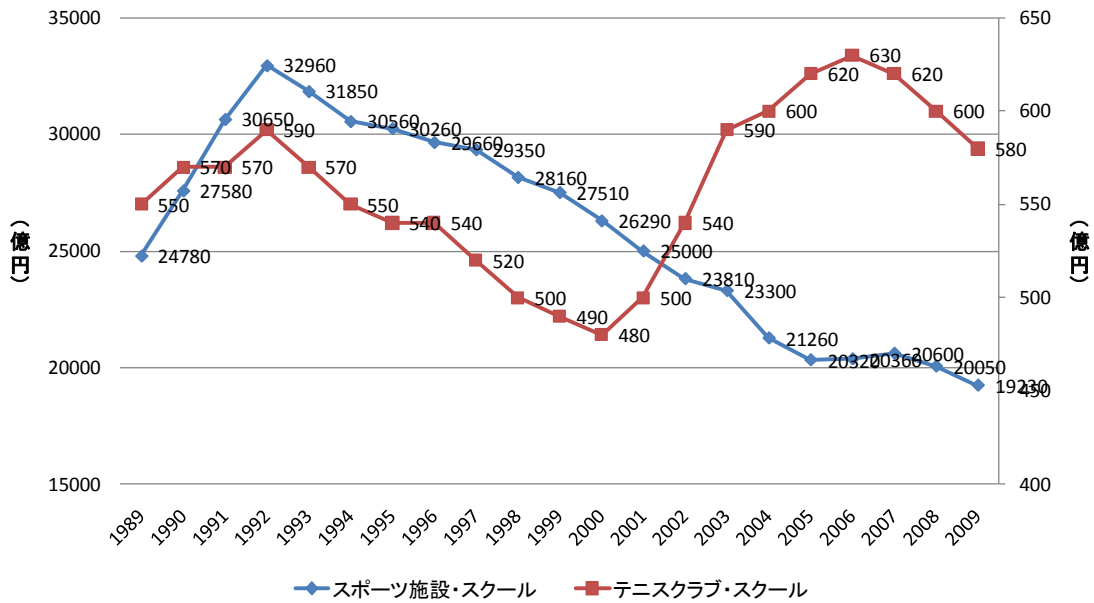
31 日本のテニス場及び会員数

		平成13年調査 平成15年1月発行	平成16年調査 平成17 年12月発行
テニス場(テニス練習場を含む)数		1 3 4 9 事業所	1 5 3 1 事業所
運営方 会	法別テニス場数		
	会員制のみ	8 5	7 7
	会員制及び面貸し	1 3 6	9 4
	会員制及びスクール	1 1 3	1 4 7
	員制、スクール及び面貸し	4 4 0	3 7 1
	スクール及び面貸し	2 6 6	4 1 3
	面貸しのみ	2 7 3	3 9 5
	その他	3 6	3 4
会員数	「法人会員」	4 9 3 2 口	3 8 1 3 口
	「個人会員」	1 1 3, 4 7 8 人	1 0 0, 2 6 5 人
スクール生徒数		2 4 8, 8 2 9 人	3 7 1, 7 4 3 人

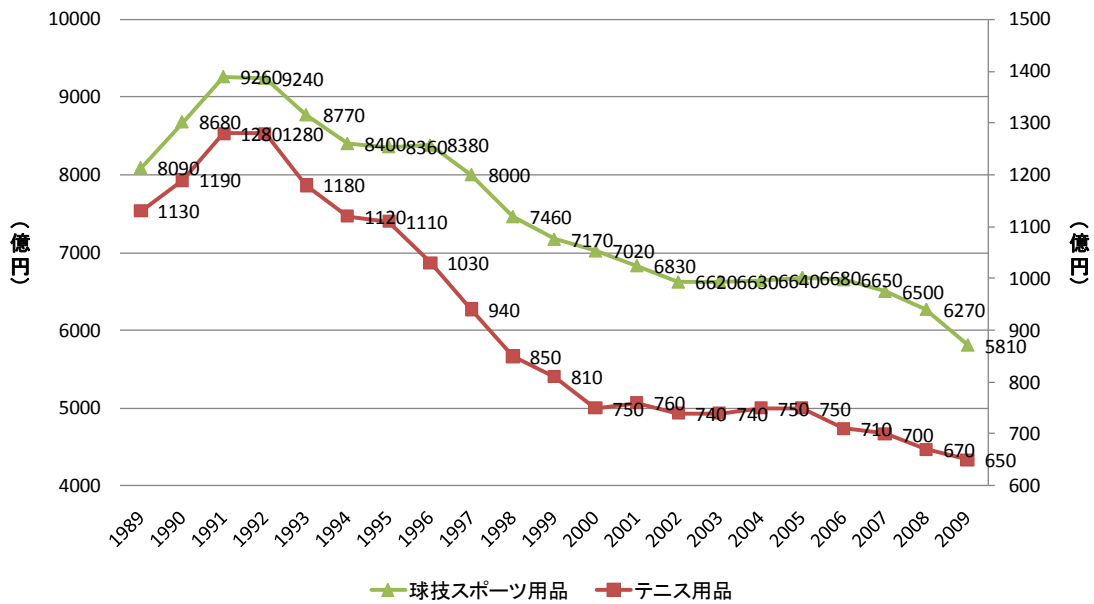
32 日本のテニスコート・種類と数



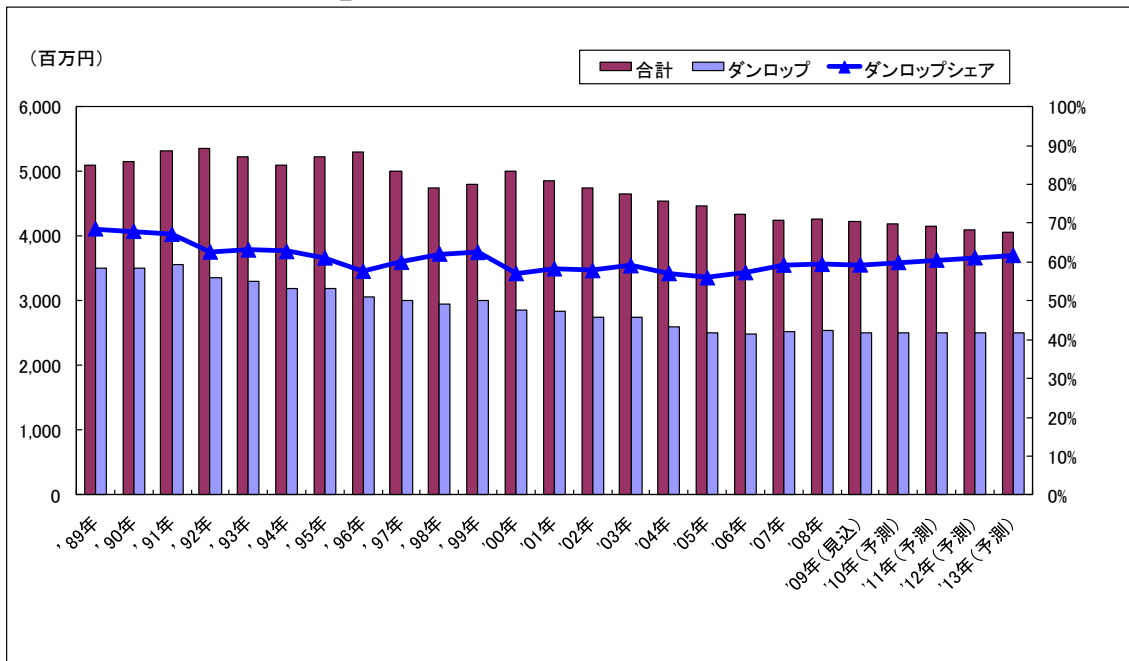
33 スポーツ施設・スクール及びテニスクラブ・スクール市場 出典：レジャー白書 2010



34 スポーツ用品産業及びテニス用品産業市場推移 出典：レジャー白書 2010



35 「硬式テニスボールメーカー国内出荷額」  
 うちダンロップ金額（青帯）とシェア（折れ線右軸）  
 出典：『スポーツ産業白書』（矢野経済研究所 発行）一部S R I スポーツ調べ



好不況、天候要因で多少前後するものの、消耗品のためプレー人口・頻度の減少傾向によりダウントレンド。ダンロップのシェアは6割程度でほぼ横這い。